
クロキ ユウ の ぼうけん

ユミル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロキ ユウ の ぼうけん

【Nコード】

N8024M

【作者名】

ユミル

【あらすじ】

俺、黒木悠は十七歳。

ある日、思い切ってあるビルから飛び降りてみた。
確実に死んだと思ったが、なぜか生きていて、どこかも分らない森の中に。

呆然していると、空からヒラリヒラリと一枚の紙が。

『かわいそーだから、たすけてあげました。えらいでしょ？by神』
……ふざけんなアアア！！

最初の一步（前書き）

作者は初心者です。どんなやつでも受け入れてやるぜ！という心の広い方はどうぞ見ていってください。

コメディ・シリアス・なんでもありです。

最初の一步

名前 黒木 悠。

性別 男。

年齢 17歳。

以上。

そんな俺は、今現在あるビルの屋上にいる。

眼下に見えるのは、マツチ棒ほどの大きさに縮小されて見える人々や、高速移動する色とりどりの車。

俺はゆっくりと屋上の手すりを乗り越え、大きく身を乗り出した。

一つ、深呼吸をする。

そして、飛んだ。

——で、気付いたら森の中でした。

「……………あれ？」

天から降りそそぐ優しげな木漏れ日。

遊んでいる小鳥達の美しい歌声。

風が木々を渡り、囁きあう。

……………ここは、どこだ？

人間は紙切れにさえも殺意を抱ける生き物である

飛び降りたら森でした。

……………どここの映画の宣伝だよ。

しかし、俺は確かに森にいる。

鳥達がうるさいぐらいに鳴き叫び、

木漏れ日（というか直射日光）が容赦なく照りつけ、

そこらじゅうで竜巻が発生しているような森に。

新手のいじめか？

なんで晴天と竜巻が同居してんだよ！

とりあえず竜巻から逃げるようにして足を進める。竜巻は縦横無尽に動き回り、樹齡がなんか古そうな大木を次から次へと根っこからもぎ取っている。

……………この森、よく無くならないな。

竜巻から充分距離をとってから一息つく。

俺はもともと体が丈夫なほうじゃないから、いちいち休憩しなけりゃやっていけない。

そこまで考えて、俺はハッとした。

そつだ、まず最初に――。

（ここは、どこだ！？）

あわてて周りを見回すも、目に入るのは日光・鳥・竜巻・森のみ。ここが日本なのかすら分からない。とりあえず地球であることは

間違いないと思うのだが――。

その時、頭上から一枚の紙切れが降ってきた。

空から紙！？　とかいう疑問は置いて、とりあえず振ってきた紙切れをつかむ。

そこには、日本語でこう書いてあった。

『ぶつぶー。はーずれ（笑。ここは地球じゃないよー）』

俺は瞬間紙切れを握りつぶすと竜巻の方向に放り投げた。

紙切れはいったん空中で停止し、竜巻の中心へと引き寄せられたあと姿が見えなくなった。

……………ふう。ポイ捨てはよくないけど、まあいつか。

さっきの紙の事は記憶から抹消し、再び思考を始める。
その時だった。

『ちよつとー、ひどいじゃないか』

いきなり、地面から人間が生えてきた。

によきによきと生え出たそれは、俺よりもでかい人型をしており、半透明に透けていた。

「……………は？」

あいた口がふさがらない。何だこの近未来的なカンジの物体は。

『ハロー、はじめましてユウ。神です』

次の瞬間俺はこのおかしな物体に思いっきり蹴りを食らわせた。

『べらばあアア!?!』

半透明なくせに律儀にダメージをくらって吹っ飛んだ(自称)神は、三メートルほど楽々と空を飛んだ後に大木にぶつかって跳ね飛ばされていた。

…………… 見ているこっちが同情してしまうほどの見事な飛びっぷりだった。

「というか…………… 何だ今のキック力!」

慌てて自分の足を確認するも、某名探偵で有名なあのちびっ子がいっているめちやくちゃ便利な靴ではない。俺がはいているのはどこにでもあるようなスリッパだ。

なぜスリッパなのか、という疑問は割愛させていただく。

問題は、異常なほど上昇したキック力だ。それと、なぜここにいるのか、ここは一体どこなのか。

俺が疑問に頭を悩ませていると、向こう側で何かがむくりと起き上がる気配がした。

俺が振り返ると、さっきのアヤシイ半透明の物体が痛みをこらえているところだった。

『せ…………… 背骨が……………』

…………… 見なかったことにしよう。

俺はすぐさま前に向き直り、少しでも距離をとろうとさっさと歩き出そうとした。が。

肩をがしつとつかまれた。

『ま……………まてやコラア……………』

ねえ、自称神。

あなたきつと神よりも背後霊に向いていると思いますよ。

神は必ず人型である（前書き）

感想を書いてくださった方、評価ポイントを入れてくださった方、
ありがとうございます！

このことを励みに、今後ともがんばらせていただきます！

神は必ず人型である

『で、話を聞いてくれる気になった？』

「はあ……………」

今、俺は地面にあぐらをかいて座っている。

目の前には先程よりも透明度が増した気がする（自称）神が、ふんぞりかえって俺を見下ろしている。……………こいつ、どつくぞ。

「んで、話つてなに？」

『この世界についての説明だよ』

神が話しはじめた。

『ここは私が初めて創った世界なんだ。他の世界の良い所を真似してね。』

だからここには人間もいるし、君の世界に居たような動物もいる。気候や自然も君の世界によく似ている』

「確かにそうだな」

俺は頷いた。さっき見た森や鳥達は、俺の世界の物とほぼ同じだった。

『でも、それだけじゃないんだ』

神は、ここで急に話を変えた。

『私は君の世界に憧れていた。特に……………』

「ちょ、近い近い近い！」

突然、神がこっちに身を乗り出して叫んだ。

『君の世界のゲーム!!』

「……………は？」

思わず呆然としてしまった。

「ゲーム……………だと？」

『そう！』

神はそれこそ効果音が出そうなくらいに目をキラキラと輝かせた。

……………ハッキリ言って、引くぞ。

『剣と魔法が重なり合うあのすばらしきファンタジーの世界！
ドワーフ・エルフ・ドラゴン・フェアリー達との出会い！

勇者と魔王の壮絶な戦いに、そこに至るまでの仲間達との友情・恋愛！

ヤバイ、ヤバすぎる！！！！！！』

ああ、確かにヤバイな。お前の頭。病院に行け。

つか、お前オタクだったんか。

『あの時だけは本気で君たち人間を尊敬したよ。人間の想像力は尽きることを知らない！

だから私は、あのファンタジーを現実にしたんだ！！』

……………つまり？

1、神ゲーム大好き。

2、ゲームを現実に。

3、イコールここファンタジーの世界。

「……………」

驚きすぎて声も出ない。

ここが、あのゲームの世界だと？

『あ、でも、別にどのゲームを参考にしたとか、そんなことはないから。』

全てのゲームのいいところをとって創ったからね。

おかげで街とか増えまくって、お城も多いしさ。

何も考えずに創ってたら、魔王が大量に出来ちゃって……………」

「は……………はあああああああ！？」

俺は思わず叫んだ。だってそうだろう。

「おい、魔王って最強なんだぞ！ それこそレベル1から育てた勇者でやっとな勝てるんだ！

なのに一匹じゃないって……………一匹倒してる間に他の魔王に攻められたらどーすんだよ！？」

勇者がかわいそうだ。

もとから俺は「パーティー組んで魔王倒すって、言っちゃったらリンチだよな」とか思っていた。

だがこうなると……………逆リンチ発生！？ いじめられっこの逆襲か！

そんな俺の必死の叫びを聞いて、神はニツコリと笑った。

……………嫌な予感。

『君って意外と頭イイね。そ。君が今回ここにいるのはそのためなの』

「……………え？」

『え〜と、簡単に言うと、こうなる』

1、テキトーに魔王じゃんじゃか増やしてやったぜ

2、あ、やべー。人間絶滅しそう。

3、勇者勇者勇者、ちよ、勇者足りないー！ 誰か持ってきて！

4、俺、召喚

「て……てめえ」

俺は怒りにプルプルと震えた。なんだって——！
それって完全にお前が悪いだろ！

つか——なんで俺！？

「一応勇者こつちで製造してただけで間に合わなくてさ。」

そこでちょっと休憩してたときに君見つけたの」

え、え！？ ていうか勇者製造って——工場か！？

その時、俺と神の目が合った。

『その命、捨てるくらいなら私がもらつ』

「……なんで捨てようとしたかは、聞かないのか」

そういうと、神はふつと笑った。

『なんとなく予想ついてるしね。それに、無理やり連れてきちゃったおわびもしたんだから』

「おわび？」

俺が首をかしげると、神はちよつと顔を引きつらせた。

「ほら……身体能力がめちゃくちゃ上がったでしょ」

「ああ！あのキツク力か！」

これで納得がいった。よかった、変な病氣とかじゃなくて。

病気なんて、今かかってるやつだけで充分だ。

『他にも色々あるんだよ』

神がうれしそうに披露する。

『視力もよくなったし、ここには魔法もあるから、魔力も最大にしたい。』

それと……君のその病気も』

体が、震えた。

『よほどの事がない限りは、発作も出ないようにしてある。でも、君の世界の病は強すぎて……ここまでしか』

『いいよ、別に』

俺はぶっきらぼうに言った。

「もともと一回捨てた命だ。気にしない」
『そう……ならいいや』

突然、神の姿が薄れ始めた。
どんどんと完全な透明に近づいていく。

「お、おい!？」

『んじゃ、私はこの辺で帰るわ。あ、そうそう、一つ言い忘れてた。なぜこっちに引っ張ってきたのが君だったのかというところ』

そして、神は完全に消えた。

「……最後まで言ってから行けよ」

気になる。めちゃくちゃ気になる。

そんな俺の声が聞こえたのか、また空から一枚の紙が。

ヒラリ、ヒラリ。

掴み取ったそこに書いてあったのは――。

『かわいそーだから、たすけてあげました。えらいでしょ？ by
神』

……ふざけんなアアア!!

決意と脱出

「まったく、あのエセ神、そのうち殺してやる……………」

ブツブツ言いながら森の外へと足を進める。

手元には、あの時空から降ってきた紙。

そこには、さっきいなくなったはずのエセ神が半透明の生首となつて浮かんでいる。

……………軽くホラーだ。

『だれがエセだ、だれが。私は正真正銘のカミサマですー』

しかもしゃべる。

「お前が本物だったらカミサマなんてそこらじゅうにあふれてるよ」

『ひつどーい。まあ、実際そうなんだけどね』

「は？」

俺は思わず手元の紙を凝視した。実際にはそこに浮いている生首だが。

神はすらすらとしゃべりだした。

『世界なんていくらでも存在するし、がんばったら何個でも創れるからね。世界を十個ぐらいつくっちゃったぜ　ってやつも結構いるしい？』

世界一つに付き神一人って決まってるわけでもないしね。

あとは、それぞれの世界の“内側”にいる神かな

「“内側”？」

『そー』

神はうなずいた。

『世界の中で勝手に生まれたり、私達が創ったりしたやつ。君たちでいう守護霊とか、仏とかキリストとか？』

山のぬしに海のぬし、そして何といってもフェアリー……！』

「あーはいはい」

俺は軽く流した。こいつはなぜかおとぎ話の生き物が好きらしい。まあこつちには関係ないが。

『ちよつとー、流さないでくれない？これ結構重要なんだけど』

「分かったから、顔を近づけてくるな。この紙破るぞ」

『えー、それは困るー』

なんでも、この空から降ってきた紙は、神をここに実体化させるための媒介だとか。

これがないと、力を無駄に消費してしまつらしい。

別に、破れたらまた降らせればいいと思うのだが。

『それが出来ないからいつてるんでしょー』

「何で出来ないんだよ。魔王は馬鹿みたいに増やしたくせに」

『そりゃ魔王はカッコいいもの。大好きなもの。がんばっちゃうじやん？』

でも紙だとね……やる気が出ない』

「お前のやる気の問題か。働けエセ神」

魔王なんていう面倒なものを増やすな！ 人様の役に立つやつを創れ。

『んー、確かにやる気がないのも自覚してるけど、それだけじゃないの。世界の仕組みっていうのが関係しててね』

神が説明する。

『世界の大きさによって、そこに存在できる物体の数は決まってるの。』

で、私みたいな神は、それにあわせていろんなモノを創る』

神が周りを見回した。

『大地を創るために土と砂と石を創って、海を創るために海底と塩と水を創って。』

それぞれに適応する植物や動物を創る。

葉っぱ一枚でも、人間一人でも、物体としては両方一つだ。それを調整して、うまく循環させる』

「……つまり、規定の数以上のものは創れねえのか」

『そー。今この世界はギリギリでね。他に創らなきゃいけないもので手一杯なの。私が創ったものが自然に数を増やすのはいいんだけど』

「ふうん」

俺はそこであらずいたが、疑問が一つ生まれた。

「待てよ。この紙を破ったらその分物体の量が減って、もっと紙を創れるようになるんじゃないか？」

『……………ねえ、君ってバカ？』

「殺す」

『ぎゃーす！！　ちょ、ストップストップ！！　目が、目が怖いよ君イイイ！！？』

だれがバカだ。俺はこの生首を殴ろうと拳を振り上げた。神が必死に首を振るが、知るか。

俺は、問答無用で生首をぶん殴った。

ガンッ！！　といい音がして、紙の上の生首が何度も高速回転した。たぶんかなり吹っ飛んだ。

まあ、殺意がこもってたし。

つか、やっぱり半透明でもダメージはいくのな。しばらくして回転が止まった生首は、白目をむいて固まっていた。

……ちよつとやりすぎたか。

とか思わないのが俺である。

俺は気絶した（ように見える）生首にビンタを食らわせた。
バッチイイイイイイン！！！！

『ぎゃああああああああ！！？』

「俺の前で気絶してるフリなんて通じると思ったか。張り倒すぞ」
『もうしてるし！！』

涙目なのは放っておいて、ズイツと神に詰め寄った。

『ち……近い……です』

「気にするな」

『即答！？』

俺は神の目を見つめた（というかにらんだ）。

「で、俺がバカだつて？」

『いや……えつと……』

「早くしろ」

『理不尽ンンンン！！』

俺が神の頭をつかむと、ようやく話し始めた。

頭がミシミシいつてるのは、気のせいだ。（言い切った！？） b

y神）

『えー、たとえこの紙をバラバラにちぎって燃やして風に飛ばしても、その物体はなくなったことにならないの』

「なんでだ？」

『それは、もとあつた紙が姿を変えたただだから。物体のモトになる、核がこつちに帰ってくるためには、その存在が完全に消え去らなきゃいけないの』

たとえばね、と神は例を挙げた。

『君たち人間だったら、死んだ後に埋葬されるでしょ？ それから肉が他の動物や虫に食われたり、骨がだんだん風化したりして、その人を構成する物質が完全に“消滅”しないとダメなわけ』

「へー」

『だから、紙を破つても核がこつちに帰ってこないし、私が媒介として使えないっていう損ばかり。』

君を生きてるうちにこつちに引っ張ってきたのもそういうこと。レベル1から育てることも出来るけど、今はあいにく満員なのよ』

俺は納得して神から手を離れた。

神が頭をさすっているが、何も見えない（ことにする）。

だいぶ歩いたからだろうか、ようやく森の出口らしきところに近づいてきた。

かなり遠くにだが、うつすらと森が開けた場所が見える。

『で、そろそろ本題に入っている？』

「本題？」

『私がこんな痛い思いしてまでここに来た理由だよ！』
すつとぼけたら危うく噛み付かれそうになった。

『勇者である君には、まずは王都に向かってもらおう。とりあえず、だれでもいいから王族と会って君の勇者という存在をアピールするんだ!』

「……なんだかますますファンタジーっぽくなってきたな」

『だってファンタジーだからね!』

何でお前はそんなにうれしそうなんだ。

「……はあ、行くか」

観念して、俺は森を抜けた――。

――一つの決意を胸に。

決意と脱出（後書き）

……ようやく森を抜けましたね。一息つけてほっとしています。
さて、この後は目指せ王都！どんな展開になっていくのか、私にも
まったく分かりません！
見放さずに見守っていただければ幸いです。

到着（前書き）

はい、作者のユミルです。

ある親切な方からのアドバイスを頂き、今までの話全てを一度編集しました。

これにより読みやすい作品になっていると思われます。

作者は初心者です。何かありましたら遠慮なくしかりつけてください。

では、どうぞ。

到着

はい、黒木悠です。ただいま王都に到着いたしました（わっパチパチ）。

え？　なんですかその人。「めんどくさいから省いただろ？」
いやいや、そんなことはありません。

ただ、何事もなく王都についてしまっただけです。

あの森からこの王都まで徒歩十五分。

神が媒体に使っていた紙を地図にしてもらい、平坦な道のりをほてほてと歩いて、はい　到着。

……うん、寂しかった。

神もいつの間にか消えるし、だれにも会わないし、なんも無いし。
門が見えてきたときには涙がこぼれそうになったね。

で、その門の前。

さすが王都の門だけあって、その威厳ははかりしれない。古くとも重厚なこの門は、今までずっと王都を守っていたのだろっ。両端にある見張り台から見える兵士達も、表情だけでこの仕事に誇りを持っていることが分かる。

が。

（っ、怖え……………）

訪れる人々に恐怖を与えることもある。

門というよりも壁といったほうがふさわしいかもしれないこの石造りの門は、高いわでかいわ厚いわで、人々に向けて発する威圧感が半端ない。それにくわえて出入国のチェックをしている兵士さんがやけに怖い。

ガタイのいい体付きに腰にさした剣。歴戦の戦士っぽい顔の傷。

……子供は無理だな。うん。

とりあえず入国審査の列に並ぶ。そんなに人がいないため、意外と早く兵士さんに会えた。

こ、心の準備が………！

「次！」

「は、はい！」

思わず声が裏返る。変に思われない程度に最大限ゆっくりと兵士さんに近づいた。

「名前は」

「ユウ・クロキです……」

神から、この世界は名前が先に来るのだということも教えてもらっていた。

「歳は」

「１７です」

「入国理由は」

「か、観光に……」

「……観光？」

「は、はい」

ない頭を振りしぼって考えた入国理由を問い返され、表面上はいつもの顔でも、内心はめちゃくちゃ慌てていた。

「……そうか。いっていいぞ」

「……………」

「……？ おい」

「は！？はいすみませんすぐ行きます！」

やばい。一瞬記憶が走馬灯のように頭の中を駆け巡っていた。
どうしようこれ捕まる？ 捕まるのかな何死刑？ 死刑になんの俺あどうしようせめて彼女の一人でも欲しかった——みたい
な。

最後の部分は言いふらしたやつコロス。

とりあえずダッシュで門を抜け、いよいよ王都に足を踏み入れて

——驚いた。

「う、わあ……………」

——そこには、まさしくファンタジーの世界が広がっていた。

入ってすぐに市場があり、様々な店が客を集めようと声を張り上げている。それだけなら俺の世界となんら変わりがないが、商品が一味も二味も違っていた。相当な人の数でだいぶ混雑しているにもかかわらず、俺の目は自然と商品に釘付けになる。

—— 売っているのは魔法の品々だった。

薬草の束から回復薬を取り扱っている薬屋。

よろいやかぶと、盾などの防具を扱う防具屋。

現在の日本国では一度もお目にかかったことがなかった本物の剣
やオノを売る武器屋。

杖から魔術書から水晶から、怪しげなものが数多く置いてある魔
法具屋。

—— 全てが俺を魅了した。

到着（後書き）

やっと王都に到着。

このあとは身支度を整え、誰かと接触させたいと思っています。
なかなか難しい……（汗

服屋と色（前書き）

なかなか話が進まない……。

服屋と色

「……うし、とりあえずこんくらいか」

今、俺は市場から一本横道にそれたところにいる。

大通りが広すぎるせいで、一つ通りが違っただけですごく静かだ。で、手の中には大量の荷物が。

「めばしいものは全部買ったかな……」

ついさっきまで、俺は市場で買い物をしていた。

とりあえず目に付いたものを片っ端から買い込んだ。おかげで荷物は両手で抱えきれないほどになってしまっている。

それこそ薬草やら水晶やら魔術書やら食料やら寝具一式やら多種多様だ。

え？ 金はどうしたかって？

あの例の紙から神を呼び出して、金を巻き上げ……ゲフンゴフン、いただきました。

袋一杯の金貨と、四次元ポケット的なカンジの不思議カバン。その金を使い切らんばかりの勢いだっとな。

とりあえずカバンの中に荷物を全部放り込んで、疲労した両腕を大きく回して伸びをする。

市場はとても混雑していて、つぶされないように体を張って筋肉が疲れた。

ちなみに、最初に加減が分からず思いっきり突き飛ばしてしまつた人は他の人を五人くらい巻き込んで吹っ飛んでいきました。

……だれが驚いたって、俺が一番驚いたよ。

「他に必要なものは……………防具と服と武器、か」

ちなみに服は病院着です。

いや、飛び降りたところが病院だったから、着替える暇がなかったんだよ。

おかげで市場にいた人々から白い眼で見られていた（気がする）。

「…………とりあえず服だな」

よし、と気合を入れて、再び市場の喧騒の中に入ってしまった。

~~~~~

しばらくさまよつた後に服屋（らしきもの）を発見。

チラッと中を覗くと、カウンターに、座っている立派な体格のおばさんが見えた。

ここでいいか。

ドアを引いて中に入る。気付いたおばさんがこっちを見たあと、少しだけ目を瞠った。

そのあと、興味深そうに声をかけてきた。

「いらつしゃい。珍しいね、“黒”のお客さんなんて」

「“黒”？」

「おや、知らないのかい」

カウンターに近寄りながら問いかけると、

おばさんはちよつと驚いたようだ。田舎から出てきた若者だとも思つたのдарう、詳しく説明してくれる。

「お前さん、地方の出身かい？ まあ、そうなら仕方ないね。服もなんだか特徴的だし」

「故郷の民族衣装でね。それより、“黒”っていうのは一体何なんだ？」

ごめんおばさん。故郷の民族衣装は着物であつてけつしてこんなジジくさい病院着じゃありません。

なんて言葉を心の中でつぶやきながら、続きを促す。

「“黒”っていうのはね、黒目黒髪 of 容姿を持ったやつのことさ。

他にも、赤目赤髪なら“赤”、それに、青目青髪なら“青”って呼ばれる」

「じゃあ、おばさんは“金”か？」

「だれがおばさんだい。あたしはまだ二十代だよ」

「ついつてえエエエ！！」

思いつきりげんこつをくらつた。

目から火花が飛んだ気がしてふらふらする。

「つかおばさん二十代？ うそだろ詐欺だろお詫びして訂正しろ。」

どう見たつて、子供を3人は持つてて旦那を尻に敷いてそんな三十代後半の主婦だろ。

「それに、その答えもハズレ。あたしは“金”じゃないよ」

「え？ でも金髪に金目……………」

「この目はね、金に見えるけどただの明るい茶色さ。だから、あたしはただの“無色人”だよ」

「む、“無色人”？ いやでもおばさ…………… オネエサンは透明じゃないよな？」

オネエサンからの刺すような視線に慌てて言葉を訂正する。

「つか、“無色人”とはなんだ。」

「あんた、本当に何も知らないんだね……………」

呆れたような声とため息は無視する。

「“無色人”ってのは、ようするに“色”の称号を持ってないやつのことだよ。逆に持つてるやつのを“有色人”って呼ぶ。あんたは“黒”の称号をもってるから“有色人”、あたしは持ってないから“無色人”さ」

「ふーん。でもさ、そんなもんもってて何になんの？」

「“有色人”ってのは、ようするにお貴族さまのことさ。色の称号を持つていないやつよりも、持つているやつのほうが格段に優遇される。他にも色ごとに階級があつて、一番上が“金”、次が“黒”、他に“銀”やら“赤”やらいろいろあつて、一番下が“白”だね。“白”は、唯一“有色人”でありながら“無色人”よりも階級が低くて、その分世間から冷たくされてる」

「…………… それって、さ。差別だよな」

俺がそういうと、相手はすこし驚いたようだった。続いて、優しい声が降ってくる。

「あんた、相当平和なところで育ったみたいだね。でも、そんな考えここでは捨てな」

厳しい声音と視線。

「ここじゃ、差別なんて当たり前、それが常識なんだ。奴隷なんてのもいる。ちよつとの失敗で“無色人”なら打ち首さ。普通なら、“有色人”がこんな店に入ること自体がありえないんだ。あんたみたいな綺麗な“黒”は初めて見たから、悪いようにはされないだろうけど、この事に口出しするんじゃないよ。そんな事をしたって、何の得にもなりやしない」

「……………そっか」

おばさんが表情を緩めた。俺が納得したと思ったんだろう。

「なら、――」

「でも、」

でも、と俺は続けた。

「俺が今まで生きていたところでは、全部が全部同じだった。この言葉を借りるなら、家族も親戚も友達も赤の他人も、全員が全員“黒”さ。中には自分から髪や目の色を変えるやつだっている」

おばさんが、驚きに目を見開いた。

「だから」

俺は、笑って言ってやった。

「色があるうがなろうが、階級が高かろうが低かろうが、俺には何の関係もないのさ」

……しばらくあと、おばさんはふっと息を吐いた。

「……あんた、きつと早死にするよ」

「そんな気はサラサラないけどな」

俺たちは顔を見合わせて、どちらからともなく笑い出した。

ひとしきり笑いあつた後、俺が話を切り出した。

「で、服を買いたいんだけど」

「服かい？確かにそんな格好じゃ目立つだろう。いいのを選んでやるから、少し待ってな」

おばさんはそういつて店の奥に消えると、程なくしてすぐに戻ってきた。

「けっこういいヤツ選んでやったから、高いよ」  
「だいじょーぶ。金ならあるから」

ふところの袋から金貨を取り出してジャラジャラ音を鳴らすと、おばさんにまた呆れられた。

「ほんと、アンタみたいなヤツは初めてだよ。はい、金貨三枚ね」

「ありがと。奥で着替えてきても良いか？」

「いいよ。サイズがあわなかったら言いな」

金貨を渡して奥の試着スペースへと入る。俺の世界とそんなに変わらない服と、まったく着方が分からない服に混乱しながら着替えを済ませた。

その間に。

「ほんと、おもしろいやつだねえ……」

『俺には何の関係もないのさ』

この国にはびこる“闇”。自分達はそれを知りながらも、それが「必要な犠牲」だと言い訳をして、目をそむけて逃げていた。

でも、そんな“闇”を、あの少年は鮮やかに断ち切って見せた。いつそ軽々しいほど簡単に。

「ほんとに、おもしろいやつだよ……………」

入ってきた新しい“風”。

「何か、変わるかもしれないねえ…………」

どちらに転がるのかは、まだだれにも分からないけれど。

## 服屋と色（後書き）

さあ、やっと神以外の人物登場！

これからちよいちよい出していく予定です。

つーか、自己紹介させるの忘れたアアアア！！

## “白”と“黒”

着替え終わり、奥から出てきた俺を見て、おばさんは満足げに顔を緩ませた。

「へえ、似合うじゃないか。サイズは大丈夫かい？」

「ああ、平気だよ。ま、馬子にも衣装ってやつかな」

「なんだいそれ？」

「俺の故郷のことわざだよ」

俺は着替えたばかりの服を見下ろした。

黒で統一された色が、髪と瞳の色にとってもあっている。

動きやすい素材で作られたシャツやベストに、ズボンにつけられたベルト。

ベルトには袋などを吊り下げられる機能が付いている。

そして、フード付きのマントと来れば、

（俺、冒険者っぽい！！？）

やべー、なんか感動する。

「で、あんた宿は取ったのかい」

「え、宿？」

新しい服に見とれていた俺は、おばさんの問いに首をかしげた。

「今のうちに取つとかないと、夜になってから野宿、なんて事になりかねないよ。ここは曲がりなりにも王都。旅人や観光客の数が半

端じゃないんだからね」

「へーえ。んじゃ、一回行ってみるかな。こっから一番近い宿は？」

「どんなのでもいいなら色々あるけど、私のお勧めは【黒の巣】だね。値段も手ごろだし、結構いい穴場だよ」

「ん。何から何までありがとおばさん」

「おばさんじゃないって何回言ったら分かるんだいこのチビガキが  
！！」

「つてえエエエエ！！」

本日二度目の制裁。頭が割れる脳細胞が減る背が縮む！！

「じゃあ名前！ 名前教えてくれ。俺はユウ・クロキ」

「ふん、ガキがいつちよまえによく言うよ。あたしはティズ・クロ  
ード。困ったことがあったらなんでもいいな」

「了解！ じゃあなティズさん」

俺は服屋をでた。

~~~~~

で、俺は迷うことなく【黒の巣】について、部屋を一つ取った。

なかなかいい部屋で、狭いけどベットふかふかだし、文句なしだ。

窓から外を見ると、ようやく日が大地に埋まろうとしていた。

「腹減った……………」

ここに来てから何も食べていない。

一度食堂に下りて従業員の人に聞くと、ここでのサービスは朝だけらしい。

一度自覚した空腹感はなくなるところか更に存在をまし、俺は外の露店で食うことに決めた。

~~~~~

で、歩くこと十分強。

露店を適当に冷やかして歩きながら、食べ物を探す。  
しかしどれがうまくてどれがまずいのかがさっぱり分からず、いまだに食べ物にはありつけていない。

俺の胃は繊細なんだよ！異世界まで来て食中毒なんて起こしたくない。

食中毒は軽くトラウマだ。

とりあえず、うまい匂いを発見したので歩いてみる。  
うまい匂いのするほうにひたすら歩く。

歩いて、歩いて、歩いて。

気付いたらどことも分らない路地の中だった。

ちゃんと匂いを追ってきたのだが、ここがどこだかさっぱり分らない。

とりあえず、また歩く。

歩いて、歩いて、歩いて。

見えてきたものは、うまいものとはかけ離れた光景だった。

「ヒヤハハハハ！ 上玉じゃねえかこいつア。しかもこのガキ“白

”だぜ!”

「いいこにしなアおじょーちゃん。悪くはしねーからよ」

声につられて横の路地を覗き込むと、聞こえた声とあわせて、他にも三人ほどの柄の悪い男達。合計五人の野郎が、何かを囲んで立っていた。

一人がかがみこんだ。

「しっかしまあ綺麗な顔なこと。“白”のガキっただけでも高えのに、この面じゃあ、どこかのお貴族様にかわいがられるんじゃないか？」

「ヒヤハハハハ!! 違いねえ!!」

俺を見ると、野郎たちに囲まれているのは、まだ幼い少女だった。

おびえたようにうずくまり、震えている。さらに、俺が驚いたのが髪だ。

腰まである長い髪。そして、その色は綺麗な白だった。

じいちゃんばあちゃんの縮れたような毛ではなく、美しくなめらかな髪。

(キレイだな……………)

素直にそう思った。

「じゃ、さっさと売り飛ばすか」

「金貨何枚になることやら……………ヒヒヒ!!」

男達が少女の腕を無理やり引つ張った。

次の瞬間、俺はそいつらの前に姿を現していた。

「っ！！？ 誰だテメエは！」

俺を見つけた男が声を上げる。

「別に、通りすがりの若者ですけど。オッサンどもがいたいけな少女を誘拐しようとしているのを、見過ごせるわけないだろーが」

「ああ！？ てめえヒーロー気取ってんじゃねえぞ！」

「見られたのはまずいな。やっちまえ！！」

一人、二人と大声を上げて襲い掛かってくる。

だが、あまりにも遅い。

「うっせーんだよ糞が。ご近所さんの迷惑も考えて、」

俺は思いつきり足を引いて、あの時エセ神を蹴ったように振りぬいた。

「静かにしとけッッッ！！」

二人の体に俺の脚がめり込んだのが分かった。

二人は悲鳴をあげるまもなく吹っ飛び、他の仲間にぶつかって気絶した。

啞然としている男達に声をかける。

「さ、さっさとその女の子を渡してもらおうか」  
「ふ、ふざけやがってエエエエ!!」

その時、薄暗かった路地に一筋の夕日が差し込んだ。  
男達の背中の中からは差ししてくる光が路地にあふれ、視界が一気に明るくなった。

「っ!!!? や、やべえ逃げろ! あいつ“黒”だ!!」  
「う、うわああああああ!!」

俺の髪と目の色が見えたらしいそいつらは、気絶した二人を担いであっという間に消え去った。

「ったく、逃げるくらいなら最初ッからすんなっつーの。そんなにこの髪が怖いかね?」

ぶつぶつ言いながら少女に近づく。と、彼女はおびえたようにあらずさった。

しかも目には涙。

(……なんか、悪いことしてる気になってくんない……。それにしても)

「キレイな髪だよな」

少女は驚いたように目を見開いた。  
俺はそんなことに気付かず続ける。

「俺がじいちゃんになってもここまで綺麗にやなんねーぞ。しっかしうまく色素抜けてるよな」

じろじろ見ながら一人でつぶやいてみると、おずおずと少女が口

を開いた。

「あ、あの」

「ん？」

「ありがとうございます。助けてもらって……」

「いや、別に？　つかそっちのほうが大丈夫？」

「は、はい。なんともないです。“商品”には傷をつけないので…

…」

「……“商品”？」

俺は顔をゆがめた。さっき話したばかりのティズさんの声が頭に  
よみがえる。

『ここじゃ、差別なんて当たり前、それが常識なんだ。奴隷なんて  
のもいる』

奴隷。“商品”とは、そういうことなんだろう。

（でも、）

まだ十歳ぐらいの子供が、そんな事を言う。

それは、酷く哀しい。

「なあ、お前、名前は？」

「……白<sup>ハク</sup>。でも、この名前は嫌いです。“白”であることを、忘れ  
られなくなる……」

「そ。……んじゃ、お前の名前は今から“ゼロ”だ」  
「え？」

少女——ゼロが驚いたように目を見開く。

「“ゼロ”っていうのは、俺の故郷で“なにもない”ことを表すんだ。お前はお前、色なんて関係ねエ」

俺は笑った。

「お前、気に入った。一緒に来ないか？」

少女はしばらく何も言わなかったが、少し後に泣きながら笑った。

「……………っはい!!」

ゼロの目じりから、最後の一滴が零れ落ちた。

“白”と“黒”（後書き）

結構強引に仲間にしちゃいました。とりあえず一人目ゲットです。  
次は、何も知らないユウ君に、ゼロからこの世界の事を教えていた  
だこうと思います。

誰か、文才分けてください……………！

## 夜と眠り（前書き）

なんかめっちゃ短いです……。  
すいません。

## 夜と眠り

俺たちは、とりあえず露店で夕食を食べて宿に帰った。

メニニューは、ゼロのお勧めでカルの串焼き。カルっていうのは何か分からないけど、豚みたいな味がした。

ゼロには四次元ポケット的なカバンの中から出したフード付きローブを着せた。これもテイズのところで買っておいたもので、俺のサイズだからぶかぶかだ。前がちゃんと見えているか心配だ。

俺はゼロの歩幅に合わせてゆっくりと、ゼロは長すぎるローブの裾によたよたしながら歩を進めていた。

で、宿屋。

帰ってきたときには満室になっており、ゼロの部屋が取れなかった。んで、今は俺の部屋のベッドの上で、ゼロと向き合っている。

……別にやましいことなんてなにも考えてないからな！

ちよ、その人！そんな汚らしいモノを見る眼で見ないで！

仕方がないだろ！この部屋ベッドか床以外に座るところがないんだよ！つかベット以外の家具がない。せいぜいベッド脇の小さなテーブルぐらいだ。

「……あの」

「ん？なんだ、ゼロ」

意識をアッチ（どっちだ！？）に飛ばしていると、ゼロが声をかけてきた。

「ご主人様のお名前を教えてくださいてもよろしいでしょうか？」

「ッげほごほがは!!」

「ご、ご主人様!？」

思わずむせた。

だって「ご主人様」だよ!? なんなんだそのメイドさんとかが  
言いそうな名称は!!

俺にはそっちの気はない!! ……はずだ!!

「お、俺はユウ・クロキ。ユウって呼んでくれ、頼むから」  
「……? はい、分かりましたユウ様」

またむせそうになったがこらえた。「ご主人様」よりはましだ。  
息を整えてから問いかける。

「で、ゼロ。なんであんなところに居たんだ?」  
「……はい。お話します」

ゼロの話 요약するとこうなる。

元は山奥の農村で生まれ育ったが、奴隷商人達に村を襲われ、捕ま  
ったあとは街を転々としていた。そして、近くの街で買われたが、  
ここについてから隙を見て逃げ出してきた。  
ということらしい。

「へえー」

「ユウ様に助けていただいたのは、ちょうど逃げ出してから一時間  
ほど経ったときです」

走りつかれて休んでいた所を、あのごろつきどもに見つかったの  
だとか。

奴隷、ね。いまだに実感が沸かず、よく出来た映画を見ているような感覚だったが、現実を起こっていることだとなんとか認識する。

「本当にありがとうございます。あのままだったら、きっとまた奴隷商人の所へ連れて行かれてしまったと思います」

「いいって、いいって。こっちがムカついたからやっただけだし」

頭を下げてくるゼロを、手をヒラヒラさせてやめさせる。

本当に、感謝されることなんてないのだから。

「ま、いいか。とりあえず寝るぞー！っと言いたいけども、どうするかな……？」

さっき言ったように、この部屋にはベット以外の家具がない。一応床にカーペットらしきものがあるが、それだけだ。

俺が考えていると、ゼロが慌てたように声を発した。

「ユウ様はベッドでお眠り下さい！ わ、私は床で結構ですから！」

「そーいう訳にはいかねーだろ——が！」

「ひゃあ!？」

慌ててベッドから降りようとしたゼロを引き止めた、つーか首根っこを引っつかんだ。そのまま布団をかぶせる。

「ユ、ユウ様!？」

「はい逃げるな暴れるな落とすぞ」

「は、はい」

「ん、よし」

バタバタと手足をばたつかせるゼロを大人しくさせ、自分も布団

に潜り込んだ。

「じゃ、諦めて寝ろ。おやすみ」

「は、はい、おやすみなさい」

……いま思えば、こっちに來てからはじめての睡眠だ。色々知らないところで疲労がたまっていたのか、俺は五秒後には深い眠りに落ちていた。

## 夜と眠り（後書き）

……話がすすまね！。  
登場人物少な！。

……文才ないな、自分（涙

## 世界観と“術”と病

すーばーらしいーあーさがきた、きーばーうのーあーさーだ、  
よーろこーびにむねをひーらけ、おーおぞーらあーおーげー。

……なぜか知らんが、夏休み恒例の朝の体操の歌が出てきた。ナ  
ぜ。

むくつと体を起こし、寝ぼけ眼のまま、周りを見回した。

そこにあるのは、優しい朝の光に照らされた室内と、見慣れない  
木製の壁と床。

ふつと隣を見ると、昨日拾った白い子供がすやすやと寝息を立て  
ている。

見慣れた白く硬質な病室とは違う、暖かな空間。  
窓の外から鳥の声が聞こえた。

「……ふああああ」

あくびが出た。まだ朝の早い時間帯らしい。もう一眠りしようと  
もぞもぞと布団の中に潜り込んだ。  
もう一眠りぐらい、しても構わないだろうと思いつながら。

——で、気付いたら昼でした。

真上からさんと降り注ぐ太陽の光に、活気にあふれる市場の

呼び声で目が覚めて、こんなに時間がたったことに驚いた。隣を見ると、朝と同じ格好でゼロが寝ていた。

上体を起こし、ベッドから降りる。大きく伸びをして、体をほぐした。

(……ずいぶんよく寝たな)

体の軽さに驚きながら、こうして立っていられる喜びを噛みしめた。

(今日はどうするか)

第一に食事を取って、その後にゼロの服だな。またティズに世話になる事になる。

とりあえず、ゼロを起こすことにした。

~~~~~

「すみません……ユウ様をお起こしすることができず……」

「ゼロ、いいって言ってたんだろ？ それよりほら、服選べ服」

「は、はい……」

ここはティズの服屋である。遅い朝食、というか昼食を食べた後にやってきたのだ。ティズに言って、ゼロ用の服をいくつか出してもらった。今まで来ていた服はぼろぼろで、とても着れるような代物ではない。

ゼロの前には色とりどりの服が並べられている。ゼロは落ち込みつつも、真新しい服を見て目を輝かせ始めた。

(……そりやそうだな)

ゼロも女の子だ、買い物を楽しいのも当たり前だろう。それに、いままでろくな生活をしてこなかったはずだ。ゼロはとても楽しそうに見えた。

ティズが奥からなにやら引っぱり出してきた。

「お嬢ちゃん、アンタにはこういうのが合うと思うよ」

そういつて取り出したのは、いくつかの腕輪だった。

「なんで腕輪なんだ？」

「そっぴゃ、アンタは何も知らないんだっけ。こういう腕輪とかの装飾品は、ほとんどが宝石や結晶なんかで作られてるんだ。それに魔職人が魔力を込めると、立派な魔法具になる」

ティズは腕輪をもてあそびながら言った。

「魔法具には能力を高める効果があつてね、冒険者や傭兵なんかの間では必需品さ」

「……俺の時は何にも出さなかったくせに」

「あんたは今身につけてるやつだけで充分さ。どれだけ奮発してやったと思ってるんだい。もう防具を買わなくてもいいくらいだね」「これ、そんなにすごいのか？」

俺は今来ている服を見下ろしたが、そんなスゴイ風には見えない。まあ、こんな服を着てるだけで俺に取っちゃあスゴイんだけど。

「全部で金貨三枚だろ？ 金貨一枚で平民の半年分の給料になるよ」「……まじでか」

平均月収を二十万円とすると、半年分だから六ヶ月……百二十万！？

つまりこの服は三百六十万円！？

「うそだろ……」

「本当だよ。まったく、金勘定も出来ねえのかい」

ティズがあきれたようにため息をついた。

「じゃあなんで腕輪なんだ？ 首飾りとか色々あるんだろ？」

「もともと“白”は魔法が使えないんです。でも、武術に関しては天才的な能力を見せるんです」

「武術はたいていが腕と足を使うからね。目標に近い装飾品を選んでおいたほうが効率がいいのさ」

「武術か……ゼロも戦えるのか？」

俺が聞くと、ゼロはフルフルと首を振った。

「私は戦えません。産まれた時に施された“術”のせいで……」

「“術”？」

「はい」

ゼロはおもむろに両腕の袖を肩までめくった。

あらわになったそこには、なにやら幾何学的な模様が刻み込まれている。

つか、ティズさんが邪魔でよく見えねえ。

「私達“白”は、男は産まれた時から武術を叩き込まれますが、女はこの紋様を刻まれるんです」

「“封印”の紋様かい。はじめてみたねえ」

「はい。女は戦えないように、“白”の特性を封じます。それは何十年も前から続いてきたことです」

ゼロの話を聞きながら、俺は首をかしげた。

「なんで封じちまうんだ？ 話によれば“白”は差別されてるんだろ？ それだったら、少しでも戦力を蓄えておいたほうがいいんじゃないのか？」

「いいえ、差別されているからこそです」

ゼロは顔をうつむかせながら言った。

「差別されているからこそ、女に“術”を施して抵抗できないようにするんです。……いざという時の供物のために」

「……信じられないな」

「そうかい？ あたしは信じるけどね。言っただろ、こんなことは“当たり前”なんだよ。あんたがどんなに平和なところで育ってきただか知らないけど、あんたのものさしで世界の全てを測ろうとするんじゃないよ」

ティズは言った。まるで幼い子供を諭すかのように。

“当たり前”。……本当に、そうなのだろうか。

「“当たり前”ね……じゃあ、あんたはそれに納得してるのか？」

ティズは顔をこわばらせて凍りついた。まるで、聞きたくないと思っていたように。

ゼロもうつむいてしまい、ぎこちない雰囲気 flowed。

「……ちよつと外の空気を吸ってくる」

その顔を見ていられなくて、俺は外に飛び出した。

~~~~~

大通りから一本外れた、さびれた薄暗い路地に俺はいた。

どこの家とも知れない壁に背中を預け、ずるずると座り込む。

体の力を抜いて、はあ、と息を吐いた。

『“当たり前”ね……じゃあ、あんたはそのことに納得してるのか？』

さっき自分が発した言葉が頭に響く。

考えるよりも先に言葉が出ていた。自分でもなぜそんな事をいったのか分らない。

さっきのティズの顔が、網膜にこびりついていてた。

(でも、おかしいと、思ったんだ)

差別が当たり前の世界。

それを“当たり前”だという人々。

“上があつて下がある。上のものは敬われ、下のものは虐げられる。それが普通だ”

(……違う、そんなことは、ない)

……平和ボケした日本から来たからかもしれない。考えが受け入れられなかった。

それに、上下が努力で決まるならまだいい。それは受け入れるべき当然の結果なのだから。

でも、生まれで決まるなんて。

子は親を選べないのに。

頭が、霞がかかったかのようにぼんやりとしている。

呼吸がどんどん苦しくなる。あえぎながら左胸をわしづかんだ。

ドクン、と体が揺れた。

——発作だ。

## 世界観と“術”と病（後書き）

ゼロの“術”はあとでユウ君に解いてもらうつもりです。けど、なんだかユウ君死にそうです。大丈夫か……！？

この小説は作者の考えと違う方向にあれよあれよというまに転がっていつてしまうので、もしかしたら……。

## ヤブ医者と元王宮騎士（前書き）

ん・・・・・・・・・・思ってるように話が進まない。  
想像と全然違うな・・・・・・・・。。

## ヤブ医者と元王宮騎士

白い、白い、白い。

壁も床も家具もベッドも何もかもが、白い。

ここが、生まれた場所。

——そして、母親が死んだ場所。

（子供を生まなかったら、もっと生きられたかもしれないのに……）

（あんなにキレイで若い人が……）

（気付いた時には、もう墮ろせなくなってたらしいよ……）

（産まれてこなければよかったのにね——）

望まれない子供。母を殺し、父を殺し、その身に呪いを宿して産まれた子供。

（嫌よ！ 誰があんな子供を引き取るもんですか！）

（孤児院にでもやってしまえ！！ 俺たちに近づけるな！！）

（気持ち悪い……病を持っているなんて……！）

（そうだ、どこかへ捨ててしまえばいい）

（ここではない、どこか遠くへ）

（捨ててしまえ……消すんだ！）

近くの野山に打ち捨てられた。あの時はまだ冬だっただろうか。  
産まれて間もない幼子は、産まれてから全ての出来事を記憶して  
いた。

冷たい、冷たい、寒い。

吹雪が吹きすさぶ中、幼子はゆっくりと目を見開いて、思った。

（これで、いいんだ——）

~~~~~

気付いた時、俺はベッドの上にいた。

まだぼんやりとする頭。天井を見つめていると、だんだん思考が
はつきりとしていた。

木で作られた部屋で、広さはそんなにない。白ではない茶色をみ
て、どこか安心している自分がいた。

「目が覚めた？」

いきなり、俺の前に背の高い男が現れた。ってか……！

「……すいません。どこのどなたか知らないですけど顔が近い。鼻と鼻が触れ合ってます」

「花と花が触れ合う？ なかなか詩的な表現だね」

「脳みそは元から存在していなかったようですね」

俺は重い右手を上げて、男の顔をつかんだ。ついでに男のかけている眼鏡も一緒に。

「あれえ？ なんだか君の顔は変だねえ？ さっきまでは目とか鼻とかあったのに、いまじゃあまるでのっぺらぼうだよ」

「それはあんたが見ているのが俺の手の平だからだと思いますが」

「手の平？ 君は顔に手の平があるのかい？」

「すいませんとりあえず退いてもいいですか殴るぞ」

無理やり顔を押しつけて男を遠ざける。ついでに体も起こして、男を観察した。

年は若い。25かそのぐらいにしか見えない。インテリっぽい眼鏡に整った顔立ち、すらりとした細身の体には白衣を羽織っている。眼鏡の奥にあるのは薄いブルーの瞳だが、髪は柔らかな茶色だ。ということは、こいつは“無色人”になるんだろう。

「……っーか、あんたは一体何者だ。そしてここはどこだ」
「そして僕は誰？」
「知るかアアアア！！」

俺は思いっきり枕を放り投げたが、男は軽々とよけた。ニコニコと笑っているのがどこまでもムカつく。

……さっきから思っていたが、こいつはどうも頭のネジがほとんど抜け落ちているらしい。

「まったく、なんだって俺はこんなところに——」

そのとき、俺はハツとした。

——そうだ、俺は発作を起こして——。

「君が路地に倒れていたのを、アーリアが拾ってきたんだよ」
「……アーリア？」

相変わらずニコニコと笑っている男が話しかけてきた。

「僕の助手だよ。僕はレイ・ノワール。ここで“闇医者”をやっているんだ」

“闇医者”？ ヤブ医者の間違いだろう。というかさっきそれを言ってくれ。

っーか、自分で“闇医者”って言い切りやがった。いいのか、それ？

「……いいんです。ノワールが普通の医者なんてできるわけがありませんから」

「っのわああ！！？」

突然、後ろから声が聞こえたかと思うと、背後に知らない女が立っていた。

腰まである色素の薄い水色の髪に、同じ色をした、感情の少ない瞳。白すぎて逆に不健康に見える細長い手足。……そして暗いオーラ。なんだか亡霊みたいだ。

「やあ、アーリア。こちらがさっき君が拾ってきたユウ・クロキ君。クロキ君、こっちが僕の助手のアーリアだよ」

「……よろしく」

「よ、よろしく。っじゃなくてあんた何で俺の名前!？」

「だって僕は“闇医者”だよ？名前ぐらい知ってなきゃね」

意味分からん。

「ま、実際はあの子に聞いたんだけどね。アーリア、もう入っていいよって言うてきて」

「え、あの子って一体誰「ユウ様ああああ!!」「ぐぼらっ!？」

ヤブ医者に聞いただそうしたら、いきなり腹部に強い衝撃が走った。

「ああもうユウ様ったらいきなり飛び出していったかと思ったら行き倒れてたとか一体何をしてたんですか！私本当に心配したんですからね!!」

「ちょ……ゼロ、離れ……!!」

ゼロの頭が見事にみぞおちにクリーンヒットしている。しかもわめきながらぐりぐりと押し付けてくるものだから意識が危うくなってくる。

そんな俺を救ったのは、服屋のおかみさんだった。

「ゼロ、いい加減に離れないとユウの口から魂が出るよ」

「へえ、クロキ君って口から魂出せるんだ〜すごいねえ」

ティズさんは俺からゼロをベリツと引き剥がした。荒い息を整えるついでにヤブ医者に裏拳をかまそうとしたが余裕でかわされた。

……チツ。

「やあティズ、久しぶりだねえ。相変わらず君はキンキラキンだねえ」

「どう答えればいいのかまったく分からないけど、久しぶりだね、レイ。ちよつと話があるから、顔貸しておくれよ」

「顔？ ごめんよティズ。僕も長いこと医者をやっているけど、いまだに頭と顔を分離させられたことはないんだ。試してみたことはあるんだけどね」

「違うわバカ野郎が。あいかわらず抜けてるんだねえ。ちよつとそこまでついて来ておくれって言ってるんだよ」

ティズはヤブ医者と知り合いだったのか？

てか、ヤブ医者は本当に頭と顔を分離させようとしたことがあるのだろうか。

俺はヤブ医者の頭と顔が別々のところで動き回っているのを想像して酷く気分が悪くなった。かなりシユールな絵になってしまった。ティズさんはそのままヤブ医者連れて部屋を出て行った。

~~~~~

「まったく、こんなところであんたを見つけるなんてね、レイ。“闇医者”になんかなって」

「そういうティズこそ、今はのんびり服屋を経営しているらしいねえ。それを聞いたときは本当に驚いたよ。元王宮騎士、しかも一番隊の隊長が服屋だなんて」

「……昔の話さ」

ティズはレイを見つめた。レイはうれしそうに笑う。

「それでも、たった数年前じゃないか。よく君がここまで丸くなったものだよ」

「……そんなことはどうでもいいんだよ。それより、あんた、あいつの“呪い”を見たんだろう？」

ティズは無理やり話を打ち切ると、レイに聞いた。レイは珍しく真剣な顔になってから、答えた。

「……うん、見たよ。アレは相当強いね。僕でも癒せないよ。ぜひ、研究材料にくわえたいなあ」

「……あんたの材料になんてされたら、あいつはひとかけらも残らないだろうね」

——レイ・ノワール。数年前にティズ率いる王宮騎士一番隊に属していた男。

別名、“黒悪魔”。

退治した魔物の死体を持ち帰っては、自分の持つ地下研究所で弄くりまわすのが趣味。敵国の捕虜は、彼の研究所に連れ込まれ、全てを吐いてから死に逝く。その間、地上にすら響き渡るような恐怖の絶叫は絶え間なく続き、歴戦の戦士でさえその前では無力だ。死神よりも怖いと称されてこの名が付いた。

見た目の穏やかさは本当に見ただけ。

中身は、ちょっとあたまのネジが足りない、究極のサディストだ。

ティズは、レイに問いかけた。

「——治るかい？」

「……君にしては珍しいね。会ってまだ日の浅い子供を気にかけるなんて」

「……いいから早く答えな」

「ふふ、しょうがないなあ……」

ティズの真剣な顔に、レイはやれやれと首を振った後、口を開いた。

「“呪い”を消すことは出来ないよ。たとえこの僕でもね」

「……そう、か」

「——でも、治すことならできるよ」

「っ！？ なんだって!？」

一度落胆したティズは、レイの言葉に目を輝かせた。

「その治療法は!？」

「君、本当にクロキ君を気に入っているんだね。……簡単なことだよ」

レイは、無表情にティズに近づくと、その耳元に囁いた。

——ティズは、それを聞いて愕然とした。

レイはその様子をチラリと見やると、ゆっくりとティズに背を向け、病室へと戻っていった。

ティズは、ふらふらする頭を押さえて考えた。……レイは、そんなことにまで手を出していたのか。“黒悪魔”とまで称されるあいとなら、別段おかしくもないけども。

確かにこれなら確実だ。しかし——ユウがそれを聞いて納得するのだろうか。

『俺にはなんの関係もないのさ』

あの時のユウの言葉が頭をめぐる。さっき囁かれたレイの言葉も。

『——クロキ君と同じくらいの年の子供を捕まえて、二人の心臓を入れ替えればいい』

## ヤブ医者と元王宮騎士（後書き）

．．．．．なんか話が飛びすぎてる感が。  
もうちょっと内容を詰めたほうがいいのだろうか．．．？

## 勇者決定戦

「で、なんでユウ様は倒れたんですか？ 怪我もしてないというのに……」

「……ゼロ。ちゃんと説明してやるから、触るな」

ベッドの上にいる俺の体をぺたぺたと触りまくる白い子供。……この年でセクハラか？

「おい、いい加減にしねえとデコピンするぞ」

「でこぴん？ なんですかそれ」

「身をもつて味わえ。ていつ」

「いたっ！？」

地味に力を込めてデコピンをかますと、ゼロは慌てて後ろに下がった。額をさすっている様子を見てちよつと笑っていると、ゼロをかばうようにしてやけに青白い女性が前に出てきた。

「………女の子に暴力を振るうなんて。クロキ君、ちよん切りますよ？」

「……アーリアさん、あなたの理論でいくと、男の子には暴力を振るってもいい事になるんですけど。つーかちよん切るって何を？ 首ですか？」

「………男の子はいいんです。総じて気持ち悪いから」

「まるで男が害虫みたいな言い方！」

男女差別ですか。男子にだって気持ち悪くない奴はいるわ！ それに俺は気持ち悪くない！！

そう叫ぼうとしたけど、やめた。

……アーリアさんがなぜかメスを構えているから。てか怖ッ！  
無表情なのがめちゃくちゃ怖い。

生命の危機を逃れるために、ゼロの質問に答える。

「俺が倒れたのは、発作のせい。俺は病気にかかってんの。っーか呪い？」

でも、治療法も（たぶん）あるし、（おそらく）今死ぬわけじゃないから大丈夫。

……かつこのなかめっちゃ不安だけど。

そう説明しようとした時、ゼロが俺にタックルをかましてきた。

「ぐぼああ！？」

「病気！？ 病気なんですかユウ様！！ もしかしなくても不治の病で余命はあと一週間ですか！？ そうですかそうなんですか分かりました！ 私、今すぐ教会に行って神を呼び出す儀式を——」  
「ちよつとまてい」

ひとしきりわめいた後に急に外へ飛び出そうとするゼロを、肩に手をかけて止めた。

——そしてすぐに手を引つ込めた。

次の瞬間、俺の手があつた場所を鋭いメスが何本も通り過ぎた。

俺は冷や汗を流しながらアーリアを見る。

「……………いい度胸ですね、クロキ君。いったそばから女の子に暴力を振るうだなんて」

「肩に触っただけですけど！？ どこからどう見たら暴力を振るっ

たように見えるんですか!？」

「……………触るだけでも許せません。 Hentai」

「誰が Hentai だコノヤロー!」

ダメだ。この人もあのヤブ医者と同じ思考回路の持ち主だ。

「……………女の子はいいけど、男の子はダメです」

「男女差別か! 本当に男は害虫だと思ってるみたいですね!？」

「……………だって、そうですし」

「認めやがった!？」

とりあえずアリアさんにメスをしまってもらってから、ゼロにさっきの事の説明をした。

ゼロはしばらくじっと聞いていた後、俺の目をまっすぐに見つめて聞いた。

「……………死にませんよね？」

小さな不安。それをあらわすかのような体の震えに苦笑しながら、俺ははつきりと言った。

「ああ。死なないよ。約束してやる」

笑ってそういうと、ゼロは安心したように顔を緩ませた。

「あらら、もう元気そうだね」

その時、どこからともなくヤブ医者が現れた。ティズはどこへ行ったのか。

「アーリア、奥の部屋から薬を取ってきてくれないかい？　鎮痛剤と頭痛薬と毒薬が欲しいんだけど」

……おい、ヤブ医者。鎮痛剤と頭痛薬と毒薬を一体何に使ったんだ？

しかし、その疑問は解決することなく消えた。

「……………気安く触れないで下さいノワール。きれいなお花畑を見ることになりますよ」

「お花畑かい？　いいねえ、今度一緒に花を摘みに行こうか」

「……………片道切符であなただけ送って差し上げますよ」

そういつとアーリアは目にも留まらぬ速さでメスを投げた。が、ヤブ医者は余裕で避ける。

……アーリアさん怖え。ちょー怖え。

そんな事を思っていると、突然、ズボンのポケットの中で何かが震えた。

（……………ん？　なんだ？）

いまだに言い争っている(?)二人と、それに見とれているゼロにはれないように、そっとポケットに手をつ突っ込んだ。

そして引っ張り出たのは、あのエセ神からもらった例の紙だった。

丸めてポケットに突っ込んでおいたのを、今の今まで忘れていた。慌ててぐしゃぐしゃになった紙を広げると、紙面には“着信中”の文字が。

……ケータイですか？

とりあえず、ばれないように部屋を抜け出して、廊下でその紙をつついてみた。

『ハロー、ユウ。久しぶりだね』

「でたなエセ神……」

ブウン、と音を立てて半透明の生首が姿を現した。相変わらず中途半端な姿だ。

「何が久しぶりだ、まだ一日しかたってねえよ」

『そうだった？ やっぱりと神との時間の感じ方は違うんだよ、うん』

「テキトーだな」

『いいんだよ。それよりも！』

神がくわっ！！ とこっちに身を乗り出してきた。首だけで。

……微妙な迫力だな。

『君、王族に会っていったのに何も努力をしてないでしょ！』  
「いや、まだこっち来て二日目——」

『だ・か・ら！ 私があるイベントを用意してあげました！』  
「話を聞け」

エセ神はちよつと下を向いてごそごそした後、えいっ！ とこつちに何かを突き出してきた。

「なんだこれ…… “勇者決定戦”？」  
『そうです！』

エセ神はニツコリ笑って言った。

『一週間後にこれがあるから、出場して王族と接触するんだ！』  
「いいけど……俺弱いし、痛い嫌だし」

だいたい、こっちに引つ張ってきたときに『身体能力最強・魔力最大』とか言ってたくせに。

まあ、確かに身体能力は上がっていたけど、そんな大会に出て勝てるほどのものではないと思う。

『そー言うと思った。はいこれ！』

エセ神が笑顔で差し出してきたのは、なんだか分厚い本だった。

「なんだよこれ」

『魔術書だよ。君専用の。ちゃんと日本語で創ったんだからね』

なぜか偉そうにするエセ神を見て殺意が沸いた。

『これを見れば、たいていの事は分かるはずだし、後はあの二人に聞いてね』

「あの二人？」

『レイ君とティズ君だよ。あの二人は、君が思ってる以上に強いから』

「ふーん。てか、絶対それに出なきゃいけないの？ 俺に拒否権は」

『ないよ』

「即答かよ！？」

俺ははあ、とため息をついた。

「……いいよ、出りゃあいんだろ出りゃあ」

『お、君にしては思い切りがいいね』

「どうせやることもないしな。目標はないよりもあったほうがいい」

そういうと、エセ神は満足そうに目を細めた。

『……うん、そうだね。んじゃ、がんばって優勝してね』

「は？ 優勝？」

あ、そうそう、とエセ神は消える前にこう言った。

『優勝しなかったら金貨全部没収するからね』

「……はあああああ！！？」

静かな廊下に、俺の叫びが響き渡った。

## 勇者決定戦（後書き）

……ふう。一話書くのに一体何時間かかっているのやら。

## 古の誓約と昔話

とりあえずいったん病室に戻る。

すると、ティズが戻ってきていた。

「あ、ティズさん。どこ行ってたんだ？」

「いや……ちよつとね」

「……？」

歯切れの悪い言い方に少し首を傾げたが、俺はとりあえず“勇者決定戦”の事を説明することにした。

……しかしなあ。

(どうやって説明すればいいものやら……)

1、正直に話す。

『さっきカミサマと会ってえ、これに出ろって言われましたあ。優勝しないと金貨を没収されるらしいんですう』

……絶対信じないな。

2、黙っている。

(……じゃあどうやって協力してもらうんだよ!?)

3、逃げる。

何で逃げるコマンドがあるんだ!!

……一体、どうしろと？

と、その時、家の外から大きな声が聞こえてきた。

「大変だ、大変だー！ 一週間後に、王様が“勇者決定戦”を開催するらしいぞ！ 優勝したやつには金貨一千枚と、“魔王を倒す権利”が与えられるそうだ！」

たぶん、部屋の中にいるみんなにも聞こえただろう。それぐらいの大声だったが、問題はその内容だ。

王様が“勇者決定戦”を開催するのはまだ分かる。どうせあのエセ神が『神のお告げじゃぞよ』とかなんとか言っただのだろう。

しかし、“魔王を倒す権利”っていうのは一体なんだ？ そんな権利が存在すんのか？

てゆーか、誰も欲しがらないと思うんだが。金貨一千枚のほうがよくばど魅力的だろうに。

が。

「“魔王を倒す権利”だって！？ 本当だろうなそれは！」

「こうしちゃられない、今すぐ準備をしないと！」

「一体何年ぶりの“勇者決定戦”だ！？ ワクワクするぜ！」

……なんか、みんなが沸き立ちました。

すごいねこれ。そんなに魔王を倒したいの？

でも、部屋の中はいたって冷静。

「ふん、“勇者決定戦”だった？ そんなことするなんて、バカだねえあのクソジジイも。自分の軍に自信がないって言ってるようなもんじゃないかい」

ティズが鼻で笑ったクソジジイさんは、たぶんこの国の最高権力者のことだと思う。

……不敬罪でしょっ引かれないのかな？

「“勇者決定戦”かあ。なつかしいなあ。僕が子供の頃が一番最近だったっけ？」

「………ノワール。そうなるとあなたは三年で子供から大人に成長したことになります」

「あれ、三年前だった？ いやあ、このごろ物忘れが激しくてね」

「………あなたはこの三年で子供から老人にまで成長したらしい」

相変わらず頭に花を咲かせているヤブ医者を、絶対零度のまなざしで突き刺すアーリアさん。

……相変わらず怖い。思わず身震いした。

ゼロはそれを見て、やっぱり目を輝かせていた。

……大丈夫かね、うちの娘っ子は。何でアレを見て目がキラキラするのかさっぱり分からん。

とにかくにも、これで立派な口実が出来た。

「なあ、ティズさん。“勇者決定戦”って一体何なんだ？」

よし、これで自然に話題を振れたぞ。

「……そういや、あんたは何も知らない田舎者だったね」

……ティズさん、お願いですからその哀れむような視線はやめて泣きたくなる。

「“勇者決定戦”っていうのは、その名前の通り勇者を決める大会さ。ここ、王都では何年かごとに行なわれているんだよ。上位入賞者には王宮騎士の資格、優勝者には“魔王を倒す権利”が与えられる」

「王宮騎士つてのは、城で働く兵士のことか？」

「それよりもっと位が高い。騎士とつくだけあって、無駄に権力がついてまわってくる。普通の兵士よりも立場が上だから、ほとんどのやつを顎で使える、いつてしまえばエリートだね」

「へえ、やけに詳しいな」

俺がそういうと、ティズはぎくつとしたように体を揺らした。

「……知り合いに、そういう職業についている奴がいるだけさ」

……目が泳いでいますよティズさん。

ま、問い詰めるのは今じゃなくてもいい。

「じゃあ、“魔王を倒す権利”って言うのは一体なんだ？」

「そのまんまさ。国中の猛者をかき集めて作った魔王討伐隊の中で唯一、“魔王に止めを刺すことを許されている人間”だよ」

「はあ？　なんでそんな権利があるんだよ。さつさといって、倒して来たらいいじゃないか」

「古の誓約だね。簡単に言っと、魔王を人間達が刈りすぎると、世界がおかしくなっちまうのさ」

……どうということだ？

「単純なことだよ。あたしたち人間は、魔王を倒したものを褒め称える。災厄を被ってくれてありがとうってね。だから、自分も褒め称えられたい、って思う馬鹿どもが昔はあふれかえったんだ。血気盛んな者達が、我先にと魔王に攻撃を仕掛けまくったのさ」

「でも、魔王って言うくらいなんだから強いんだろ？」

「もちろん魔王は強いけど、人間も弱くはないし、なにより数が多い。持久戦に持ち込まれて、魔王たちはだんだんと勢いをなくし始めた。それでも人間はやめる気配を見せず、攻撃を続けた。もはや、虐殺といってもいいほどにね」

きつと、その人間達は“正義”のため、“平和”のために戦ったつもりなんだろうけど、そうなってしまうえばもう意味はない。魔王が人間を虐殺するのと大して変わらない行為になってしまった。

(……馬鹿だな)

流されまいとあらがっても、もう遅い。

「人間達は狩りつづけた。そしてついに、魔王が最後の一匹になったとき、——世界が狂った」

太陽が昇らない。星も月もない、完全なる暗黒の世界。黒以外の

色が存在しない。いや、色さえも無くなってしまったのかも知れない。人々は恐怖した。

一カ月後、太陽が昇った。月も星も昇った。しずまなかった。世界は眩いばかりの白に覆われ、影も闇も消えうせた。人々は神に許しを求めた。

二カ月後、空が消えた。海が消えた。大地が消えた。ただひとつ、どこかで輝く太陽に焼かれながら、人間は限りのない“虚無”に放り出され、どこまでも堕ち続けた。人々は泣き叫んだ。

三カ月後、元の数の千分の一にも満たない人間達が残った。世界は元に戻ったが、神は人間を許すことはなかった。

食べ物が無い。水もない。他の生き物が無い。動物も植物もない。土や岩を食べて暮らした。

大地は人間を拒み続けた。住むところがない。生きる場所がない。死に場さえも、ない。

世界が狂って一年後、神はほんの一握りの人間だけを許した。彼らは新しい土地で生活し始め、仲間を増やし、村を作り、街を作り、国を作った。

——それが、この国。

「その時、残された人間達は神と誓約を交わした。『魔王を殺さないこと』を。また、神はひとつ条件を付け加えた。『神からのお告げがあったときは、一人だけに、魔王を殺す権利を与えよう――』と」

それが“勇者”と、“勇者決定戦”の始まり。

「まあ、結局はその誓約もほとんど知られていないんだけどね。ただそのかわりに、魔王は馬鹿みたいに強くて、小指を振るだけで世界を握りつぶせるって言う言い伝えがあるけどね」

「……へーえ」

あつという間に話に引き込まれてしまった。ふと横を見ると、ゼ口も同じような顔をしている。

「で、出るのかい？」

「え？」

「とばけんじゃないよ。あんた、さっきから出たそうな顔してる」

思わず顔を触ってしまった。そんなに顔に出ていたのだろうか。

「……かなわないな。まあ実際、出てみたい気持ちはあるよ」

それに、金貨没収なんて冗談じゃない。

……あのエセ神、今度会ったらアッパー決定だな。

「わ、私も出てみたいです！」

ゼロも行きよいよく名乗りを上げた。

「んじゃ、明日っから訓練するとうしょうか」

「へえ、君たち出場するの？いいなあ、僕も出ようかなあ。そこなら、いい研究材料が手に入りそうだしね」

「……………あなたが出たら一面血の海になります」

二人のやり取りを聞きながら、俺は決意を固めた。

「——よし！んじゃ、やるか！」

「はい！」

古の誓約と昔話（後書き）

……話が進まないねえ（ハア  
……がんばります。

## とりあえず準備

「……うーん。どれにしようか」

今、俺は武器屋にいる。ゼロとティズ、あとアーリアが一緒だ。ヤブ医者なんかやりたい実験があるとかで診療所に残った。

……なんの実験が激しく聞いてみたい。きっとグロテスクだな。

「あんまり重いのはやめときなよ。体の出来てないあんたみたいなガキには、到底扱えないよ」  
「親切なアドバイスどーも」

俺は今、ゼロと一緒に武器を見ている。“勇者決定戦”に出るために、とりあえず武器を調達しようということになったからだ。ゼロは基本で戦うファイターだから武器は使わない。だが、短剣やナイフなどの刃物も持っていたほうがいいと、アーリアが助言したため、俺達と同行している。

「しかし、やけに種類が多いな」

俺はずらりと並べられた武器を見てため息をついた。

光を眩いばかりに反射する鋭利な刃物。

槍や棍棒に斧、それに弓などの飛び道具。

あとは、杖や水晶の埋め込まれた魔法具だ。

（エセ神によると、俺の魔力は強いらしいから……やっぱ魔法具か？）

でも、どれを手にとってもしっくり来ない。中には水晶玉なんかもあったが、これを使ってどうやって戦えというのか。

(……………敵に投げつけるとか？ いやいや、そんなの意味なくね？)

確かに重くて硬い鈍器だが。

「どれにしましょうか。ユウ様、どれがいいと思います？」  
「ん？ 見せてみる」

ゼロに声をかけられ、俺はゼロの手元を覗き込んだ。  
そこにあるのは、五本ほどの短剣。

それぞれの柄には違う色の水晶が埋め込まれてあって、見た目としてはとてもキレイだ。

「どれかを選ぼうと思うんですけど……………」

「別に選ぶ必要なんてないだろ。全部買っちゃえばいい」

「えー？ ダメですそんなこと！ ユウ様のお金を私なんか使うなんて——！」

「いいつつつてんだろ？ 俺が許すんだから」

ゼロの頭をぽんぽんとなでる。ゼロも本当は全部欲しかったようで、にへへと表情を緩めて笑った。

……………ほんと、癒されるわあ。

と、次の瞬間背後に殺気を感じてすぐさまゼロから離れた。

「……………またか弱い女の子に暴力を……………！ 許せません」

「待て待て待て待て！ だから俺はなんにもしてないだろ！？」

「……………喚くな叫ぶな喋るなちよん切りますよ。汚らわしい」

「ひどい！ それは酷いと思いますアーリアさん！」

俺がアーリアさんの不平等さを訴えていると、突然横からボカッと殴られた。

「ついて！？」

「あんたはいつまでおしゃべりしてるんだい。さっさと選びな」

「なんで殴るんだよ……………」

ぶつぶつと文句を言うと、また横から鉄拳が飛んできたので間一髪で回避した。

これ以上殴られたくはないので武器に思考を戻す。

とりあえず水晶玉は候補から除外して、斧なども重すぎるため却下。

そうになると、軽めのナイフや剣がいいのだが――。

(……………刃物、だもんな)

人の命を奪う道具。

この世界と前の世界は何もかもが違う。生きているものも、生活

も、全て。

この世界で生きていくために一番手っ取り早いのは、前の世界での考え方を捨て、こっちに順応することだ。そうしないと、前の世界に縛られ囚われて、きつと身動きできなくなる時が来る。

（——でも、俺はそれでもいい）

囚われてしまっても構わない。

（——俺は、自分のしたいようにしてやる）

刃物から目をそらして魔法具のほうを見る。すると、怪しげな杖や水晶玉などの間に、なにやらおかしいものが見えた。

「……………日本刀？」

黒い鞘に入った、昔ながらの刀。手に取ってみると意外と軽く、柄を握るとなぜか手になじんだ。

（つか、刃物はやめようって思ったばっかなのに）

それでも、なぜか魅せられる。

スウッと鞘から抜くと、シャランという軽い音を立てて刀身が姿を現した。

「……………あれ？」

すると、少々おかしな点を発見した。

なぜか刀身がかなり白い。

白といってもペンキを塗りたくったようなものではなく、物質そのものが放つ透き通るような白さ。  
そして、柄の少し下にある真つ赤な結晶が映えてとても綺麗だった。

（なにでできてる？ 鉄じゃあなさそうだし……新種の金属か？）

コンコンとノックをするような形で刀身を叩くと、結構硬く丈夫そうだった。

と、手が滑って思わず刃の部分を触ってしまった。

「やべっ……！？」

が、切れなかった。

まじまじと自分の手を凝視して、今度は自分から恐る恐る触ってみる。ゆっくりと刃に指を滑らせても、痛みを感じることはなかった。

「……………切れない？」

「何一人で百面相してるんだい」

「っうおわ！？」

突然ティズが横から顔を出してきた。

「つか突然出てくるなよ！ 心臓に悪い。マジで。」

「いや、これは」

「……………見たことのない武器」

「うぎゃああああ！？」

死角からぬつとアーリアが出てきた。

「アーリアさん青白すぎるんだよ！ 幽霊に見えるってか幽霊にしか見えないからヤメロ！」

「……………これは俺の故郷の武器だよ。ここにはないのか？」

「少なくとも、こんな武器は今まで見たことないね」

「……………刀身は水晶でできています。魔法具でしょうか」

「魔法具？」

日本刀が魔法具。……………納得できねー。つかイメージできない。

けど、それなら切れないことについての説明は出来る。

（これなら、敵の攻撃も受け止められそうだし、魔法も使える。…

…よし）

「んじゃ、俺これにするよ。おっさん、これいくらだ？」

「へい、そいつなら銀貨二枚で結構でさあ」

「……………やけに安くね？」

俺は武器屋のおっさんが言ったことに首をかしげた。

銅貨一枚でだいたい千円、銀貨一枚で大体一万円ぐらいの価値がある。それだけを言うとなんかに安くないが、さっきのゼロの短剣

は5本で銀貨三十枚だった。

……一本六万円？ 包丁でも持って来ればよかったかな。

「そいつは結構な材料を使ってる一級品ですが、なにぶん買い手がつかなくて。かれこれ十七年はこちらにありますかねえ」

「へえ。ま、いいや。安いに越したことはないし」

俺は銀貨二枚を取り出しておっさんに渡すと、なぞの日本刀を手にみんなと一緒に武器屋を後にした。

——日本刀が武器屋にあった時間と俺の年が同じ事は偶然なのか、と思いながら。

とりあえず準備（後書き）

ようやく投稿です。すみません。  
キャラの案があっただしどしそつぞ。

“呪”と“解”

武器を調達したところで早速訓練をはじめた。

街の外にある大きな空き地にやってきた俺達は、ティズさんと俺、アーリアさんとゼロのペアで向かい合った。

「とりあえず、あんたら二人の力を見させてもらっよ」

ちなみに、いつの間にかやってきたヤブ医者横で楽しそうにこちらを眺めている。

……なんか腹立つ。

「まずは組み手からやってみようか」

「お願いします！」

「……………こちらこそ」

ゼロとアーリアさんが組み手をはじめた。それを横目に、ティズさんに声をかける。

「んじゃ、こっちもやりますか」

向かい合って、構える。

先に攻撃してきたのはティズさんだった。

一瞬で俺の懐に入って蹴りを繰り出す。俺はあのエセ神に授けられた身体能力を最大限に発揮してよける。

「へえ、なかなかやるじゃないか」  
「それはどうも」

ティズさんは話しながらも攻撃の手を緩めず、なかなか隙が出来なかった。

（ただの服屋のおかみさんじゃあないとは思ってたけど……ここまで……！）

内心焦りで冷や汗を流しながら、必死に攻撃をよけた。

こちらから反撃しようにも手も足も出ない状態だ。  
隣で戦っているはずのゼロのことも気になったが、今は余所見が出来るような状態ではなかった。

回し蹴りをギリギリまで体をかがめてよけ、バネのように跳ね上がる。

すぐさま放たれた鉄拳が耳のすぐ横を通ってヒヤツとした。

そして、十五分ほどの組み手を終えた俺は、終了の合図が出ると共に地面に突っ伏した。

「ぜえ、ぜえ、し、ぬ……………」  
「情けないやつだねえ。こんなぐらいでくたばっちまうなんて」

ティズさんに見下ろされているのは屈辱だが、今は体力を使いきりぎて息も絶え絶えの状態だ。

突然与えられた身体能力は使い勝手が分からなくて、無駄な動きが多すぎた。そのせいで今はもう指一本動かすことも出来ないよう

なありさまだ。

復活したあとに復讐することを心に誓い、ごろりと仰向けになった。

「大丈夫ですか、ユウ様？」

「……………」

頭上に、邪魔にならないよう髪紐で髪をくくったゼロが見えた。のぞきこんでくるゼロに、疲労の色は見られない。なぜなら、アリアさんが手加減していたから。

女の子に攻撃するなんて出来ないと、それこそ赤子でも止められるのではないかと思うほどの攻撃の遅さに、ティズから目を離してチラ見した時は愕然とした。しかもよそ見たせいでティズさんから鉄拳を食らった。ちくしょう。

俺を心配そうに見ているゼロとは裏腹に、どこかすっきりしたよな顔のアリアさん。

さっき俺の横に来た時、口元を吊り上げて「……………ざまあみろ」と小声でつぶやいたのは幻聴だと思いたい。

「いやゝ、なかなかいい戦いだったねえ」

パチパチと、やる気のない拍手を送ってくるヤブ医者。

「でも、どうしてもゼロ君の動きがねえ」

それは、俺も思っていたことだった。

ゼロは“白”とはいえ、その性質を術で抑えられているため、実質ただの子供だ。人生経験は普通の子供よりも豊富かもしれないが。

「……やっぱ、封印解くしかないか」

「そうだね。レイ、あんた解けるかい？」

「見てみないことにはどうにも。ゼロ君、封印見せてもらえる」  
「あ、はい」

するとゼロが服の袖を巻くりあげ、両肩をあらわにする。  
ヤブ医者はかがみこむようにしてそれをみている。ちなみに、アーリアさんはその様子を噛み付くような目つきで見ている。

……てか、瞳孔が開いてます。めっちゃ怖いです、アーリアさん。

「……ん？ これ、“魔語”（スペル）じゃないみたいだねえ」

「“魔語”（スペル）？ なんだそれ」

「そのまんまの意味さ。魔法を使うための言葉で、私達の言葉だよ。私達が日常的に使っている言葉に魔力を込めて使うのさ」

「ふーん」

「でも、その“魔語”じゃあないってことは」

「……………古代語の可能性が高い」

アーリアさんがボソツとつぶやいた。つーか古代語？

「そうみたいだねえ。うわー、初めて見た。是非ゼロ君には研究材料になって欲しいなあ」

「待て待て。なにゼロをモルモットにしようとしてんのー！」

「……………ノワール。ちゃん切られなければ諦めて」  
「ええー、いいじゃないか」

その後もヤブ医者がなんかぶつぶつ言っていたが、アーリアさんが黙らせた。

「なあ、ティズさん。古代語って？」

「ああ、この地域にはるか昔に存在した言葉さ。一番魔法を使いやすい言語だといわれているけど、いまじゃあもうほとんど残っていないのさ」

いまだに古代語に魅入っているヤブ医者とアーリアさんを放っておいて、話を進める。

「でも、もうほとんど残ってないって事は……」

「……ああ。レイ、あんたはこれを解けるのかい？」

問いかけられたヤブ医者は、うーんとうなった。

「そうだねえ。研究させてもらえるのなら出来るかもしれないけど、今はなんとも」

「そうか……なあ、俺も見せてくれよ」

ゼロのそばによっていくと、だんだんその文字がよく見え……見えて……。

「……………はあ？」

ゼロの両肩に刻まれていたのは、なにやら文様に囲まれた文字。

俺がよく知っている、漢字の“呪”と“解”だった。

## 封印解除！（前書き）

いつのまにやらP.V.一万突破！ユニークは二千五百と、うれしい限りです！

どうもありがとうございます！

今回ちょっと長めですが、お楽しみくださいませ。

## 封印解除！

とりあえず、一息つくためにいったん町に戻った。

ちょうどいい具合に腹もすいてきたので、ティズさんオススメの店で昼食を取ることになった。なかなかこじやれたい雰囲気のお店で、それなりに盛況なようだ。

五人で席に着き、料理を注文した後、俺はみんなにゼロの封印の事を説明した。

ゼロの封印に使われていた言葉が、俺の故郷の言葉にそっくりだったこと。

ふたつの文字に込められた意味の説明もしておいた。

なんで古代語がまだ残ってるんだとか、アーリアさんとティズさんに首を傾げられたが、海の方この島国だからとかなんとか言って誤魔化した。

「うん、そうになると、封印を解くのが簡単になってきたかもしれないね」

スープをすすりながらヤブ医者が言う。

「お前さん、なにか故郷の魔道書は持っていないのかい？」

「ん……魔道書って言われてもなあ」

おそらく、魔道書とは魔法の教科書みたいなものなんだろうが、現代日本に居た俺がそんなものを持っているはずが……ん？

待てよ。

俺はベルトにぶら下げておいた袋の一つを開けると、そこから分厚い本を取り出した。

これは、ヤブ医者の家で、エセ神から勇者決定戦の事を聞いたときにもらった本だが……。

俺はその本をぱらぱらとめくってみた。

と。

「……………すごい」

「見事に全部古代語だねえ」

アリアさんとヤブ医者が、横から覗き込んで感嘆をあげる。  
ティズさんも珍しそうに目を見開いていた。

「う、う……？ 何にも分からないです」

ちょうど俺の向かい側に居るゼロは、精一杯こっちに身を乗り出し、日本語の羅列に目をパチパチさせている。

そして、俺はというと。

そのページの題名を見て絶句していた。

<第1項 十歳の“白”の封印を解く方法>

——どんぴしゃかよ!?

あの神どんだけ適当なの!?! 絶対「たぶんこうなるだろーなー」  
的なカンジの考えだろコレ!

どんぴしゃだけだな!! 百発百中の可能性で当たりまくったけ  
どな!!

内心でそんな事を叫んでいると、ふとある点が気になった。

「……ゼロ。今お前何歳だ?」

「はい? ……えーとですね、もうすぐ12才になります」

「つまり今は11才か?」

「はい、そうなりますね」

ゼロに確認を取り、本に目を戻すと。

<第1項 十一歳の“白”の封印を解く方法>

いつの間にかページが書き換えられていた。

——本ツツッ当に適当だなあの神!!! 年ぐらい把握しとけよ！ 行き当たりばったりすぎるわ！

てか、年齢で解き方変わるの!?

心の中でひたすら叫びながら、重い口を開いた。

「……あつた、解き方」

「え？ あつたんですか!？」

「本当かい？ いいことだけど、ちよと残念だったなあ」

「……………解剖は許しません」

「へえ、なんて書いてあるんだい？ 言ってみておくれよ」

ちよつとやるせない気持ちを抱えながらも、ページに再び目を落とした。

「えーっと、“黒い魔”を“呪”に、“白い魔”を“解”に押し付ける」

「ふむふむ。それで？」

ヤブ医者にうながされて、続きを見る。

「……………以上、だ」

——終わりがよっ！？　しかも意味分かんねー！！

またまた心の中で叫びまくる俺を放って、大人組3人は議論を続けていた。

「“黒い魔”と“白い魔”、かあ」

「……………おそらく、闇属性と光属性の魔力の事」

「光はあたしが持つているからいいとして、闇は、やっぱりあいつしか居ないねえ」

ヤブ医者がかつちを見たので、とりあえず聞いてみた。

「で、どうすればいいのが具体的に分かったのか？」

「うん。多分ねー、魔力の塊を古代語に押し付けるだけでもいいと思うんだけど、闇属性の魔力を持った人が僕らの中に居ないんだよー」  
「え、どうすんだよ」

……………なんか、嫌な予感。

ヤブ医者がニツコリと笑った。

「と、いうわけで、クロキ君はアーリアの教育の元、がんばって魔力を出せるようになってねー」

「……………死ぬ気でやらないと、ちゃん切りますよ」

「死刑宣告!？」

地獄が見えた。

~~~~~

もうそこからは怖かった。つーか恐ろしかった。

だってアーリアさんメス投げてくるんだよ!? どこにしのばせておいたのっていうくらい大量に!!

いくつか首にかすって死ぬかと思ったからね俺!!

まあ、そんな地獄の特訓のかいあって、一時間足らずで手の平から魔力の塊を出せるようになった。

コツは、深呼吸しながら、出来るだけリアルにイメージすること。アーリアさんから襲い掛かるプレッシャーと、生命の危機に耐えながらも出来るようになったところで、ティズさんからOKがでた。

ちなみに、俺の魔力は真っ黒だ。

それこそ黒以外何も見えないような色に、ひどく感動した。

が、ティズさんの出したそれこそ神々しいまでの白い魔力にちょっとへこんだ。

で、俺たちは店を出てヤブ医者の店に戻った。その時に店長らしき人が涙を流して喜んでいたのがなんともいえない。

だってアーリアさん店の中なのに手加減しないんだよ！？ 店員さんの鼻先をかすめていったときは本当に心の底から謝りたくなかった。

でも文句なんていえるはずがない。アーリアさん最恐だもの。みんなビビッて何も言えなかった。

んで、ヤブ医者の家。ゼロを椅子に座らせて、俺がゼロの右側に、ティズさんが左側に立った。

「用意はいいかい？」

「ああ、多分大丈夫だよ」

ティズさんと目をあわせて、最後の確認をする。

「よし、いくよ！」

掛け声と共に、手の平に魔力を集める。そして、それをえいやつと“呪”の文字に押し付けた。

ゆらゆらと揺れていた俺の魔力は、ゼロの皮膚の中に徐々に染み込んでいき、それと同時に文字が薄れていった。

手の平が肩に付いたところでパツと手を離すと、文字が完全に消えてなくなったのが見て取れた。

顔を上げるとティズさんと目が合い、大丈夫だとうなずかれた。

が、ゼロには何の変化もない。

「一応、成功したみたいだけど……」

「こつちもだよ。古代語は綺麗になくなったんだけど……。ゼロ、何か体に変化はあるかい？」

ゼロは椅子からトン、と下りると、そのまま体をくるりと回したが、特に変わったような場所は見られない。

「特に何もないみたいですけど……」

「じゃあ、実験して見ようか。アーリア、なんか木の板でも持ってきて」

ヤブ医者の声と共に、アーリアさんがすぐさま隣の部屋に消えた。そして、若干大きすぎるような気がしなくてもない木の板を持ってきた。

「じゃあ、まずはクロキ君から」

「俺から？」

「そ。何事にも、対照は必要だろう？」

アーリアさんが俺に近づいてきて、木の板を手渡した。と、同時に思わずよろめく。

「重っ！！？」

かなり重い。50キロはある気がする。

「んじゃ、クロキ君。それをゼロ君に渡してくれるかな」

「……………潰れると思うんですけど」

「その場合は、僕が責任持つて引き取ってあげるよ」

「……………何のために？」

「解剖」

「やっぱり!!」

ゼロをヤブ医者の手に渡すようなことはしたくないので、あくまでもそつとゼロに板を手渡す。

万が何かあれば、アーリアさんが助けてくれるだろう。

ゆっくりとゼロのほうに重さを傾けるが、ゼロはまったく動じた様子がない。

しかも、板を完全に一人で持つている状態でも平然としていた。

「ぜ、ゼロ？ 重くないのか？」

「あんまり重さは感じませんけど……………」

アーリアさんが手助けしているのかと思わず目を凝らしたが、アーリアさんはヤブ医者の方に居るままだ。

「ゼロ君、ちょっとその板を握ってもらえるかい？」

「あ、はい」

ヤブ医者の方の指示とともに、ゼロが指に力を入れる。と。

パシッ。

――木の板が、粉碎した。

「……は？」

思わず間抜けな声が出たが、そんなことに構ってられない。

ゼロが指に力を入れたとたん、なにかのCGのように、板が粉々になった。

驚きのあまり呆然としているゼロの指から、サラサラと小麦粉のようなこなが零れ落ちる。

驚く俺を放って置いたまま、ヤブ医者が面白そうにうなずいた。

「“白”の女性は怪力だと聞いたことがあったんだけど、これほどまでとはねえ」

怪力で済まされるような事ではないと思う。

今のゼロなら、トラックでも止められるのではないだろうか。

「は、はは」

取り残された俺は、乾いた笑いを漏らすことしか出来なかった。

準備完了であります

そこから先は大変だった。

なんでもヤブ医者によれば、“白”の女性は元来怪力の持ち主だったそうだが、男達がその力での反乱を恐れて封印を施したらしい。

……やっぱ女の人は強いわ、うん。

で、封印が解けた〃ゼロ最強という方程式が出来た。

“白”の特性も戻ったようで、少しの組み手ですぐに相手の動きを見切れるまでになった。

そこは、さすがだなと思うことで終わったのだが。

しかし、これはないだろう。

今日の訓練を終え、とりあえず俺たち二人の力量を測り終えたことで満足していた俺たちは、そのまま夕食に向かった。

ヤブ医者オススメという、若干怪しめな店だったが、料理の味は最高らしい。

ひとまずガラガラの店内に入り、席に着く。そして、ヤブ医者が頼んだ料理が運ばれてきたあとだ。

この世界ではオードソックスな少し固めの黒パンを手に取り、ゼ

口に手渡す。

「ほい、ゼロ」

「あ、ありがとうございます」

ゼロも結構おながが減っていたようで、うれしそうにパンを受け取った。

——そのときだ。

今日の昼にも見た光景。パンが一瞬でパン粉へと姿を変えてしまったのである。

「……………あれ？」

「……………しまった。この可能性をまったく考えていなかった」

俺はおもわず頭を抱えた。

ゼロは封印が解けたばかりで、まだ力の加減がうまく出来ないらしい。

俺もゼロと組み手をしたんだけど……………死ぬかと思った。

だってよけた後の拳が大木にめり込んだんだよ！？ しかもその後倒れた。

つか十一歳の女の子より腕力が弱い俺って……………あはははは（遠い目）

……………ごほん。まあ、何はともあれ結論は一つ。

——ゼロは、ご飯を食べられないって事だ。

~~~~~

しかし、俺が思った以上に早くその問題は解決した。

簡単なことだ。ゼロが自分で食べられないなら、他の誰かが食べさせてやればいい。

と、いう訳で、今はアーリアさんがゼロのお世話役となっている。

最初に白羽の矢が立ったのは俺だったが、みんなの後ろから呪詛の念をこめて睨みつけてくるアーリアさんを前に逃走した。

……………マジ怖え。怖すぎる。目線一つで地獄が見えた。

で、アーリアさんがゼロに食べさせているのだが、当の本人はこの年になって誰かに食べさせてもらうということに対する羞恥やアーリアさんへの申し訳なさが入り混じったような、なんとも複雑な顔をしている。

別に何にも思わなくてもいいと思うんだけどな。アーリアさん顔がホクホクしてるし。

俺への態度との差が凄まじい。そんなに男が嫌いですか。

「……………当たり前でしょう。男はみんな害虫です」  
「心読まれた！？ しかも言い切った！」

っーか害虫って！？　　どんだけ差別が激しいの！？

……………まあ、こんなことがあって、騒がしい夕食を終えた俺たち。

とりあえず、ティズさんとアーリアさん、ヤブ医者自宅に帰還。俺たちは取っておいた宿に戻った。

今回はふたつ部屋が取れたので、俺とゼロは別々の部屋だ。

最初はいつものように使用人が部屋をもらうなんてなどなど言っていたが、最後には眠そうに部屋に引っ込んでいった。

俺もさっさとベッドに潜り込むと、明日から始まる本格的な訓練に備えて眠った。

~~~~~

翌日からはペアを変え、俺とアーリアさん、ゼロとティズさんで組むことになった。

というものも、アーリアさんがゼロに手加減しすぎて訓練にならないとティズさんが言ったからだ。

……………まあ、それは俺も同感だから、ペアを変えることに異存はないんだけど…………。

「だからってこっちに八つ当たりしてくるのはやめてくださいぎや
ああああああ！！！」

「……………うるさいですよ害虫が。土に返れ」

「ひどい！ てか、そんなにゼロとのペアがよかったですか！？」

「……………具体的に言うと、あなたとのペアが嫌です」

「ハートが！ 俺の心がズタズタに！！！」

精神的にも体力的にも殺されかけた。マジで。冗談抜きでだから……………。

こんな訓練が毎日毎日……………よく生きてるな、俺。

また、体術だけじゃなく、魔法もいくつか教わった。

どうやら、ティズさんたちが使っている“魔語”（スペル）と、日本語の古代語は違らしく、古代語のほうが威力が高いらしい。

だが、その分習得が難しく、世間に出回っていないことから、今回は“魔語”（スペル）を使って戦おうということになった。

エセ神からもらった本にもいくつか載っていた魔法を練習する。

普通に出来るようになったら動きながら。それが出来たら対人戦で。

もともとエセ神が俺に魔力を授けていたこともあって、魔法の習得も思いのほかスムーズに進んだ。

——そして、いよいよ当日。

俺たちは、“勇者決定戦”に向かっていた。

受付（前書き）

テストがあつて更新がひどく遅れてしまいました。
ごめんなさい。

これからは、もう少し精進していきます！

受付

俺達は、ティズさんやアーリアさん、ヤブ医者に付き添われながら王城の横にある闘技場へ向かっていた。

ここから見分にはだいたいサッカーコートぐらいの大きさしかない建物だが、その中に次々と人が吸い込まれていく。

道も大変混雑していて、ごみごみとした人の波に押されるような形で進んでいた。

「スゴイ数だな……この人たち、みんな“勇者決定戦”に出るのか」「そうだね。少なくとも、五千人はいるんじゃないかい？」

「……もうすでに中に入っている人も多そうです」

「でも、あんな小さなところにみんな入れるんですか？」

「魔法で中を拡張してあるんだよ。なかはすんごく広くてね、まあ……見た目の二十倍はあるんじゃない？」

ときおり雑談を交えながら歩を進める。

「五千人……」

俺が周りを見回しながらつぶやく。

五千人……この中で、たった一人が勇者になる。

金貨のためにはじめたとはいえ、これからの戦いにワクワクしているのも確かだった。

入院中、走ることはおろか歩くことさえ制限されたあの病室に比べて、ここはひどく自由だった。

「どんな形式で戦うんだ？」

「基本は勝ち抜き戦だね。普通はパーティー対パーティーでやるもんだけど、この人数じゃあ、適当に殴り合いの戦争みたいななるかもねえ」

俺の質問にはティズさんが答えてくれたが、そこで出てきた言葉の意味が分からなかった。

「パーティー？　なんだそれ」

「要するにチームのことですよ。ユウ様と私で一つのパーティーです。パーティーは、五人まで許されているんですよ」

今度はゼロだ。しかし、ゼロが知っているようなことを知らないというのは、いささか決まりが悪い。

まあ、世界が違うのだから仕方がないと諦めた。

「じゃあ、二対五になることもありえるって訳か……」

「まあ、よっぽどの事がない限り大丈夫だと思っけどねえ。クロキ君もゼロ君も、この一週間でかなり強くなっただし」

「……………ゼロに怪我をさせた人はみんなちゅん切ります」

「だからやめよう！？　アリアさん危険だよ！」

ゼロが擦り傷一つ負っただけでも地獄の果てまで追いかけられそうだ。

……………想像して思わず身震いした。

そうこうしているうちに、建物の前にたどり着いた。輝くような金をベースにして造られている建物で、太陽の反射が目にも美しい。繊細に書き込まれた飾りのある門の前で、双子と思われる女性が受付をしていた。

「こんにちは」

「“勇者決定戦”にようこそ」

まったく同じ容姿の二人が口を開く。髪は金、目は翠だ。

「何名様でのご登録でしょうか」

「二名です」

「パーティー名をおうかがいします」

「……モノクロ、です」

パーティー名を言う時に、思わずためらってしまった。実はこれ、数日前に決めておいたチーム名なのだが、使うこともないと思っ
ていて適当につけてしまったものだ。まさかパーティーなんてものがあるとは。

俺が“黒”でゼロが“白”。よってモノクロ。

なさすぎる想像力に涙が出た。

「ではこちらをお受け取り下さい」

「今大会への参加証です」

「紛失されると再発行は出来ませんので、お取り扱いにご注意下さい」

「では、いつてらしゃいませ」

双子に見送られて先へと進む。

建物の大きな門をくぐると、そこには。

——予想をはるかに超えた景色が広がっていた。

東京ドームがいくつ入るのか、見渡すことが出来ないほど広い。
細部まで造りこまれ、とても歴史を感じさせる建物だ。

そして、何より驚いたのは、天井。

——天井があるはずの場所にあった、青く澄み渡った空だった。

「え……？」

「わあ……」

俺とゼロは食い入るように空を見つめた。

つかナゼあんなところに空が。ここは室内だったはず。

吹き抜けになっているということも考えられたが、そうだとすれば切り取られたような空が見えるはずだ。

限界はある。

なのにそれを感じさせない広々とした青空に鳥肌が立った。

「ああ、
“オールテスの空”
だね」

「
“
オルテスの空
”
……
？」
」

「うん。大魔術氏と呼ばれた偉人で、この闘技場を建てた人だよ。」

「この空は、この建物の上にある本物の空を天井に投影しているのさ」

「すい」...

俺は思わず嘆息した。本物と見間違うばかりの空だ。

「さあ、ボーっとしてないで、あんたたちはさっさとファイトフィールドに向かいな」

ティズさんが声をかけた。俺がティズさんを見ると、彼女はうれしそうに笑っていた。

「あっちを見てごらん」

俺とゼロは、目にはいった光景に啞然とした。

——約一万人の人々が、広いフィールド内でそれぞれに武器を構えていた。

ヤブ医者のおもしろそうな笑ひ声が聞こえる。

「第一回戦の始まりだよ」

一回戦

「さあ、いよいよこの時がやってまいりました!」

広い闘技場内いっばいに、レポーターの声が響く。

俺とゼロはレポーターの声を聞きながら、適当に体をほぐしていた。

「剣を研ぎ、技を磨き、己の体を鍛え上げながら待ちに待ったこの瞬間!! “勇者決定戦”の開始です!!」

会場が大いに沸いた。歓声というよりも叫びが闘技場を満たし、全員のテンションがマックスになっているようだ。

「はい、ではここで、一回戦のルールを説明します」

レポーターが声を上げる。

「一回戦は、その名も“殴って殴ってぶちのめせ!”です!」

どんなネーミング!? そのまんますぎるだろ!

俺は思わず心の中で叫んだ。ゼロもぽかんとした顔でレポーターを見つめていたが、他の参加者達はますますハイになっていく。

……もしかして、毎回こんな感じなのか。

なんとも脱力してしまいそうなネーミングセンスだ。これを決定した人間の顔が見てみたいものである。

そんな俺の心情とは別に、レポーターは説明を続けた。

「ルールは簡単、一回戦開始から一時間経過したときに、立っていた者が勝利者だ！ その一時間のうちは何をしてもOK！ もし死んじゃったら困るという方は、今のうちに棄権してくださいねー！」
「いやいや待てよー！」

殺されるのか！？ 勇者同士の争いで殺されるんですか！？
俺棄権するぞそんなん！ だって平和主義の日本人ですから！ 死にたくありませんから！ マジ冗談抜きで！

棄権しよう！ そう思ってゼロを見ると、ゼロはなぜか目を輝かせていた。

「あ、あのさゼロ——」

「ユウ様！ すごく楽しみですねー！」

満面の笑みを振りまきながらしゃぐゼロ。……なぜに？
周りを見ると、俺以外の人がほぼ全員とっていいほど同じような表情をしていた。

……俺だけ！？ 俺だけですか！ こんなところで孤立するなんて予想外だ。異世界クオリティーですか！？

「棄権したい人ー！　いませんねー！　それじゃあ一分後にはじめます！　準備してください！」

一分後かよ！　早ッ！

とりあえず、横に長い六角形の形をしている闘技場の壁際による。とんがっている下のほうが入り口で、上のほうに、ティズさんたちが居る観客席があると思って欲しい。

俺が居るのは入り口側で、周りを見ると参加者達が同じように壁際によっているのが見えた。

「はい！　それではみなさん、準備はいいですね！　——レディー、ファイッ！！！」

観客席に設置されている大きな金の鐘が、この大会の始まりを告げた。

~~~~~

「うわあ……………」

だいたい三十分ほど経っただろうか。

俺は、目の前のありさまに思わず顔をしかめてうめいた。

死屍累々。地獄絵図。

三途の川がそこらに流れているんじゃないだろうか。

そんな感じだった。

最初は人だらけでごみごみしてぎゅうぎゅうづめだった闘技場も、再起不能とみなされた人たちが外に運び出されて、大分人数が減った。俺とゼロはまだ生き残っているけど、もう千人も居ないんじゃないだろうか。まだ半分だというのに、ずいぶんペースだ。

「えいつ！」

「うぎゃあああああー！」

また一人、ゼロに飛び掛った男が軽々と投げ飛ばされていく。良く飛んだな。軽く十メートルぐらい？

縛られたゼロの髪が風に揺れる。

いくら人が多くても、ゼロのような小さい女の子はほとんど居ない。つまり、それだけ標的になりやすい。

小さい女の子をねらう時点で最低な奴らだ。勇者になる資格はないと判断した俺は、ゼロにゴーサインを出した。

まあ、そっからはもう想像に任せるけど。

今、ゼロの前には様々な男達がひとかたまりになって積み上げられていた。

「ふう……疲れました」

「お疲れ。次は俺が行くよ」

汗をかいているゼロを休ませるため、今度は俺が前に出た。いくら減ったとはいえ次から次へとわいてくる敵さんたちに向け

て、魔法を発する。

「風よ来たりて渦を巻け」！」

エセ神からもらった魔術書に書いてあった魔語<sup>スベル</sup>を唱える。するとどこからともなく風が吹き、俺の目の前でどんどんと竜巻を形成する。

男達はそれに気がつくことが出来ず、数秒後には吸い上げられて空の上だ。まあ、加減はしているので、気絶するだけで済んでいるだろうが。

初めて使ったときは森の木々が根こそぎ引っこ抜かれてしまった。一番最初に、この世界に来たときに見た景色のようだ。俺の魔力は一体どれだけあるのか、いくら魔術を使っても疲れなかった。

……エセ神、加減間違えたんじゃない？　っていうぐらい。

まあ、そのおかげで今まで生き残っているんだけど。

とりあえず、時間一杯まで交代に敵を蹴散らして、俺たちは一回戦で勝利を収めたのだった。

……意外と楽勝だったのはいいんだけどさあ。死ななかったのもありがたいんだけど、ねえ。

——やけに“黒”が多い気がするの、俺の気のせいかな？

## 部屋

とりあえず、一回戦を終えた俺たちはティズさんたちのところへ戻ることにした。

観客席を歩き回りながら、三人の姿を探す。

「あ、居ましたよ」

ゼロが三人を見つけ、タツタツと軽い足取りで駆けて行く。一時間も大の大人を投げ飛ばしていたとは思えない。まあ、そういう俺もさほど疲労しては居ないのだが。

「あ、お帰り」

「……………お疲れ様です」

「やっと返ってきたかい」

三人と合流すると、それぞれねぎらいの言葉をかけられた。それに返事をしながら口を開く。

「ただいま。まあ、そんなに手こずらなかったけどね」

「はい、そんなに問題ありませんでした」

「そうかい。ならいい」

「……………怪我は？」

アーリアさんにそういわれて体を眺め回す。

「ん、俺はないかな。ゼロは？」

「私も大丈夫ですよ。ちょっとした擦り傷があるぐらいで——」

ゼロが言い終わる前に、アーリアさんから俺に向かってメスが飛んできた。

「つとわあ！？ 危な！！ 何するんですかアーリアさん！！」

「……………そこに直りなさい。あなたをちゃん切ってあげます」

「俺のせいですか！？」

つかアーリアさん、メスを片付けようかとりあえず！ 瞳孔が開いてますよ！！

「あはは、アーリアは今日も元気だねえ」

「元気すぎてこっちが殺られるんですけど！！」

やっぱりヤブ医者頭のにはネジが足りないようだ。

「はいはい、あんた等そのぐらいにしておきなよ」

あきれたようなティズさんの声で、ようやくその場が収まった。  
……よかった、ホントに。マジで三途の川が見えた。

「それはそうと、あんたたち部屋は確認したのかい？」

「部屋？」

何の事か分からずに聞き返すと、ヤブ医者が言った。

「“勇者決定戦”が行なわれている間は、出場者は闘技場から出られないんだよ」

「は？なんでだ？」

「“勇者決定戦”は賭け事の対象にもなってるから、外に出たらいい

ろんな人にねらわれるんだって」

「でも、それだったら中でも同じじゃないか？ 見たところ、警備の人なんて居ないし」

「いや、外で襲われたら兵士の人が居るし、襲ってきたほうの責任でしょ？」

ヤブ医者とは、笑顔で爆弾を投下した。

「でも、闘技場の中は治外法権だから、襲われても文句なしなんだよ」

……は？

「はああああ！？ そんなこと聞いてないぞ！？」

「え、言ってなかったっけ。いやあ、ゴメンゴメン」

「ゴメンで済むかあああ！！」

またしても生命の危機ですか！？

「つーか、中のほうが危険なら、何でなおさら外に出れないんだよ！？」

「えーとねえ、それぐらいの試練を乗り越えられないものなど勇者になる資格はないって事らしいけど」

「そんなにハードルあげられても困るわ！！」

誰がいったんだよそんなこと！！

「この国の最高権力者だね」

「王様かよ！！」

勅命ですか！？ 王様ごんだけ“勇者決定戦”に関心あるの！？

「まあ、そういうことだから、今のうちに部屋の場所だけでも確認しておいたら？ 多分、部屋の場所は証明書に書いてあると思うし」

「えーと……2階の15つて書いてある」

「じゃあ、確認してきましようか？」

「いや、ゼロ。俺も行くよ」

「……………なら、私も」

「あたしは先に帰るよ。二回戦は明日だし、店の様子も見てこない  
とね」

「僕も一回診療所に戻るよ。まだやりたい実験もあるし」

ヤブ医者と言う実験がどんなものなのか、そこはかとなく気になったが、とりあえず別行動をとることにした。

さて、部屋の確認に行こうか。

## 部屋（後書き）

今後は更新が遅れると思われます。  
申し訳ありませんが、どうかご了承下さい。

## “安らぎの樹”で

六角形をしている闘技場の右側には、やけに大きな建物が建っている。名は“安らぎの樹”。

そこは普段なら闘技場で行なわれるあらゆる行事の参加者のなかから、希望者が休憩したり宿泊したりするための施設だが、“勇者決定戦”開催中は、出場者全員がそこに缶詰となる。

そのため多少は不快感を改善できるように、快適な生活空間が提供されている。

——らしい。

「……15、15……あ、ここだな」

俺とゼロはその“安らぎの樹”にいる。

階段をのぼって二階へ。外から見ると“安らぎの樹”はハンパない高さだった。

……最上階の人とか、のぼる階段の数が果てしないんじゃないだろうか。

まあ、そのかわいそうな人たちの事は置いて、あてがわれた部屋のドアを開けた。

「……………おお」

「わあ、すごいですねー!!」

ドアを開けた状態で固まった俺の横をするりと通り過ぎ、中に入ったゼロが歓声を上げた。

なんと、まあ。

——俺の目の前には、高層マンションの一室ぐらいの部屋が広がっていた。

台所に寝室、洗面所にリビングにバスルーム。

普通に住めるよここ。すごいよここ。若干カントリーだけどそれでもすごいよ。しかもタダ。

全部で何室あるんだろうか。というか横の部屋との差がそんなになかった気がしたんだけど。ここにも異世界クオリティーが！？

「ユウ様！　すごいですね！！」

ゼロがはしゃぎながら飛びついてくる。その上がりに上がったデションをなだめながら、ぐるりと周りを見渡した。

そして、気付いた。

「……………“視”？」

——天井の木目にまぎれて、古代語が刻まれていることに。

さりげなく目を離し、辺りを注意深く眺める。

他の部屋にも移動しながら探してみると、最低でも一部屋に三箇所は“視”があった。

（“視”ということは視る……監視か。“聴”はなかったから、さっきの声は聞かれていない。ということは、ばれていないはず）

まあ、薄々予想はしていたが。

こんな国を巻き込んだ大規模な大会に、不正がないわけがない。それに不幸中の幸いで、相手が使ってきたのが古代語でよかった。魔語<sup>スベル</sup>だったら逆に分からなかったかもしれない。

まあ、魔語だったら他の参加者に丸分かりか。

（……とりあえず、俺が使えるのは魔語だけって事にしておこう）  
能ある鷹は爪を隠す。

というか隠し玉がひとつぐらいないと、さすがにダメだ。

（それに、俺の予想だと――）

思い出すのは、さっきの一回戦での様子。

（ティズさんによると、“黒”は上からふたつ目の貴族。当然数も少ないから、そんなに出てきていないはずなのに……）

勇者になる資格に“有色人”も“無色人”も関係ない。だから、“無色人”は日ごろ逆らえない貴族に痛い目を見させてやるためにも参加意欲は大きい。

だが、それとは逆に“有色人”は今の状態でもそんなに不満はないはずだ。貴族は貴族でも下っ端なら、名を上げようとがんばるかもしれないが、“黒”は桁が違う。

国のトップ2。莫大な資産がある大富豪。俺みたいな偽者とは違い、本物は威厳があるとティズさんが言っていた。

そんな大貴族が一族総出でこんな大会に出たりするだろうか。――否。

その可能性は低い。なら。

「俺……..  
俺みたいなやつか……」

雲行きが怪しくなってきた。どうも、おかしいことが起こっているような気がしてならない。

「なんですか？ ユウ様」

「いや、なんでもない」

俺のつぶやきに答えたゼロに返事をして、俺は気持ちを切り替えた。

（ま、今度他の“黒”にあつたら聞いてやろう）

——あなたは何人ですか、ってな。

## “安らぎの樹”で（後書き）

更新が遅れまして申し訳ありません。今後もこのペースが精一杯と思われま

す。十一月中に一度は更新しようと思っておりますが、ご迷惑をおかけしますこと、どうもご了承下さい。

## ちびっ子侵入者

とりあえず部屋に荷物を置いた俺たちは、呼び出されるまでは各自で自由行動をとることにした。

そのため、ゼロはアーリアさんに連れられて外へ。俺は部屋に残って睡眠を取ることにした。

二回戦はパーティーが十個ずつぐらい集まって対戦するらしい。そのため、役員が呼びに来るまでは特にやることはない。

特に疲れていなかったし、監視の目が気になったが、あまり不自然な態度だと怪しまれる。とりあえず二人に監視の事を話して部屋から出すと、すぐに割り当てられた部屋のベッドに横になった。

~~~~~

異変に気付いたのは、それから一時間弱経った頃だった。

仰向けに寝るとどうしても視線が“視”に寄っていつてしまうので、横を向いて眠っていた俺だったが、ふとした拍子に目が覚めた。

耳を澄ましても何も聞こえない。二人はまだ帰ってきていないのだと知って、もう一眠りしようとしたときだった。

——
フッ
——

かすかな息遣いが聞こえた。

体は幸いなことに反応しなかったが、寝起きの頭が見る見るうちにさえていくのが分かった。全神経を耳に集中させて、相手の居所を探る。

——フッ　フッ　フッ——

音の出所がだんだんと近くなってくる。ゆっくりゆっくりと近づいてきて、ちょうど自分の背中の方で止まった。

そして、相手が腰から武器を抜く気配がして、空気が震えるのが分かった。

俺も薄目を開けて、ベッド脇においておいた刀の位置を確認する。

次の瞬間、相手が俺めがけて武器を思いっきり振り下ろした。

すぐさま横に転がって相手の武器をよけ、刀をつかんで立ち上がる。

相手は俺が起きているとは思わなかったようで、驚いたような気配が伝わってきた。

その一瞬の隙に刀を鞘から抜き放ち、鞘を左手で勢い良く投げる。

あのエセ神に強化された、俺のでたらめな腕力は鞘を凄まじいスピードで飛ばし——見事相手の顔面に激突した。

「うぎゃあッ！！！？」

見事な手際で侵入したわりには間抜けな声を上げて、相手が鼻を押さえながらドテツと倒れる。

どうやら鼻にクリーンヒットしたらしい。鼻が高いから悪いんだよ馬鹿野郎が。

相手が立ち上がらないうちにベッドを乗り越え、相手の武器を遠くへ放り投げた。目の前のやつがそれに気付く前に、相手の首筋に刀を突きつけた。

「あ……」

「さ、顔を拝ませてもらおうか？ 侵入者さん」

まだ鼻を押さえている腕をどけて顔を確認する。

全国の少女諸君が欲しがりそうな細い手足に加え、小柄な顔。性別は男。つか少年。ゼロとそんなに変わらないんじゃないだろうか。

——それだけならよかったのに。

手入れの行き届いた金髪に綺麗な金の瞳。布の端切れを売ったらそれだけで三日は食えそうな代物の高級そうな服。それにちりばめ

られた、小さくも形の整ったきらめく宝石たち。

——そして、左胸に鮮やかな色の糸で刺繍された、この国の国旗。

「ぶ、無礼者ッ！！ 誰が侵入者だ、俺はキール・アイヤリムだぞ」！

キール・アイヤリム。
ただの名前だと、鼻で笑えればどれだけよかったか。

アイヤリム。そしてこの国の名は、——アイヤリム王国。

「お、俺は第二王子なのに！！」

——赤くなった鼻を押さえながら、涙目で金髪ちびっ子は叫んだのだった。

ちびっ子侵入者（後書き）

11月14日、修正しました。

仲間が一人増えました。(前書き)

更新遅れまして申し訳ありません。

十一月中はもう出来ないかと思っています。十二月に入れば週一のペースで更新することが出来るかと思われますので、もうしばらくお待ち下さい。

仲間が一人増えました。

この国には“有色人”と“無色人”がいる。
基本的に“有色人”のほうが位が高い。要するに貴族だ。

さて、その“有色人”だが、上から順に“金”、“黒”、“銀”
という順番で並んでいる。

俺のような“黒”は、国を構成する貴族の中ではトップに位置する。ティズさんの話によると、重要な地位を占めているのはほとんどが“黒”で、その補佐として“銀”がある。

では、“黒”の上に行く“金”はなんなのか。

——この世界で、“金”は王族を示す。

王族の血は絶対だ。髪が金色なのも居るにはいるが、その瞳の色。

輝く金色の瞳は、——神の瞳と同じ。

この国を見据えるために与えられた、千里眼。それこそが、王たるものの証。

王族だけが持っている能力だ。

そういえば、あのエセ神の目も金色だったな、とぼんやり思い出す。

とりあえず首筋に突きつけた刀をどけ、顔をまじまじと覗き込んだ。

……本当に金色だ。猫みたいだな。

首根っこを捕まえているとじたばた暴れたので、手を離してやった。

「この無礼者め！ 俺に触れるなど千年はやい！」

……とりあえずデコピンを食らわせておいた。ふっ飛ばさない程度に手加減はしたが、それでも痛かったらしい。

涙目で額をさする（自称）第二王子に問いかける。

「んで、一体なんのようだよちびっ子」

「誰がちびっ子だ！ キール様と呼ばぬか貴様！」

はい、デコピン二発目はいりました。

ますます赤くなった額は無視する。

「で、用事はないのかちびっ子」

「あるわ！ そしてちびっ子言っな！」

よく叫ぶやつだな。元気すぎるだろうが。

「貴様のせいで、俺のパーティーで生き残ったのが俺一人になってしまったのだ！ 我が国の一番の精鋭を連れてきたというのに！」
「知るか」

その返答に怒り出したちびっ子の頭を押さえながら、そういえば
と思い返す。

魔語を使って倒した相手の中に、鎧兜の兵士がいた気もする。ま

あ、何でもありの試合だったのでさして気にも留めていなかったが。

「どう責任を取ってくれる！ このままでは二回戦に参加できないではないか！」

「え、なんで。一人で行ってくりやあいじゃん」

「馬鹿者め！ パーティーは二人からしか組めないだろうが！」

まじか。それ初めて知った。

つまり、なんだ？このちびっ子が俺を殺そうとしたのは、ただの腹いせか？

……。

「いたあッ！？ な、なにをする！？」

「あ、スマン。勝手に手が出てた」

「嘘付け！ 確信犯だろうが！」

よく分かったな。そんなに分かりやすかっただろうか。

どうしてくれるんだと叫びっぱなしのちびっ子を押さえながら考えていると、部屋のドアが開く音がした。

くくくく

「……………」

「あ、アーリアさん。どひどひ」

「……………」

……………こ、怖え。

時は少しさかのぼる。

帰ってきたゼロとアーリアさんは俺が押さえつけていたちびっ子に目を丸くし、ついでその金の瞳にすぐさまひざまづいた。そのことに調子に乗ったちびっ子が、

「おい、その“白”。茶を入れる」

などと余計なことをいったからまずかった。

ゼロへの明らかな侮蔑に、瞳に怒りの炎を燃やしたアーリアさん。次の瞬間ちびっ子に怒りの拳骨を落とし、どこから出したのか分からない頑丈な縄でぐるぐるに縛り上げた。

啞然とする俺とゼロを尻目にアーリアさんはちびっ子をベツトに放り投げ、両手に鋭利なメスを構えて投げた。

もしあの時ゼロが声を上げなかったら、きっと放たれたメスはちびっ子を容赦なく突き刺していただろう。

「ちょっと、アーリアさん。相手は子供ですよ、こ・ど・も。大人気ないですよー」

「……………害虫に容赦はいりません」

「王子にも害虫呼ばわり!？」

アーリアさんにとって、全ての世界は女の子と害虫で構成されているらしい。

「で、こいつの仲間を俺が倒しちゃったんでどうにかしろって言う」

てきてるんですけど……」

「……………みぞに捨ててきましようか」

「だから相手王子様ー！！」

ゼロにアーリアさんの機嫌を取ってもらいながら話を進める。

なんか、ゼロがアーリアさんをなでてる。……………普通逆だろう。

でもアーリアさんなんか微笑んでるし。あ、目が合った。

めっちゃにらまれてる……………！！！！

「ま、まあともかく、どうしましょうか」

「そうですね……………いっそのこと、私たちのパーティーに組み込んだじやったらどうですか？」

「ん？」

元気に声を上げたゼロの話はこうだ。

“勇者決定戦”開催中にはパーティーの再編成が認められている。対戦を重ねることに数多くのパーティーが脱落するため、生き残ったのに参加できないものたちを救うための救済措置だ。

ゼロいわく、それを使ってちびっ子を俺たちのパーティーに取り込めばいいのではないかと。

……………うーん。

ただのちびっ子ならそんなに迷わなかったかもしれないけど、王子だしなあ……………。

こいつをチームに組み込んだことで、後々面倒になることは避け

たい。

——けど。

「……おい、ちびっ子」

「誰がちびっ子だ！ いい加減この縄を解かぬか！！」

「お前、実力はどのくらいある」

「少なくとも、その“白”には負けん！ ——うわ、ちょ、やめぎゃあああ！！」

……あほづが。再びアリアさんのげんこつがお見舞いされた。

手足を縛られた芋虫状態で叫びながら痛みに耐えるちびっこ。
……ご愁傷様。

ま、ともかくだ。

痛みがひくのを見計らって、もう一度ちびっ子に声をかける。

「——男に二言はないな？」

「ないッ！——」

ほとんど怒鳴り声で叫んだちびっ子の言葉に笑った。

「——じゃあ、おまえはこれからパーティー“モノクロ”の
員だ」

——というわけで、仲間が一人増えました。

二回戦（前書き）

お待たせいたしました。ようやく一段落つき、これからは週一のペースで更新できると思います。

待っている方がいらっしゃるのかは分かりませんが、二回戦、投稿です。

二回戦

ちびっ子を連れて受付へ行き、その場でパーティーを編成した。受付の双子のお姉さんに聞くと、今まででもう結構な数のパーティーが編成されなおしているらしい。

で、丁度そこに居合わせた役員の人に、もうすぐ二回戦だと知らされた俺たちは、部屋には戻らずに闘技場に直行した。

そして、今に至る。

「第いいいい七問！！ アイヤリム王国の首都である、ここ“モルアート”の名産品を答えよ！！」

レポーターの大きな声に続いたのは、男や女の様々な叫び声。合否判定を行い、次々と脱落していく人々。

その中で、一つの声が上がった。

「ふん。俺を誰だと思っている」

小さくとも、その声は澄み渡っている。

「モルアートの名産品といえば、“バーンボーン”に決まっているわ！」

「セーッかいです！！ パーティーモノクロ七問連続正解！」

傲慢に胸を張るちびっ子に向けられるのは、惜しみなない怒号と野次の嵐だった。

~~~~~

今現在俺たちが参加しているのは、“勇者決定戦”第二回戦。

その名も、“叫んで答えて勝ちあがれ！”である。

最初に聞いたときは、一回戦同様ぶっ飛んだネーミングに啞然としたものだが、まさにそれこそがこの試合の全てを表しているといえた。

試合、といったが。

これは一回戦のような肉弾戦ではなく、頭を使った頭脳戦である。一度でも間違えれば即座に失格という、大変厳しい審査方法で、難易度は高い。

先程の第七問のように、とっても基本的な問題ばかりだが、この世界には学校というものがないらしく、ほとんど自分の住んでいる地域の基礎知識ぐらいしかないらしい。

俺たちのパーティーも似たようなもので、俺にいたっては異世界人だということでの世界の事を何一つ知らない。この街の名前もさつき知ったところだ。ゼロは一般人並の知識しか持って居ない。何十ものパーティーがずらりと並ぶ中で、俺たちは他のパーティーが失格するまで何もしないという、消極的な方法に出る予定。

予定、だった。

しかし、ちびっ子がパーティーに入ったことで、状態は大きく好転した。

ちびっ子はこんなに小さくても一応王子サマである。第二王子と  
いうことで、王位は兄が継ぐと決まっているようだが、それでも王  
族としての英才教育は、それこそ物心付く前から始まる。

そのおかげで、王族は一般人を遥かに超えた知識と教養を身に  
つけることが出来、持ち前の能力“千里眼”のおかげで、知らないこ  
とはほぼないといっても過言ではない。

そしてそれは、まだ十歳になりたてのちびっ子にもいえた。

ちびっ子は周りの大人たちを哀れむかのような視線を送った後、  
培ってきた知識をそれみよがしに披露する。そのせいでただいま七  
問連続正解という、とんでもない記録をたたき出している。

「バーンボーンってなんだ？」

「はっ、そんなことも知らぬのか、この愚か者め。バーンボーンは  
この首都モルアートでしか取れぬ特殊な精霊石だ。貴様のその剣も  
バーンボーンで出来ているだろうが」

「へえ。教えてくれたのには感謝するが、言い方がムカつく」

やっば、生意気なガキには制裁を、ってな。

「あいたツ！？ ま、またか貴様！！　そこでこぴんとやらをする  
のをやめろ！　不敬罪で処刑するぞ！」

「残念だったな。この闘技場内はただいま治外法権になってるんだ  
よばーか。法のない自由な空間。治外法権バンザイ」

「貴様……！　ここを出た暁には、貴様など奴隷の“白”もろとも

処刑してやるッ！」

「……………そのまえに、お前がアーリアさんに殺されないことを祈るばかりだな」

そう。ここは法のない場所だ。だから仮にも王子であるちびっ子にも暴言の雨嵐だ。試合に勝てるのは大歓迎だが、敵をあまり作りすぎたりするのは遠慮したい。

しかもこいつの傲岸不遜な態度。脱落していった人たちから送られてくる怨念のこもった視線が体中に突き刺さるようだ。

結局二回戦は全三十問中三十問ともちびっ子が答えてしまい、何十もあるパーティーの中から俺たちしか三回戦に勝ちあがれないという、ある意味悲劇の試合となった。最初は手堅く様子を見ていたパーティーも、ちびっ子の馬鹿にしたような態度に怒り心頭、叫びまくってミスを連発。あえなく失格となった。

……………なんつーか、まあ、一言。

……………俺、なんもしてねー……………。

## アーリアさんと

二回戦を終えた俺たちは、すぐさま闘技場を後にすると、“安らぎの樹”に駆け込んだ。なぜなら、ちびっ子が調子に乗りすぎたせいで脱落していった方々が、我先にと俺たちめがけて突っ込んできたからだ。

おそらく、あの場で全員をのしてしまう事も出来たのかもしれないが、出来るだけ無駄な戦闘は避けたかったし、あの鬼気迫る般若のような形相におもわず足が動いてしまった。

だって怖えよ！！ みなさんそろいもそろって目が血走ってるんだよ！？ ちびっ子なんて強がりながらもがたがた震えてたよ。俺も震えてたよ。

とりあえず部屋の中に立てこもる。なかではアーリアさんが待っていて、ゼロを見つけると前に居たちびっ子を吹き飛ばして駆け寄った。あわれちびっ子。

「……………お帰りなさい。お疲れさまでした」  
「ただいま帰りました」

美女美少女のほんわかとした空気を楽しんでいると、ふいに部屋の外が騒がしくなった。

「……………一体なんですか」  
「ああ、きつとさっきの連中ですね。追いつかれたか」  
「ま、またあいつらが来たのか!？」

ゼロがアーリアさんに説明をしているうちにも、足音はどんどん近づいてきている。ちびっ子は青ざめて後ずさり、俺も内心緊張していた。

そして、ついに足音が止まり——次の瞬間、扉がぶち開けられた。

「ここかつ!!」

先頭集団はいかついオッサンたち。後ろには飛び道具を持った人や、魔術師らしき人たちが居て、どいつもこいつも黒いオーラを発しているように見えるのは気のせいか。

そいつらはぞろぞろと部屋に足を踏み入れると、俺たちをキツとにらみつけた。

その視線に俺とちびっ子はますます後ずさりし、ゼロは小走りでアーリアさんの背に隠れた。

……………そのせいで、若干一人が幸せそうなのは言うまでもない。

「てめえらアアアア!!」

一番前に居たオッサンが声を張り上げた。うわ、耳キーンってなった。

「てめえらのせいで、ここにいる奴ら全員二回戦敗退だぞ!!」どうしてくれるってんだアアアア!!」

ちょ、お前もう叫ぶな。耳キーンは結構めんどくさいんだぞ。直るまで結構イライラすんだかな!

「ふん、情けない。素直に負けを認めぬか、虫けらめ」

「お前が言える立場じゃないって分かってる？お前も俺に同じことしたと思うんだけど」

「……………」

「無視かコラ。いい度胸だな。くらえ制裁ッ！」

「いたあッ!？」

再びデコピン。何回食らえば学習するんだろうねこいつは。

しかも、ちびっ子の言葉のせいでむこうがますます殺気立っている。

「……………はあ」

思わずため息が出てしまった。なんかこっちに来てから災難続きじゃね俺？

まあ、その規模が小さいことだけは救いだけど。

そのため息でまた向こうがうるさくなった。ああもう。

「で、あんたらはどうしたいんだよ？」

俺が声をかけると、オッサンが言った。

「お前らをギッタギタのメツタメタに出来れば満足さ。ああ、それと……………その女とガキは寄越せ。こっちでちゃんと可愛がってやるよ」

止める間もなかった。

次の瞬間狙いたがわず放たれたメスは目にも留まらぬ速さで宙を

飛び、オッサンの体中に突き刺さった。

わざと急所をはずされた、ヤブ医者特製の毒が塗りこまれたそのメスは、体に刺さると同時に毒を全身に回す。

アーリアさんは冷たい目をしていった。

「……………害虫が。そのまま血を流し続けてもがき苦しめばいい」

その瞳に見えたのは、男に対する嫌悪と憎悪。

彼女の根底に深く根付いている、世界を“害虫”と“その他”で分けるしきりが垣間見えた気がして、俺は一瞬の半分目を閉じた。

そして目を開き、オッサンに歩み寄るとメスを引き抜いた。

体に触れて、意識を集中させる。

誰にも聞こえないように、小さく小さくつぶやいた。

「薬」

俺の右腕が視認出来ない程度に発光し、その光がオッサンに流れ込むのを見届ける。

数秒後、オッサンは表情を和らげて意識を落とした。

「……………なぜ助けたんですか」

聞こえたのはアーリアさんの声。俺はアーリアさんに向き直る。背中に他の人たちの視線を感じながら、俺は口を開いた。

「じゃあ、なぜ殺そうとしたんですか」

「……………存在している価値がないと思ったからです」

彼女の声にこめられた、淡々とした感情。

「……………彼が存在していて、なんの役に立つというんですか。ただ本能のままに行動し、他人に害を与えるしかないというのに」  
「……………」

俺はアーリアさんをじっと見詰めた。

「……………その存在がふざけているとしかいえません。生きていても意味がない存在ならば、死んでいたほうが人のためです」  
「本気で言ってるんですか」  
「……………本気です」

俺は後ろをチラリと見た。押しかけてきた人々が所在なざげにおろろしている。前では、ちびっ子とゼロがいつの間にか部屋の隅に避難している。ため息が出た。

本当に、面倒ごとばかり起きる。

「場所を変えましょうか」

アーリアさんがうなずいたのを確認して、俺たちは部屋を出た。ドアの前には人だかりがあつたが、狭い部屋を埋め尽くすほどの人達は、怒りを見せるアーリアさんを恐れてか、何も言わず自然と部屋の入り口までの道を作ってくれた。

——ああもう、イライラする。

## アーリアさんと（後書き）

能口丈徒さまのご指摘により一部訂正しました。

## 俺の世界とあんたの世界（前書き）

冒頭部分は第10部「ヤブ医者と元王宮騎士」の最初と同じようなものが入ります。もしお忘れでしたら、一度読み直してください。完全にシリアスパートです。どうぞ。

## 俺の世界とあんたの世界

幼子は覚えていた。母と呼ばれる人の温かさを。

幼子は覚えていた。まだ見ぬ自分を待ち望んでくれている父の存在を。

幼子は覚えていた。

——母を殺し、父を殺し、周りを不幸にしたのは自分だということを。

冬の野山に打ち捨てられ、身を裂く寒さに震えながらも、幼子は、生きることを望まなかった。

産まれた瞬間に、この身に憑いた呪いを背負い、不幸を振りまきながら生きていく意味が分からなかった。

だから、“死”が“生”の向こう側から手を伸ばしてきた時も、むしろ喜んで手をとった。幼子は、幼子でありながらも誰よりも多くのことを理解していて、この世の真理とも呼ぶべき物を背負っていた。

“死”は恐れるものではないと知っていたし、“生”は必ずしも幸せではないことを知っていた。

——なのに。

気付けば幼子は、再び“生”に抱きかかえられていた。

優しく暖かく、それでいて、残酷で血塗られた“生”に。

——そして、幼子はゆっくりと、手を伸ばすことを諦めたのだった。

~~~~~

俺とアーリアさんは部屋を出ると、“安らぎの樹”にある修練場の中の一つへと移動した。

そこには運良く誰も居なかった。そこそこの広さがある部屋の中で、俺とアーリアさんは再び向かい合った。

先に口を開いたのは、アーリアさんだった。

「……………男なんてみんな死んでしまえばいい」

強く強くこめられた、深く暗い憎悪。

アーリアさんの心の半分を飲み込む闇。

「……………男などくずです。ただ力があるだけの野蛮でおろかな動物に過ぎない。人型をしている害虫を駆除して、何が悪いというんですか？」

「……………人型をしている害虫、ね」

俺はため息をついた。ああ、また俺の幸せが逃げていく。

「人間は、男だけでは生きていけないし、女だけでも無理だ。それを分かっていますよね」

「……………ええ」

「なら、男が存在していることを認めてください」

俺はアーリアさんを見た。色素の薄い、水色の瞳。
彼女はきつぱりといった。

「……………それは無理です」

無表情で言い切る彼女は、一体何を思っているのだろうか。

「……………男が人間の“生”に必要なことは、いいでしょう、認めます。しかし、それは私に必要なものではありません。私は、男と関わりたくない」

そついう彼女の顔は、いつもよりもほんの少し暗く見えた。

俺は気がついた。彼女は根本的なところで矛盾している。

俺は口元に笑みを浮かべた。

「じゃあ、なんで俺と関わっているんですか？」

アーリアさんは弾かれたように俺を見た。

「俺だつて一応は男だし、ヤブ医者だつてそうです。ちびっ子もさつきのオッサンも、男に間違いないでしょう」

彼女の瞳が、揺れる。

「……………だから、なんですか」

“男”なのに、ちゃんと関わってるじゃないですか」

アーリアさんは、目を見開いた。

「“好き”も“嫌い”も、相手が居てこそ成り立つ感情です。本当に男という生き物が嫌いなら、嫌悪をむき出しにするよりも無視したほうが早い。あなたは矛盾しているんですよ。男の存在を認めないといいながら、今目の前に居る俺の存在を認めていることが、証拠です」

「……………いいえ、認めてなど居ません。ただ、許しているだけです」

再び、彼女の瞳に闇が戻ってくる。

彼女は男の存在を、俺の存在を認めているわけではない。ただ、俺がその場に立っていることを、許しているだけなのだ――。

俺は笑い出した。

「あは、は、はははは――！」

ぎょっとしてこちらを見るアーリアさんも目に入らない。俺は腹を抱えて笑った。

許すだって！ あはは、あはははは――！！

あははははははは――！！

「――許すだと――！！」

俺は一転、アーリアさんをにらみつけるようにして見た。

「じゃあ、この世に存在する全てのものには、存在するためにあなたの“許可”が必要なんですか――！」

アーリアさんが、うろたえながら俺をほつを見る。

許す、だと!!？

「底に転がつてる石ところから、この空も海も大地も!!! その存在を維持するためには全て、あなたが認めなければならないでも言っんですか!!」

「………そんな、ことは、」

「———“俺”は“あなた”に生かされているとでも!!!」

俺は、何か言いかけたアーリアさんをさえぎって言葉を発した。

———そうだ。

彼女の心の中にあるのは、男に対する嫌悪と憎悪。

そして、隠し切れない傲慢さ。

———反吐が出る。

俺は視界の隅で、ゼロとちびっ子がこの部屋に入ってきたのを確認した。二人とも恐々とした様子で、こっちを見ている。

………試してみるか。

「じゃあ、アーリアさん」

いきなり大人しくなった俺を怪しみながら、アーリアさんが言う。

「……………なんですか」

「俺を殺してください」

三人の瞳が、極限まで開かれたのを感じた。

「……………な、にを」

「“男”の存在を認めたくないんでしょう？じゃあ、殺してくださいよ」

あなたを慕う、幼い少女の目の前で。

うつたえるアーリアさんは、どうしたらいいのか本当に分からないようだった。

俺はじつくりと待った。ここでゼロがアーリアさんを止めたりすれば、彼女は止まるだろう。少女の願いをかなえるためだと、理由をつけて。

それじゃあ、ダメだ。それは“ゼロの思い”であって、“彼女の思い”ではない。

俺が聞きたいのは、“彼女の思い”だ。

「……………できま、せん」

静かに言葉を落としたアーリアさんは、自分自身の言葉に呆然としているようだった。

ほっとしている子供二人を横目に、俺は満面の笑みを浮かべた。

「——そう、そうです。あなたはちゃんと、“男”ではなく俺を見ている。ヤブ医者だってそうでしょう」

「……………私は」

「ちゃんと“認めて”ください。全部じゃなくて良い。でもせめて、自分の周りのやつぐらいは。あなたの過去に何があったのかは知りませんが、それじゃああなたの世界が苦しくなる」

アーリアさんの目に、光が宿った。

「ま、俺でも認めてもらえたんだから、時間をかければ“人”を認められるようになるはずです。だから、これ以上騒ぎを起こすのはやめてくださいね、ほんとマジで」

俺の体が持たないんで。

そういうと、アーリアさんはゆるゆると顔を上げる。

そして、俺は見た。

彼女の口元に浮かぶ、かすかな笑みを。

「……言いたかったことはそれだけなんで。戻りましょうか」

四人で部屋を出て、歩き出す。

さつきとは打って変わってニコニコしている子供二人に和みながら、俺も歩を進めた。

——“認める”、ね。

そんなのまるで、“カミサマ”みたいじゃないか。

お食事タイム

四人で廊下を歩きながら、俺は内心後悔していた。

らしくもない説教じみたことをしたのもそうだが、アーリアさんを試すような事をしてしまったのもいけなかったと思う。

俺が今まで経験してきた過去と、アーリアさんの過去は何もかもが違う。だから性格も容姿も何もかもが違うことは当たり前なのだ。

それなのに、偉そうに説教たれて訳の分からないことを喚いて、自分の価値観を押し付けてしまった。

(……あれはだめだったよなー)

やめときゃよかった。

はあ、とため息をついた。

前を見れば、身分に天と地ほどの差がある子供が二人、言い争いながらもどこか楽しげに会話をしている。それを後ろから見守り、時々王子サマに鉄拳を食らわせている女性も、かすかに口元がほころんでいた。

(……うん。後で謝るところ)

そう決めて、再び前を向いた。

(……それでも、)

それでも、何か変わったものがあるのならば。

それでいいと、思った。

~~~~~

「よし、飯食おう」

腹が減っては戦は出来ぬという。その通りだ。

空腹というものはとてもじゃないけど耐え難いもので、俺は前に居る三人に急遽そのことを告げ、行き先を食堂に変更した。なんだかんだいって腹が減っていたらしい子供二人は、我先にと駆け出す始末だった。

食堂に入ると、なかなかの盛況ぶりだった。バイキング形式のようで、さっきからひっきりなしに料理人が右往左往している。

「何食おうかな……」

「あ、私アレがいいです！とってきますね」

「おい、俺の分もとってこい」

「……………（ギロリ）」

「ひ、ひいッ！-」

すぐさま皿を持って料理を取りに行くゼロに、ゼロをパシろうとしてアーリアさんににらまれているちびっ子。それを横目に苦笑しながら、俺も皿を持って立ち上がった。

「んー、とりあえず肉。あと肉と肉と……お、肉じゃん」

目に付いたものを片っ端からとっていく。え？肉ばっか？何言ってるのかわからないなーアハハハハ。

意外と空腹は限界に達していたようで、俺はすぐさま料理にかぶりついた。

染み出てくる肉汁を堪能し、食感に舌鼓を打ちながら食事を進めた。

「二回戦も終わりましたし、次の試合まではまだまだかかりそうですね」

ゼロが周囲を見回しながら言う。  
まあ、もつともだろう。一回戦でかなりの数がふるい落とされたとはいえ、残りの数も半端じゃない。

「ふん、頭脳戦では負ける気がしないわ」

「……お前さー、それはつまり肉弾戦では負けるって事だよな」

ゼロにも負けないうか言うからパーティーに入れてやったのに。  
ちびっ子は知らないようだが、ゼロは強い。腕力なら、きっと俺が五人居ても勝てない。

……言って悲しくなってきた。十一歳の女の子に負ける俺（十七歳）って一体……。

「……………ゼロの足を引っ張ったりしたら、あなたたち二人ともちよん切ってあげます」

「いやいやいや、たぶん無理ですそれ」

「ふ、情けないやつめ。たかが十ほどの子供に負けるというのか」  
「お前も子供だけだな」

子供といわれてギャンギャン喚くちびっ子を押さえていると、そのやり取りを聞いていたゼロがニツコリ笑っていった。

「じゃあ、キール様。私と勝負しませんか？」

~~~~~

「この俺が負けるとでも？はっ、寝言は寝て言え」

「ふふふ、私これでも、腕力には自信あるんですよー」

テーブルを挟んで向かい合う二人。二人とも笑いながら火花を飛ばしているのがなんともいえない。

お子様二人は、たがいの肘をテーブルにつき、手をがっしりと握り合っていた。

まあ、所詮は腕相撲というやつだ。

「よし、準備は良いか？そろそろ始めるぞ」

俺は二人の手を包むようにして持つ。

そして、言った。

「——レディ、ゴー——！」

——次の瞬間、ちびっ子の腕がテーブルにめり込んだ。

ベキッ！！！！！！！

異様な音を立てた俺たちのテーブルに、いつせいに視線が集まる。
無言の沈黙を破ったのは、勝者の明るい声だった。

「あは、すいません。手加減できなくて」

笑う勝者と悶絶する敗者。両方とも子供なのに、そのかもし出す
雰囲気、俺は顔を引きつらせるしかなかった。

夢と過去（前書き）

今回早めの更新です。かなり短いです。

なお、今後は本格的な受験シーズンになりますので、三月まで更新できないだろうと思われます。ご迷惑をおかけします。
では、どうぞ。

夢と過去

俺たちが三回戦を行なうのは、どうやら一週間ほど後の事になるらしい。

受付の双子にそのことを聞いた俺たちは、もう部屋に戻って休むことにした。

ふと空を見れば、“オールテスの空”が深い紺色に染まりつつあるのが見えた。

四人には充分すぎるぐらいの部屋で、それぞれ各自の部屋に引込む。

監視を気にしながらも、俺は案外簡単に眠りに落ちた。

そして、気がついたら病院だった。

「……………え？」

周りを見回す。白い壁に、白い天井と床。立派な一人部屋だが、ベッド脇にある花瓶には花がない。冷たいベッドに横になつていた俺は首だけ回してそのことを確認した。もっとよく見れば、この部屋には生活感というものが見当たらない気がした。

窓には分厚いカーテンが引いてあった。時計もなく、今が何時か分からない。だが俺は直感的に、今は夜だと思った。

体を起こそうとすると、腕に力が入らなかった。なんとか目の前

に腕を上げれば、つながれている何本もの管。そこに流れている透明な液体を見て、俺はめまいがした。

（……………ああ、これは）

俺は再び首を回した。ベッドの横にある小さな棚の上にあるのは、治療費や入院費の明細。

無残にも破られたそれは、何かの液体で濡れていた。

（そう、だ。俺は行かなきゃ、）

「行かなきゃ、いけない」

力を振り絞って体を起こした。布団を引き剥がし、体のあちこちについた管を引きちぎる。痛みが走っても気にならなかった。

震える足でベッドから下りてスリッパを履いた。そして、数え切れないほどある点滴の中から一本を選び、その点滴をとりはずしてしっかりと持った。

次に、明細をもはや原形をとどめないほどにびりびりに破いて、洗面台に流した。

たったそれだけの作業で悲鳴をあげている体を見無視して、俺は部屋のドアに手をかけた。

はやく、早く行かなきゃならない。あいつが来る前に――。

目を覚ました。

目を思いっきり見開いて、回りの景色を確認する。

木で出来た部屋、黒い服に、刀身の白い刀。

それらを確認して、俺はゆるゆると目を閉じて、再びベッドに
ずんだ。

睡眠を取ったのに、ひどく疲れているような気がした。しかし、
もう一度眠れるような気はしなかった。

夢の中の何倍も楽に体を起こすと、窓の外を見た。まだ日は昇っ
ておらず、外は暗いままだった。街を見れば、街灯以外の明かりは
ほんのわずかだ。

「……く、そ……」

ため息をついて、ベッドに横になる。体だけでも休めておこうと
思っ^て目を閉じたが、結局その後、俺は一睡も出来なかった。

まぶたの裏に映るのは、走馬灯のように見える俺の過去。

いつまでもまわり続けるそれに嫌気がさして、俺は顔を歪めた。

現実（前書き）

更新遅れまして申し訳ありません。なお、今後は週一のペースで更新できるだろうと思われます。それでは、どうぞ。

現実

ベッドから体を起こして、やることも無く宙を見つめていると、ふいに部屋の外が騒がしくなった。

何事かと思いリビングに繋がるドアを開くと、そこには。

「うるさい黙れ無礼者！ “白”の分際で王族にはむかうなど言語道断いたたたたたたあ！？」

「……………少しあちらを向いておいってください。この害虫をチリも残さず駆除しますから」

「何この状況。デジャヴなんだけど」

ゼロを後ろに向かせながらちびっ子に向かってメスを構える（というかもう何本か床に突き刺さっている）アーリアさんと、顔を青ざめさせながらも王族としての威厳を保とうと無駄な努力をしているちびっ子がいた。

「おいちびっ子。お前は何回アーリアさんの怒りを買ったら気が済むんだ」

実は自殺志願者だったのか？

「違うわ馬鹿者が！　つかちびっ子言うな！キール様と呼ばぬかうぎゃあああああ！？」

「……………あなたなど害虫で充分です」

「はいアーリアさんストップ」。それ以上やるとちびっ子が三途の川渡っちゃうから」

「ユウ様、三途の川って何ですか？」

「……えーと、あれだ。天国にある黄金の川だ」
「ユウ様は物知りなんですねー」

ちよつとした好奇心で嘘をついたらあつさり信じられてしまった。何この罪悪感。ゼロのキラキラとした尊敬ビームに押しつぶされそうなんですけど。

とりあえずゼロにアーリアさんをなだめてもらい、ちびっ子を引っぱがす。ちよつと勢いが強すぎて床に頭を打ったとか気のせい気のせい。

「っーかなんで喧嘩してたんだよ」

いまだにらみ合う（アーリアさんが圧倒的に有利に見える）二人を見ながら呆れたように言うと、ちびっ子が勢いよく口を開いた。

「この女が俺の事をその“白”より弱いなどとほざくからだ！」

「………事実を言って何が悪いんですか害虫」

「アーリアさんちびっ子の事害虫で定着しちゃってるんですけど。っーか弱いだろ」

「ありえんわ！ まだ若輩者であつても王族の端くれとして、そこらの貴族どもよりも魔力量も熟練度もはるかに違う。それなのにたかが！ たかが“白”に負けるだ！？」

「でもキール様、腕相撲私に負けてましたよね」

「……あ、あときは体調が優れなかったただけだ！ いざとなればお前の一人や二人、指一本で倒せるわ！」

「見栄張るな。お前の今の腕力じゃ百回やつても無理だから」

っーか俺ですら負けるのにちびっ子が勝ったりしたら泣く。マジ

泣きしてやるからな。

「つーかちびっ子の実力知らないんだよなー」

強いのか弱いのか。使えるのか使えないのか。守らなければなら
ないのか。

三回戦はおそらく、一回戦と同じような肉弾戦だ。ここでちびっ
子の力を見極めておくほうが、今後の方針を検討できる。

「お前確かゼロより強いって言ってたよな。今からそれを試してみ
るか」

「どうやってやるんですか？」

俺はゼロとちびっ子を見てニヤリと笑った。

「——真剣に、一対一のガチンコ勝負だよ」

後に、アーリアさんから「……………あの時のあなたは魔王レベル
で気持ち悪い笑顔でした」と冷たく言われ、本気で自信をなくした。

腕試しと不穏な空気

「んじゃ、用意は良いか？」

俺たちは“安らぎの樹”の中にいくつか存在する修練場の一つに移動すると、ゼロとちびっ子を向かい合わせた。入り口付近にはアーリアさんが立ち、誰も入ってこないように見張ってくれている。

ゼロもちびっ子もいつものような笑みを浮かべていたが、なんとなく後ろに般若が見えるのは気のせいかな。

(……子供同士のチャンバラのはずなんだけどなー)

この吹雪が吹くような空気は一体なんなのだろうか。

ちびっ子のやる気の源は、王族としてのプライドだろうか。第二王子だとしても、金の瞳を持つものとしての誇りがあるのだろうか。ならゼロは？ ゼロは“白”で、世間では“無色人”よりも下に位置する存在としてある。上に位置する者への反抗心だろうか。しかし、そんな気持ちがあるなら“黒”である自分にはついて来なかったはずだ。

うーんと首をかしげていると、ゼロとちびっ子の会話が耳にはいった。

「今回も勝たせてもらいますからね！ キール様なんて、瞬殺してみせます！」

「ふん。お前ごときに負けるようなことがあれば、王族の名折れだ

「！」

やはりちびっ子はプライドか。しかし会話を聞いていると、ゼロのやる気はただの負けず嫌いから来ているような気がする。瞬殺とかいう言葉が出てくるところにアーリアさんの影響を感じてちょっと不安だが。

(……そういや、ゼロは奴隷商人に買われてここまで来たんだっけ)

山奥の農村に住んでいたゼロ。そこには、こんなふうに喧嘩が出来る友達などいたのだろうか。

そして、ゼロの家族は――。

ふと物思いからかえると、お子様二人が試合開始の合図を今か今かと待っている状態だった。

俺は小さく笑うと、上げた片手を一気に振り下ろした。

~~~~~

ぺたぺたと、安物のサンダルの音が廊下に響く。白衣に眼鏡をかけた男は、口笛を吹きながら診療所の地下へと向かっていた。久しぶりの解剖に胸が躍る。

重厚な扉を開くと、薄暗い雰囲気のことには似合わないぐらいの光が溢れていた。歩みを止めることなく奥まで進む。

そこには王宮から派遣された兵士が何人かと、ただの肉塊と化した魔物の死体が一つあった。男の姿を見た兵士の一人が寄ってくる。

「今回も要請にお応え頂き、ありがとうございます、ノワール殿。さっそく、こちらを見ていただきたいのですが」

「分かってるよ、アルマン。僕としても、早くメスを入れたいからね」

ふんわりと笑っているはずなのに、なぜか背すじが寒くなるレイの微笑に、アルマンは思わずぶるりと震えた。王宮騎士になってもうすぐ三年が経つが、この人の笑顔にはいまだ慣れることはない。気を取り直すと、アルマンは魔物のほうへとレイを導いた。

「これは……」

魔物の姿を見たレイの瞳が、ずっと細められる。

「こいつを倒したのは、少なくとも人間じゃないね」

「ええ。恐らく、こいつよりも上位の魔物によるものかと」

横たわる魔物の死体には、多くの穴が開いていた。等しい間隔をあけて並んでいるそれは、何かの歯形のようにも見える。

四本ある腕のうち一本が食いちぎられ、他には致命傷となった胸の大穴があった。

「それなりに頭脳も発達しているように見えます。少なくとも、食用に殺したのではないようです」

「他の生き物が食べようとした形跡もないね」

魔物とて、動物の一種である。その異様な見た目からそんな名が付けれはしたが、危害を与えなければ危険な存在ではない。

しかし、魔王が力を持っているときは別だ。

魔王という存在がどう作用するのは今のところ分かってはいな

いが、魔物はほとんどが凶暴化し、生きるためではなく殺すための活動を開始する。

魔物による人的被害はそれが主で、だから人々は魔王を殺そうとするのだ。

「やはり、最近魔物の活動が活発化しているのも……」

「まあ、十中八九そうだろうね」

「……魔王が、もう動き始めているなんて」

アルマンは顔を歪めて首を振った。彼の脳裏に映るのは、三年前の“勇者決定戦”。

そして、ある哀しい悲劇だった。

「……あとは僕がやっておくよ。報告はそっちにまわすから」

「はっ。それでは」

アルマンは忌まわしき記憶を頭の隅に追いやると、部下を連れて部屋を出て行った。

レイは彼らの後姿を見送ると、ゆっくりと息を吐いた。

「彼にはきついだろうね……」

レイはそつと目を閉じる。まぶたの裏には、いまだに鮮明な映像がよみがえる。

彼——アルマンが王宮騎士になるきっかけであり、自分やテイズが王宮騎士をやめるきっかけになった出来事。

しかし、今更どうにも出来ないことだ。

レイは気持ちを切り替えると、鋭利に光るメスを手に取り、魔物の死体を見下ろした。その瞳に浮かぶのは、先ほどの憂いなど微塵もない、純粹な歡喜。

「さて………楽しませてもらおうか」

彼の唇が、ゆっくりと弧を描いた。

## 戦いの結果と服屋の逃亡

修練場で向かい合うゼロとちびっ子は、お互いにいったん距離をとった。そのままピタリと両者が停止する。

ゼロは自らの腕に力を込めて好機を待ち、ちびっ子は瞳を瞬く。

先に動いたのはちびっ子だった。

勢いよく地面を蹴り飛ばすと、瞬間的にゼロに肉薄する。ゼロが放った一撃をかくぐり蹴りを繰り出した。

ゼロはそれを片手でさばくと、空いた胴めがけて拳を出す。ちびっ子がそれをしゃがんで防ぎ、飛び上がるような形での攻撃。

もはや子供同士の戦いではない。というか戦いの中で目突きやら頭突きやら足掛けやらの搦め手が目立つのは気のせいかな。すんごく卑怯っぽく見える手を次から次へと繰り出し、しかもそれを正確に対処する手際。

(……こいつらほんとに子供ですか?)

俺だったら力づくでしか対処できないと思う。

そんな権力構図の頂点と底辺に位置する二人は、ますます激しい戦いを続けていた。

今回はあくまでも腕試しということで、ゼロの短剣やちびっ子の武器は没収している。よって形式は自然と無手での組み手ということになり、試合の質も落ちるかと思ったのだが。

「やりますね……」

「……………ええ」

ぼつりとつぶやくと、アーリアさんもうなずいた。

ゼロは“白”の女性ならではのパワーが、ちびっ子は神の瞳が持つ周囲の把握能力や先読みの力が突出しており、お互い一步も引かない攻防を見せていた。

どちらかというと力技のゼロの一撃は、一度当たれば相手に多大なダメージを与えるだろう。小回りのきく小さな体でスピードもある。

ちびっ子はその攻撃一つ一つを正確にさばき、ゼロ以上のスピードで動き回る。一つ一つの攻撃は威力が少なくても、手数が多い。

どちらも一進一退といったところだが、どう転がるのだろうか。

目の前の戦いはますます速さを増していく。武器は一切使っていないはずなのに、時折さまざまいい音が聞こえてくるようになった。

「ちい、さっさとくたばらぬか！」

「そっちこそ、ちょこまか逃げ回らないで下さい！」

「……………ならば私があ害虫の動きを」  
「止めないで下さいお願いします」

戦闘中のゼロの声に反応するアーリアさんはどうにかならないの  
だろうか。

二人の対決を見守っていると、ふいにアーリアさんが出口へと顔を  
向けた。何事かと思ってそちらを見ると、そこにはいつの間にか  
ティズさんがいた。

「あれ、ティズさん帰ってきてたんですか」  
「そうだよ。店のほうもひと段落着いたからね。あんたたちを探し  
てたらここに行き着いたのさ」

ティズさんは部屋の中の対決に目を留めた。

「ほう、あれが例の第二王子かい。ゼロとやりあうなんて結構やる  
じゃないか」

「そうですね。俺の予想なら五分ぐらいでゼロの力にねじ伏せられ  
るかと思ってたんですけど」

「……………予想外」  
「うるさいわ貴様ら！」

ちびっ子が叫ぶが無視である。

「やっぱりあのくそじじいの息子だねえ。しつけがなってないつた  
らありやしない」

「……………ちなみに、ティズさん王様と面識あんの？」  
「まあね。それなりに顔は知ってるよ」

「ただの服屋なのに？」

「う、そ、それはね……………」

明らかな疑問点を指摘すると、ティズさんは思いつきり顔をそらした。隠し事が下手なのか、悪いがばれればである。

「しかもくそじじいと呼べるほどに深い間柄だと見た」

「え、ええと…………そう、あれだよ、王様の服を仕立てたことがあった——」

「王宮には専属の服飾職人がいるっていつてなかったっけ？」

「それはその、お、王様が普段とは違う趣向の服を着たいと——」

「へえ、それはどんな？」

追い詰めると面白いようにぼろを出す。実際ティズさんの経歴に興味があったのは確かなので、つつきつつきしていると、ティズさんが急に大声を出した。

「ええい！ ゼロ！ そのガキ倒したらあたしがいくらでもおこつてやるよ！」

「ええ、本当ですか！」

「ちよ、まてそこの女、ガキとは一体誰のことを——うぎゃあああ！」

ゼロは育ち盛りである。もう一度言おう。ゼロは育ち盛りである。そんなゼロの前に差し出された『食べ放題』の文字。

飛びつかないほうがおかしいだろう。

ゼロはティズさんに反論という行為を行なうことで隙を見せた。ちびっ子を容赦なく殴り飛ばし、ちびっ子はろくに受身もとれぬままに叩きつけられた。

ゼロはティズさんに駆け寄ると、キラキラとした瞳でティズさんを見上げた。ティズさんは俺が先ほどの話題に触れないうちにそそくさとゼロをつれて修練場を出て行き、アリアさんもすかさずその後を追う。

修練場に残されたのは、いまだに床の上で悶絶してピクピクと震えるちびっ子と、見事に逃げられた哀しい俺だけが残ったのだった。

## 双子と双子

数分後、我に帰った俺は床の上でびくびくと痙攣するちびっ子を回収して女性陣の後を追ったが、どうやら見失ってしまったらしい。“安らぎの樹”はかなり大きな建物なので、しらみつぶしに探すことも難しい。

多分どこかの食堂だろうとあたりをつけて、ちびっ子をつれて先に部屋に戻ることにした。とりあえずちびっ子を部屋においておけば、俺も自由に動けるだろう。

馬鹿みみたいな怪力のおかげで重みは感じないが、万が一にも王子サマを落とさないようにしっかりと抱えなおしながら、俺は部屋へと歩いていった。

時々すれ違う人々は試合を勝ち抜いてきただけあつてか、なんとなくか纏うオーラが違う。俺みたいなドーピング野郎がいることを謝りたくなる。だが俺も譲れない。全ては金貨の……ごほん、人々のためだ、うん。

俺はぼんやりと先ほどの試合を思った。ちびっ子は宣言していた通りゼロの動きにちゃんとついていっていた。最後こそ隙を見せて負けたものの、その動きはよどみない。俺やゼロのような急ごしらえのやり方ではなく、きちんとした指導を受けて培ってきた力だろう。それでいて、正攻法だけではない。

気配を消すのも得意なようだし、戦力になるのは確かだろうな。そんな考えにふけていたのがいけなかったのか。

無意識に足を動かしていた俺は、どうやら厄介ことに巻き込まれたみたいだった。

「なあ、兄ちゃんはどう思う？」

「ぜってー俺のほうが強いよな？」

突然聞こえてきた声に驚いて歩みを止めると、ちびっ子より一回りか二回りは大きい少年が二人いた。

どうやら双子のようで、驚くほど似通った顔をしている。翠の瞳と金の髪に既視感を覚えながら、俺はようやく声を出した。

「……え、何の話だ？」

「もう兄ちゃん、人の話聞いてねーのかよ」

「人の話聞かないやつは人間としてダメなんだって姉ちゃん言ってたぞ」

会ったばかりの奴にダメ出しされる俺って……。

「そりゃあ悪かったな。で、何だった？」

「だから、俺とコイツのどっちが強いかって話」

同時に口を開いた双子はまったく同じ口調で話した。おお、シンクロ。

つーかまた強さ勝負かよ。コドモはこんなのが好きなかねえ。

「いやそんなの知らないから分からないんだけど」

「んじゃ第一印象は？」

「どっちが強そうに見えた？」

「どっちがって……どっちも貧弱そうな」

「ああなんか言ったかコラー!!」

「恐っ！！いきなり恐っ！」

正直な感想を述べたら顔が！顔がまるで般若のように！何こいつらめちゃくちゃ恐いんだけど！

背中のちびっ子がうるさそうに身じろぎする。

俺は方針を変えることにした。日本人なめんなよ！

「えーとな……どっちも同じくらい強そうに」

「ちゃんと結論出せやてめえドタマかち割るぞ」

「ほんとにお前らなんだよ！？」

二重人格ですかそうですか！？ ヤのつく自由業の人みたいな言葉だったよ！

「だいたい、何でそんなに強さにこだわるんだよ？」

「そんなの決まってんじゃないか」

「当たり前だろ」

双子ははつきりと言った。

「姉ちゃんを助けるためだよ」

俺は首をかしげた。

「姉ちゃんって、お前らの姉か？」

「そうだよ、あんた知らないの？」

「入り口で受付してた双子がいたでしょ？」

「ああ、あの！」

そういえば、こいつらとそっくりの顔した双子の受付がいたな。

こいつらに既視感を覚えたのもそのせいかな。

「姉ちゃんは王宮で仕官してるんだ」

「めちゃくちゃ強い魔法士なんだぜ！」

「へえー……王宮の魔法士か」

そんな人が受け付けやってるんだ、国も力を挙げてこの試合に取り組んでいるんだろう。

「姉ちゃんの仕事はな、」

「王宮の警備と、」

「魔法の研究と、」

「「そんでもって、この“勇者決定戦”の不正取締りなんだぜ！」」

双子が誇らしげに語る。その瞳には、姉への尊敬と羨望を感じ取れた。

「不正取締りって、具体的にはどんなことをしてるんだ？」

「そりゃ、怪しい奴がいないか見てまわったり、」

「古代語を使って部屋の監視を」

「馬鹿！ それは言っちゃダメって姉ちゃんが言ってただろ！」

一人が言いかけたことを片割れが頭をひっぱたいて止めた。しかし、聞こえてしまったものは聞こえなかったことには出来ない。

やはり、あの“視”は監視用だったらしい。それがどうやって監視されているかということまでは分からなかったが、裏が取れただけでも良いだろう。

とりあえず、適当に誤魔化して逃げるか。

「そーか。まあ、なんだか分からないけどお前らの姉貴はすごいん

だな」

「その通りだな！」

「なかなか分かる奴じゃんか！」

「ああ、まあな。んじゃ、俺はここら辺で」

すばやく二人の間をぬって歩く。捕まらないうちに逃げよう。

「あ、ちよつと待てよ！」

……逃亡失敗か。振り返りたくない。恐る恐る、ちらりと後ろを見ると、双子がニヤリと笑って言った。

「俺とコイツ、どっちが強い？」

~~~~~

結局双子を振り切れたのは数十分が経ってからだった。いつまでもどっちが強いとうるさい双子を、最終的には半ばやけくそで逃げた。だってあいつらしつこいんだよ！

遠回りになりながらも部屋へ向かう。だいぶ人のいるところから離れたようで、聞こえるのは俺の足音だけだった。

「で、いつまで寝た振りをしているつもりだ？」

「……なんで分かった」

「寝息が聞こえなかったからな」

「……ふん、あんなにやかましく騒がれては眠れるわけもなからう

が」

背中へ向かって声をかける。どこかふてくされたような声音のちびっ子に苦笑した。

「そんなに負けたのが悔しかったのか？」

「……………ふん」

「へこむなって。ゼロ相手によくやったと思うぜ？　実際、俺でも勝てるかどうか分からんってのに」

「俺と貴様は違う」

「んなこたあ分かってんだよ」

静まり返っている廊下に響く俺たちの話し声。ちびっ子が俺の服をぎゅっと握った。

「少なくとも、こてんぱんに負けたわけじゃないだろ？」

「……………だが、負けは負け。敗北者は王族としてあることが認められぬ」

吐き出すようにつぶやくその声は暗い。

「俺は、いつまで経っても何も出来ぬ。いくら努力しても、あいつには追いつけない……………」

俺には、ちびっ子が言う『あいつ』が誰のことなのかは想像もつかない。でも、分かることもある。

「俺は……………」

「女々しいんだよ、お前」

何か言おうとしたちびっ子をさえぎる。

「一回ぐらい負けたからって何だよ。努力して努力して努力して、見返してやれよ」

「努力したって何も変わらぬ。どうせ俺は——出来損ないだ」
「ふざけんな」

俺は歩みを止めた。いきなり感じが変わった俺の様子に、ちびっ子が困惑したように声を漏らす。

「何が出来損ないだ。健康な体と親と地位と権力と力を持っておいで、そんな事を言うのか」
「——だって」

ちびっ子の声が泣き声に変わる。

「どれだけやってもダメだというのに、嫌というほど分かっているのに、これ以上何をしろというのだ!？」

悲痛な叫び。こいつにも、暗い過去があつたのだろうか。

——だが、それでも。

「自分を卑下してもう何も出来ないと塞ぎこんで、全てから背を向ければ満足か？」

背中にあるちびっ子の顔は見えない。

「前を向くこともせずに、進めないと決め付けてどうする気だ？」

俺の服を握る力がギュッと強くなる。

「なにも出来ないなんてことない。やってみないと始まらない。やりたいことをやって、それで出来なくても何も悪くなんかない」

ぐす、と泣く声が聞こえる。

「お前のやりたいことは、なんだ？」

「——強く、なり、たい！」

泣き声ながらもようやく前を向いたちびっ子に、俺は笑った。

「んじゃ、まずは“勇者決定戦”で優勝しないとな」

お前を馬鹿にした奴らを見返してやろうぜ？

ひっく、と泣き続けるちびっ子をあやしながら、再び歩き出したのだった。

三回戦（前書き）

更新遅れました。しかも極端に短いです。ご了承ください……すいません。

三回戦

それから、俺たちはほとんどの時間を“安らぎの樹”で過ごしていた。時々闘技場に行つて他のパーティーの試合を見たり、広い敷地を散策することもあった。

強くなりたいと言つたちびっ子には、アーリアさん選りすぐりの地獄の特訓メニューでたたき上げを。ゼロと俺は、ティズさんとヤブ医者を相手に基礎も交えた応用へと発展していった。

……ちびっ子の体験したモロモロについては触れないでおく。だつて怖えもん。

……………ゴホン。

まあ、そんな日々を経て、——俺たちは三回戦のフィールドに立っていた。

~~~~~

## 三回戦。

一回戦は乱闘まがいの肉弾戦。

二回戦は知能かがやく頭脳戦。

この二つは、事前に内容を参加者に知らされていた（しかし配布された紙に書かれた字は読めなかったので知らなかった）。

だからこそ参加者はそれに応じて準備し、パーティーを組んでこの

“勇者決定戦”に参加した。

しかし、である。

三回戦はまったくいいほど情報がない。

何をするのか、誰と戦うのか。開けてみなければ分からないパンドラの箱である。

「一体何をするんでしょうね？」

「……………事前情報がまったくありませんから」

「ほんとにねえ。何をするんだと思う？　僕は魔物の解剖対決がないなあ」

「そんなことが許可されるものか。父上が国内に魔物を入れるなど、ありえんわ」

「とりあえず、解剖はないだろ。あつたら困る」

雑談を交わしながら立つ。大人組は観客席へと移動し、俺たちは他の参加者と共に中に散らばる。

「みなさん、お待たせしました……………」

どこからともなく聞こえてくるレポーターの声に、会場に緊張が満ちていく。それぞれ張り詰めた表情をする参加者達が、観客席の中央に設置されてある簡易式の玉座に注目した。

「これから始まる、“勇者決定戦”最終戦は――」

突然、ガチャン！！と大きな音がしたかと思うと、参加者が入ってきた全ての扉が閉じられた。

「なに！？」

「どういうことだ！？」

叫び声が消える前に、それは現れた。

玉座の下にある灰色の壁が音もなく開き、そこからなだれ込んできたのは。

「――――モンスター B級魔物との、命がけのガチンコバトルだ！！」

かつて見たこともない、醜悪な魔物どもだった。

## V S 魔物

魔物。

そういわれて真っ先に思い浮かぶものといえば、一体なんだろう。

某ゲームのスライムか？

昔ながらの妖怪か？

ファンタジックな猛獣か？

俺からしてみれば、魔物は――、  
“ ” だと思う。

くくくく

闘技場内、観客席の真下の壁の向こうから現れた、魔物。

よくゲームでは形が狼に似ているものや、ドラゴン、スライムなどが出てくるが、この魔物は似ても似つかぬ姿をしていた。

――人型なのだ。

真っ黒に塗りつぶされたようなどす黒い鎧に武器。まるで暗黒の世界から飛び出してきた兵士のような。大きさは軽く俺の二倍くらいある。目があるはずのところにはぼっかりと穴が開き、闇がそこにたたずんでいる。指や腕、瞳の数がめちゃくちゃで、まるで出来の悪い人形を無理やり動かしているようだった。

俺は思わずぞっとして後ずさった。

（——なんだよ、あれッ……！）

恐怖で体が硬直する。歯がガチガチとなり、冷や汗がこめかみを伝い落ちた。

「なぜ、こんなところに魔物がいるのだ！？ 父上は一体何を！」

ちびっ子の声が聞こえる。それでも動けない。

この世界に来たときでも、こんな恐怖は感じなかったのに。人と戦った時でさえ。

怖い。

怖い。

怖い。

この異形の形をしたイキモノが。

この醜い姿のいきものが。

この闇に覆われた生き物が。

——まるで、病を具現化したようで。

「っはあ、はあ、ああ……！」

呼吸が荒れる。顔が苦痛で歪むのが分かった。

駄目だ。今、こんなとき、に。

「——ユウ様ッ！！」

突然、ゼロに腕を引つ張られた。すさまじい勢いで体が横にずれる。と、そこへ間一髪で魔物の腕が突き刺さった。

顔が青ざめるのが分かった。魔物には真っ黒で鋭い爪があり、それがさつきまで俺が居た地面を深々とえぐっていた。

思わずゼロを見ると、ゼロも焦ったように後ろに下がった。

「貴様ら下がれ！　今すぐそいつから離れる！」

ちびっ子の叫びにはっと我に返り、ゼロの手をとって急いで距離をとる。魔物は次のターゲットを定めたようで、違う方向へと進んでいった。

「っなんだよ、あれは！？」

「魔物だ。人型ということはB級で、普段は国外の森の外れに住んでいる。なのに、なんだってこんなところに……！」

「私、一度だけあれを見たことがあります。私の村は国境付近で、

たまに冒険者の人がそこを通って森へ向かうんです」

「討伐しに行くのか？」

「はい。でも、普通の冒険者じゃC級で精一杯で……私が見たあれは、死体でした。でも、あれを一匹倒すために、冒険者が半分以上……」

ゼロはそこで顔を歪めた。悲痛そうなの顔に、俺は視線をそらせなかった。

「通常、B級ともなれば一つのパーティーで一体相手にするのが限度だ。ざっと見たところ、パーティーと魔物の割合は2対1だが……犠牲は免れんだろうな」

「お前の親父はなにを考えてるんだよ！？」

「知るか！ むしろ俺が知りたいわ……父上は一体、何をする気だ！？」

ちびっ子が簡易玉座に座る父親を睨みつける。ここから見ても、

国王は表情を変えた気配はない。

と、ちびっ子の後ろに忍び寄る黒い影。

「っ！」

俺はちびっ子の襟元を引っつかむとゼロに放り投げ、間髪入れずに魔物の胸めがけて蹴りを入れた。

エセ神に強化された俺の脚力は相当なものだ。思いっきり叩き込むと、魔物が後ろに一メートルほど下がった。

俺はすぐに下がって距離をとった。

「硬いな……」

人体の皮膚の感触だったが、その皮の下には金属板が埋め込まれているのだろうか。蹴ったこっちの足が痛くなるほどだ。

「ちっと、手こずりそうだな……」

俺は、魔物をまっすぐに睨みつけた。

——いつの間にか、胸の痛みは止まっていた。

## 地獄の中で（前書き）

なんのお知らせも無く更新停止申し訳ありません。今後も週一で更新していきたいと思いますが、またこのようなことがあるかもしれません。

こんな私を受け入れてくださる寛大なお方々は、これからもお付き合ひよろしく願います。  
では、どうぞ。

## 地獄の中で

「っはあ!!」

こちらにやってきた一体の魔物に蹴りを叩き込む。しかしダメー  
ジは与えられていないようで、ふらりと後ろによるめくだけだった。  
俺がすぐさま後ろに飛びのくと、魔物の腕が空を切った。左右の  
腕に加え、肩甲骨の辺りから生えるもう1本の触手が、開いた距離  
を簡単に詰めて伸びてくる。

「炎よ暗闇を焼き尽くせ」!

とつさに腕を出して手の平から炎の塊を発射する。運良く触手に  
当たり、触手は見る見るうちに炎に包まれた。魔物が金属音のよう  
な叫びを上げて、怒りのままに俺に突進してくる。

ドンッ! と地面に響くほどの脚力で地を蹴った魔物は一直線に  
俺に向かってきた。

(ッ速い、よけきれな……!)

とつさに身をひるがえそうとするも間に合わない。

「——はあっ!」

と、俺と魔物の間にゼロが飛び込み、その小さな手で魔物を思い  
つきり殴りつけた。

俺の蹴りよりも強いゼロの拳に、魔物が吹っ飛んでいく。

「ゼロ！」

「大丈夫ですか、ユウ様」

ゼロは周りに注意を払いながら俺の横に立った。ちびっ子を探すと、すこし先で魔物に攻撃を仕掛けていた。一撃離脱を繰り返すその姿に、俺も加勢しようと駆け出す。

魔物の背後を取ると、刀をはじめて抜いた。

シャラン、と軽い音を立てて刀身が姿を現す。俺は魔語を口にしていた。

「汝我が言の葉に応えよ 白刀<sup>はくとう</sup>！」

刀（白刀と名付けた）に魔力を勢いよく注ぎ込む。刀身が俺の魔力で内側から光り始めた。

「その身に焰を宿し 我を導く灯火となれ」！

魔語<sup>スベル</sup>を唱え終わると共に、白刀が一気に赤く発光し、刀身に炎を纏った。

俺は刀を振り上げると、全力で魔物を袈裟切りに斬りつけた。

「うりゃああああー！！」

ズバンッ！ と魔物の身が音を立てて斬れる——はずもなく。

燃える刀は魔物の肩口に食い込んだかと思うと、そこから背中  
真ん中辺りまでをぐちゃぐちゃに抉り取った。

傷口には魔力の通った炎がまとわりつき、魔物が苦悶の叫び声  
あげる。それに驚いてちびっ子がこっちを見ているのが分かったが、  
俺に声を出す余裕は無かった。

（く、そ……なんだよ、これっ！！）

気持ち悪い。魔物の硬い肉を無理やり抉った感覚が手にこびりつ  
いて離れない。

刀についた魔物のどす黒い体液をはらい、俺は顔を歪めて魔物を  
見た。

「くそ……！！」

こちらを振り返った魔物が見えて、俺は無我夢中で刀を振るった。  
魔物の身体に刀傷が増えるごとに、炎の勢いが増していく。ボタ  
ボタと地面に染み込んでいく体液の臭いに頭がおかしくなりそうだ  
った。

「グオギヤアアアアアアアアア！」

魔物が咆哮をあげる。俺は何も考えず、ただ本能のままに魔物の  
口に刀を突っ込んだ。

すぐに炎が魔物の口内を焼く。刀は口から魔物の頭の後ろまで突  
き破る。俺はその感覚に我に返り、ぞっと思わず刀を引いた。

もはや声も出せなくなった魔物が苦痛に苦しむ。俺はその姿に寒  
気を感じながらも、魔物が動かなくなるまで刀を振るい続けた。

やがて魔物がその巨体を地面に倒す。俺は汗だくで魔物を見つめ、死んだことを確認した。

「……………死んだ」

俺が殺した。

——考えるな。今はそんな事をしている場合じゃない。

俺は周りを見回した。すると、そこには地獄が広がっていた。

死体。死体死体死体。

魔物の死体。人間の死体。

血に塗れ、はらわたをむき出しにした人。

頭をやわらかい果実のようにつぶされ、手足をなくした人。  
生きたままに魔物にむさぼられている人。

「あ、ああ、あああああああ！……………」

思考回路がぶっ飛ぶ。何も考えられない。

ただ、心の奥底で思っているのは。

（だ、めだ……殺さなきゃ。俺が、殺さなきゃ）

じゃないと、殺される。

俺は無意識のうちに走り出していた。

その目にあるのは、ただ真っ黒に塗りつぶされた殺意だった。

## 生まれ変われ（前書き）

ストックが切れました。

よって、今までよりさらに更新が遅くなる可能性があります。

が、がんばって更新していきたいと思えますので、どうかこれからもよろしく願います。

## 生まれ変われ

俺はなぜこの世界にいるのか。

（それは俺が前の世界から捨ててきたから）

俺はなぜここに立っているのか。

（与えられた目的へと到達するために）

俺はなぜ刀を振るっているのか。

（みんなを守り、悪を葬るために）

—— 本当に？

~~~~~

「あ、ああ、あああああ！」

頭の中が真っ白になる。瞳の奥で明滅する赤に誘われるようにして声を張り上げた。

俺の叫び声に、魔物が一匹、二匹と俺に近づいてくる。

俺は喉が干切れんばかりに空気を震わせる雄たけびを上げた。まるで何かから逃げるように。

刀が届く範囲にあるものは全て斬った。時には炎を、時には氷を、時には雷を刀身に纏わせ、ただ刀を振るい続けた。

だんだんと腕が重くなる。飛び散る体液の匂いがこびりついて離れない。伸ばされる鋭い爪はやすやすと俺の頬を掻き切り、生暖かい血がどろりと流れ出る。

いくら刀を振るっても、魔物の数はまったく減っていないように見えた。何度刀を振り下ろしても、何度魔法を打ち込んでも、魔物は致命傷を与えない限り何度でも起き上がる。終わらない地獄に気が狂いそうになった。

「——ええい、どけ！」

俺が再び目の前の魔物に向き直った時、突然身体にどん、と衝撃が走り、俺は横に突き飛ばされた。

「、ちびっ子！？」

「貴様のようなむちゃくちゃな戦い方では倒せるものも倒せんわ！」

俺がはつと我に返ると、ちびっ子は自らの武器を眼前で構えた。

「正氣に戻れ！ただ滅多切りにするだけでは奴らを殺すことなどできん！」

ちびっ子の声が氷のように俺の心に突き刺さる。——そう、殺すのだ。

「奴らは頭さえふつ飛ばせば体は動かなくなる。いくら身体を傷つけても再生するだけだ！」

ちびっ子の声に、俺は体勢を立て直し、刀を構えた。気持ち悪さと吐き気をこらえ、明滅する赤を強制的に押さえ込む。

「……ああ、分かったよ」

俺はぐつと手に力を入れた。

「——もう、今までの俺とはお別れだ」

さあ、奴らをコロシニイコウ。

弾かれたように駆け出す俺の頭の中で、ひっそりと誰かの泣き声が響いた気がした。

俺はなぜこの世界にいるのか。

（本当は、世界から逃げてきただけ）

俺はなぜここに立っているのか。

（本当は、目的にすぎらなければ生きていけなかったから）

俺はなぜ刀を振るっているのか。

（——本当は、ただ自分のためだけに）

もう、お別れだ。

あの頃の脆弱な自分とは。

あの頃の臆病な自分とは。

あの頃の愚かな自分とは。

にい、と俺の唇が孤をえがいた。

王

「うおらああああ！」

全力で白刀を振りぬく。フルスイングした刀は白い軌跡を宙に残し、無理やり魔物の首をはねた。

纏った雷光の電圧で魔物の硬い皮膚を、その中の肉を、骨を、全てを焼き切る。

首が落ちた魔物は、ちびっ子がいったとおりすぐに動かなくなり、物言わぬ骸と化した。顔に付いた返り血を手の甲でぐい、とぬぐう。垂れた血が切れた頬を伝い、俺のものと交じり合った。

後ろから近づく気配に、俺は振り向くことなく呟いた。

「斬」

音も無く魔物の頭の半分が消し飛んだ。ぐらり、と傾いた魔物の体に、もう一度古代語を打ち込む。

「斬」

今度こそ魔物の頭が消滅し、肉塊が地に沈む。

最初は、古代語を使わずに魔語^{スベル}だけで戦っていたが、それだけでは追いつかなくなっていた。

もともと魔語は古代語より圧倒的に威力が弱い。

というよりも、魔語にこめられる魔力の量が限られているのである。

魔法には魔力の量と自身の技巧が影響する。つまり、魔力量が馬鹿でかくて繊細なコントロールが出来れば最強ということだ。

魔語なんかは特にそうで、器が小さいから魔力量の調節とかで俺からすればあまり使い勝手は良くない。

しかし、古代語は器の大きさが桁違いだ。

魔語の場合、魔力を器ぴったりまで注ぎ込めれば威力が強くなる。古代語であれば、魔力を注げば注ぐだけ威力が強くなるということだ。

「――斬――」

再び魔物の頭を落としたところで、周りを見回した。

生きている人間は、最初のほぼ十分の一にも満たない。ちらほらと固まって戦っている姿が見える程度だ。

この闘技場はかなり広い。今現在で魔物がどれくらい減ったのかは予想が付かないが、――。

おそらく、もう終わる。

「――父上っ!」

遠くのほうから、ちびっ子の声が聞こえた。

身体を反転させて振り向くと、まっすぐに玉座を見つめる姿があった。その横には、ちびっ子を守るようにゼロが立っている。

「なぜ、なぜこんなことを！」

ちびっ子は、必死な表情で叫んでいた。それも、そうだ。

周りは地獄絵図。

黒い体液と真つ赤な血が染み込んだ大地。

ぐちゃぐちゃに——臓物と脳髓を引きずり出され、もはやヒトに見えなくなってしまった人々。

同じぐらいめちゃくちゃに身体を損壊させ、その巨体を投げ出している魔物。

観客席にいるのはそれこそほんの一握りで、他の大多数はこの惨状に顔を青ざめさせて退出した。

——観客は、まだ運が良かった。

「降伏したもので見殺しにして……！」

ちびっ子の声が聞こえる。ほとんど慟哭のような、魂を裂く叫び。

「なぜ……！」

「——はじめに、言っただであろっ」

王が、初めて口を開いた。

「死んでは困るという人間は帰れ、と」

——氷のように冷ややかで、触れたものの全てを切り裂くような、抜き身の刀身のごとき鋭さ。

俺が見た彼の瞳には、ただ事象を見つめる観察者の色しか映されてはいなかった。

覚悟

「そもそも、“勇者決定戦”は文字通り命がけのもの。半端な覚悟しか持ち合わせぬ愚か者に用はない」

国王は、死ぬまいと必死に戦う俺たちを見下ろしながら言った。

「勇者とは、大勢いる民の平和のために全てを捧げる聖職者だ。その頭脳も、身体も、精神も、魂も、命も全て」

俺たちを冷ややかに見つめ、観察する国王の姿。

ちびっ子はそれを見て何を思うのだろうか。

「で、もっ……！」

顔を歪めて必死に叫ぶちびっ子を、国王は一言で切り捨てた。

「役立たずはこの国に必要な。ここで生き残れぬというのなら、そのまま死ね」

ちちうえ、と呼ぶちびっ子の悲鳴が聞こえたのは、気のせいだったのだろうか。

気付けば、俺は魔物の最後の一匹を倒し、ゼロとちびっ子の横に立っていた。

「ユウ様……」

ゼロが心配そうな声を出す。ちびっ子を見れば、蒼白な顔で震えていた。

ぼす、とちびっ子の頭に手を落とす。

びくり、とあからさまにおびえたちびっ子の金髪をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

「、ユウ、きさ、ま……」

「もう終わった。お前は寝とけ」

俺が言ったとたん、何かの糸が切れたようにちびっ子は意識を飛ばした。倒れないように支え、ゼロの横に座らせる。

ちびっ子を見た。そういえば、はじめて名前を呼ばれたとぼんやりと思った。

一度目を閉じて、俺は国王を振り仰いだ。

ちびっ子と同じ金の瞳、金の髪。

その“千里眼”で、俺は一体どう見えているのだろうか。

く、と口角が上がった。

「——おい、国王」

かちり、と俺と国王の視線が合った。

「俺はな、正直勇者になんかなりたいとこれっぽっちも思わねえ。魔王を倒す権利にも興味はないし、金貨一千万枚なんて現実味が無さ過ぎる」

死を選べば、突然放り込まれた異世界。

勇者になるために連れてこられた。勇者以外の道は一つたりとも無い。あのエセ神が許しはしない。

「ああ、勇者なんて幻の存在だよ。それなのに、ありもしないはずの魔法を覚えて、殺すための武器を買って、死なないための防具を身につけて。——そして今、魔物とやらを殺した。そのおかげで、もう決して元には戻れなくなった」

刀を突き立てれば肉を貫く鈍い音がした。飛ばした首は重く、ねばつく液体に寒気を覚えた。

それを知らなかった頃には、もう戻れない。

「もう言っちゃまうとな、俺はすぐに尻尾巻いて逃げ帰ってたかった。こんな事を二度としたくない。こんな面倒で生々しい世界から消えうせたい。そう思った」

「ならば、その通りにすればよい」

国王が薄い唇を開く。

「降参は許さぬ。ここから逃げたいのであれば死を選べ。今すぐ己

の首を刈り取ればよからう。そこらの骸にしたのと同じようにな」
「——でも、」

冷たい顔。慈悲なんてカケラも存在しない。為政者たるものの顔。
俺はそいつをまつすぐに見つめた。

「あんたが気に入くわねえ」

国王が、ずっと目を細めた。

「俺は決めた。勇者になってやる。顔も知らない他人のために人を
殺す偽善者になってやる。でもそのかわり、」

あんたの思い通りには絶対にさせねえ。

俺がそう言い放てば、国王はゆるりと口元を冷たく緩めた。

「我を敵に回すか、小僧」

「もともと、あんたとよろしくする気はなかったよ。それが露見す
るのが、少し早まったただけだ」

ちびっ子を思う。実の父親に真正面から拒否され、打ち捨てられ
た小さな子供。

——どうしても、重なる。

ちびっ子もゼロも。俺はもう決めてしまった。

自分を重ねて見てしまった。見捨てるなんて到底不可能。そんな

気はもとよりさらさらない。

俺は俺の偽善のために、こいつに喧嘩を売ってやる。

さあ、大安売りのバーゲンセールだ。

「覚悟しとけよ、国王陛下。あんたはいつかきつと、俺と出会ったことを後悔するぜ」

“勇者”として

“安らぎの樹”。与えられた部屋の中で、俺はベッドの上に寝転がっていた。

……………はあ。

口から出るのは俺の眠気と疲労と自己嫌悪が混ざり合った二酸化炭素。

国王に喧嘩を売って、その後。

生き残ったのは、俺たち三人と、二人組らしいパーティーの男女、四人組の男達。
それだけだ。

最初の参加者が約一万。第一回戦で三分の二が脱落。二回戦でまた三分の二。それ以外でも、勝てないと踏んで去っていく者は多かった。

それでも。

それでも、何人もの人々が、“勇者”を、栄光を、金を、希望を求めて、あの地に立っていたはずだったのに。

残ったのは、たったの、これっぽっち。

「……………はあ、」

吐く息が重い。まぶたを下ろすたびに、眼裏で明滅する光景。

血と肉と骨と臓物と。

ぎゅっと眉間にしわを寄せる。

ゼロとちびっ子は、この頃良く眠れていないようだった。昼間なら、ティズさんやヤブ医者、アーリアさんのどたばたで、まだ笑ったり怒ったりするぐらいの元気があるようだったが。

夜になるともうダメだった。

一人では寝れなくて、一つのベッドに三人で寄り添って眠った。暗闇に怯える二人のために、夜も明かりを絶やすことは無かった。何度もうなされて飛び起きた。

特にちびっ子がひどくて、ふとした拍子に表情をなくしていたのを見たときにはぞっとした。

勇者がどうした。なにが英雄だ。なにが聖職者だ。

俺たちは、まだ子供に過ぎなかった。

過ぎた力を与えられた、ただの無知な子供。夢見がちで楽観的で行き当たりばったり。

“現実”に突き当たれば、うろたえることしか出来なかった。

「……………」

無言で、両脇で眠る二人を見る。ようやく本格的に眠り始めたのか、寝息は深くなっていた。しかし、それでもときどき顔をゆがめる。

ゆっくりと頭をなでてやれば、少しごそそと動いて、再び丸くなる。その寝顔に年相応のあどけなさを感じて、ようやく笑うことが出来た。

ははっ……まったく、情けない。

俺は相変わらず、朝が来るまで眠れないままだ。

冴えた瞳であたりを見渡す。相変わらず、部屋の隅に怪しく潜む“視”の文字。

監視は続いているようだ。エセ神からもらった例の本には、古代語でも魔語^{スベル}でも、魔術には制限時間があると記されていた。持続的に効果をもたらすためには定期的に魔力を注いで、刻まれた語を消さないことが必要だと。

（消えないって事は、見られ続けてるってことだよな……）

あのくそじじいめ。

三回戦、それが終わってから約一週間半。

俺たちは、いまやすっからかんになってしまった“安らぎの樹”で寝泊りしていた。

相変わらず外出禁止。ほとんど人のいなくなったここはすっかり寂れてしまった。

せいぜい、毎日やってくるティズさんたちを相手に暇をつぶすことぐらいしか出来ない。

ティズさんたちは俺たちと一緒に泊まる事は出来ない。だから、毎日ギリギリまで残ってから帰っていくのだが。

毎回帰り際のアーリアさんの視線が恐い。もうギリギリ通り越して発光してそうな眼をしてんだよ！？

「ゼロになにかあったら切る」って！ もはや多少のかわいらしさを出していた「ちゃん」すら取られて殺意しか感じられないよ！

ヤブ医者は慰めのつもりかしないけど毎回突拍子も無いものばかり持ってきて悲鳴あげさせてるし。

前なんて笑顔で差し出されて何かと思ったたら毛虫がうじゃうじゃ入ってるフラスコだったし。

うわあああああ！あ、この世界にもフラスコあるんだ。って現実逃避しちゃったのは仕方が無い、うん。

生き残ったのは九人。この人数で、数日後にある“勇者歓迎式典”とかなんとかに参加するらしい。

その日から、俺たちの称号は“勇者”になる。
子供でいられるのは、後ほんの少しだけ。

「……んん」

小さくうなったゼロの髪をかき分けて、汗を軽く拭いてやる。

……腹はくくった。後悔はしていない。——俺は、もういいけれど。

この二人には、もう少し、時間を。

“子供”でいられる、夢と希望が詰まった、優しくて暖かい時間を。
与えてやりたいと思うから。

綺麗事だ。ただの、戯言。

この道を選んだのは二人で、これからを選ぶのも二人だ。それに対して、俺が勝手に哀れんで同情してるだけ。
だから、これは戯言。

勝手に哀れんで同情した俺が、勝手に動くだけだ。
そこに、こいつらが何かを思ふ必要は、ない。

拳を握り締めて、そっと詰めていた息を吐く。

うつすらと明るくなってきた空気の中、俺はようやく目を閉じた。

運命は、すぐそこまで迫っていた。

“勇者”として（後書き）

これで、“勇者決定戦”は終了です。いわば第一章ですかね。
次回からは、王宮を舞台に書いていきたいと思っています。

王宮（前書き）

長くなった。

八月二十五日修正

王宮

こつ、こつ。

硬質な足音が、磨き抜かれた白い石造りの床に響く。

普通の体育館の何倍あるんだよ、てな感じの広さがある大聖堂。
両脇には各地から集まった貴族がずらりと並んでいる。

そして真ん中には——玉座へと続く黒い絨毯^{じゅうたん}。

こつ、こつ。

その道の上を、歩く。

こつ、こつ、

こつ。

足音が止まる。

まっすぐあげた顔は、この国の頂上から俺たちを見下ろす為政者の冷たい視線に射抜かれた。

その口が、開かれる。

「——よくぞ来た。死闘を生き延びた戦士ども……」

大聖堂を満たす王の声に、まわりの貴族たちの背筋^{せすじ}が自然と伸びる。

低くゆっくりとした声。しかし、そこに一切の温かみはなく、まるで氷のようだった。

「こたび、魔王の存在が確認され、世は再び暗黒に包まれんとしている。魔物の異常行動も増え、民心には恐怖と不安が根付きはじめた。この闇を打開するには、魔王を消し去ることだ。それこそ、アイヤリム王国として民のためにしなければならぬことだ」

貴族たちは王の話に聞き入る。「有色人」と呼ばれる、彼ら。この場にいる“白”はゼロだけだ。

「我らがデイターレ神の神託により“勇者決定戦”を開催、そして今ここにるのが、勇者候補である選ばれし九人だ」

デイターレってのは……あのエセ神のことか？
その言葉に、貴族たちが王から視線を外して俺たちを見るのが分かる。

——特に、第二王子であるちびっ子、“白”であるゼロ、そしてその間にいる俺を。

特に、玉座に近いほうからの視線が多い気がする。この“黒”のせいだろうか。俺はただの日本人であって、“黒”ではないのだから、そうとしか見えないのだから仕方がないだろう。

ここで、つ、と王が俺たちに視線を合わせた。

思わず身体が強張るほどの圧倒的な威厳。なんてオーラだ。

ぐ、と拳を強く握り締める。だめだ、まだこいつには——勝てない。

「この時をもって、彼らを正式な“勇者候補”として認める。古の誓約により、“勇者”の称号を持てるものはただ一人。“戦争”が開始されるまでに、“勇者”を決めることとなる」

（“戦争”……？　もしかして、魔王軍との全面対決なのか？）

殺した魔物の姿が脳裏をちらつく。ぐつと息を詰めた。

「“勇者”の決定方法は簡単だ。この世は弱肉強食。強いものは生き、弱いものは死ぬ。——これら“勇者候補”のなかで最も強者だと認められたものを、“勇者”と認定することをここに宣言する」

~~~~~

「弱肉強食、な……。まあシンプルだ。分かりやすい」

俺は目の前の奴らを見回して小さくつぶやいた。

大聖堂を出た俺たちは、王宮の西にあるエーベルス宮に来ていた。“勇者候補”は全員ここに滞在するらしい。“安らぎの樹”とまでは行かないが、かなりの人数が入る宮だ。

その広間に、“勇者候補”全員が集まっていた。

壁にもたれている二人組と、真ん中に置かれている豪華な円卓の近くに集まっている四人組。そして、壁際にあつた予備の椅子に座っている俺たち三人。

この九人で、一つの椅子を奪い合う。

まあ、実質は三グループでどれが一番強いか、ということになりそうだが。

「やっぱ俺らが一番年齢低いよな……」

「当たり前だ。そもそも十代の子供が“勇者決定戦”に出場、しかも生き残ること自体初めてだぞ」

「言ってるお前が一番年下だけだな」

「“有色人”が半分、ですか……」

“有色人”は俺、ちびっ子、ゼロ、それに四人組の中の二人。リダーらしい男と、その横にずっと立っているやつだ。

「つーか男女比7：2っていうのが悲しすぎるな。過去に女性の“勇者”っていたのか？」

「ごく稀だがな。過去の事例は二度だけだ。しかし、その最近の方が魔王を倒した後に“勇者”の称号を振りかざして王権を握ってしまっただけ。一時期極端な女尊男卑状態になって、その後から女性の“勇者候補”は風当たりがきつくなったらしい」

まあその当時の国王もたいがい馬鹿だけだな、とちびっ子がつぶやいた。

……やっぱり、こいつも王族なんだなあ。

「王宮には女性の役人さんはいないんですか？」

「基本的に全て男が政治を動かしているな。せいぜい王族の血統のものが多少発言力を持つ程度だ」

「武官はどうなんだ。ほら、女騎士とか」

「普通女性の城勤めなら小間使いや侍女だからな。特に規制されてはいないはずだが、武官の中に女性がいるとは聞いたことがない」

ゼロの質問にすらすらと答えるちびっ子。こいつの頭の中にどれだけの知識が詰まっているのか……俺の脳みそのしわの少なさがよく分かる。

しかし、ちびっ子の話だと、城内にいる女性の数はひどく少ないようだ。まあ、女性禁制になっていないだけマシな組織だといふべきか。

ふと顔を上げると、壁際に立っていた二人組がこちらに向かってきていた。

思わず椅子の上で身じろぎする。それに気付いたのか、話し込んでいたゼロとちびっ子もこちらを向いた。

距離が近くなる。先に声をかけたのは女のほうだった。

「はじめまして、だな。あたしは傭兵のシーヴ・ガイストだ。こっちの仏頂面はテオドロ・ペリッツォーリだ。同じく傭兵」  
「……………」

ひょうひょうとした雰囲気的女性だ。髪は赤毛で長め、後ろで一つにまとめていた。瞳の色は茶色。

その後ろに立つ男はやけに威圧感があって目つきが鋭く無表情だった。

……なんか恐いんだけど。第一印象で相手をひるませるのはアリアさんにも勝てるかもしれない。こげ茶色の髪を短く刈り込み、目は鮮やかなブルーだ。

男の強い眼光にややひるみながらも挨拶を返す。

「あ、ああ。俺はユウ・クロキ」

「私はゼロといいます」

「……キール・アイヤリムだ」

ゼロはさつと俺の背中に身体を隠し、顔だけ出して二人にお辞儀をした。ちびっ子はいえ足と腕を組み、そっぽを向いている。さっきのペリなんとかさんに負けず劣らずの仏頂面である。

「同じ“勇者決定戦”を勝ち抜いたものとして、そして“勇者候補”として、共にがんばろう」

女性のほうが、にこやかに笑って手を差し出してくる。

共に、ねえ……。

俺は、ちらりと後ろの二人を見た。

ゼロはいまだに俺の背中に張り付いているし、ちびっ子は二人のほうを見ようとしめない。

「——はい、お互い全力を尽くしましょう」

そう言って、俺は彼女の手を取ることなく頭を下げた。

……しばしの沈黙の後、すつと腕が引かれる。

頭を上げると、彼女——ガイストさんは、先ほどのような外向きの笑顔ではなく、素の顔を見せていた。

面白いものを見つけたような、言っなればにやりという擬音がつく笑いだった。

「ふ、ふは、ふはははは……面白い少年だね君は」

「……そりやどーも。けどどっちかっていうと少年より青年だと思  
うんだけどなー俺」

ふはははと笑い始めた彼女にちよつと引きながら返事を返す。ふ  
ははって悪役の笑い方じゃね？

また口を開こうとした彼女に、先に声がかかった。

「……………シーヴ。やめろ、迷惑しているだろう」

「ふは、ふはははは、おや、テオドロじゃないか、ふははは」

……………なんか笑いすぎじゃねガイストさん。なんかヤブ医者  
のネジの取れ方と似たようなものを感じるんだが。最初はまともそう  
な人だったのに……

つーかおや、ってテオドロさんの存在に気付いてなかったのか。

……あれ、さっき自己紹介しなかったつけ。

あ、テオドロさんの名字は諦めた。聞き取れなかったし言いにく  
そうだったし。

「すまないな、連れが迷惑をかけた」

「え、あ、いえ。大丈夫ですよ」

「迷惑なんて、ふは、ふはははは」

「シーヴ」

「ふっふふふふはははは」

「……………」

……テオドロさんはテオドロさんで顔が恐いし。ただ話してるだ  
けなのに不機嫌そうに見えるのは顔つきのせいだろうか。なんか顔  
を直視したくないっていうか、目つき悪いんですが……。

笑い続けるガイストさんと、じつとこちらを見つめるテオドロさ

ん。

……おねにどーしろっていうんですか？

## 会話

ガイストさんは一体いつ笑い止むんだろうか……。

俺たちの前に二人がやってきてから早数十分。

変わらずガイストさんはひたすら笑ってるしテオドロさんは何を  
するでもなく、けどなんか俺に視線を合わせて立ってるし。

「ふは、ふふふははは、そうか、あはは、ふふ」

「……………（じー）」

「……………」

そろそろ誰か何とかしてっ……………！！

何なのこの二人……………何なのこの二人！

いいかげんにしろよお前ら！ 何が楽しいんだよ一体！

おま、ゼロとかちびっ子とかもう興味なくして二人で喋ってるん  
だからな！ 俺もそっちに混ざりたいのに、なんで見てくるんだよ  
テオドロさん……………！ あんたの視線が怖いよ！ 目エそしたら殺  
られそうな気がする！

っーかガイストさん人の顔見て再び笑い出すな！ 失礼な！

「……………あのー、テオドロさん」

「……………」

「相方さん、なんかネジはずれちゃったみたいなんですけど」

「……………」

「……………」

「……………あれで通常運転だ」  
「まじすか」

最初の頼れるお姉さんの印象が吹っ飛んで粉々に砕け散った気分だ。

そしてテオドロさんの会話のテンポが遅い。

すると、ふ、と突然部屋に響き渡っていた笑い声が消えた。

何事かとテオドロさんから視線を外してそちらを見ると、ピタリと動きを止めたガイストさんがいた。

先ほどは心底可笑しそうに笑っていたのに、いきなり彼女は完全に静止していた。微塵も動かず、なぜか目を閉じていた彼女はスツとまぶたを押し上げ、テオドロさんを見た。

俺もえ？ とテオドロさんを見ると、彼はガイストさんに頷いていた。

「……………それでは諸君、さらば！」  
「……………失礼する」  
「え、はい！？」

二人はさつと身をひるがえすと、どこか早足で広間を出て行った。二人分の足音が遠くなる。俺は呆気にとられてそれを見送った。  
……………一体なんだったんだ？

お子様二人組に聞いてみようと思つて後ろを振り向く。

——が、そこにいるのは二人だけではなかった。

「……………誰？」

いまだ手足を組んで不遜な態度をしているちびっ子に、あわあわとしてるゼロ。」

そして、四人組のうちの一人と思われる人物。

金髪青目のハニーフェイス。年は俺より一つ二つ上に見える。にっこりしたこと笑うそいつはガイストさんとは違う意味で食えないやつに見えた。

「ねー、君あの国王の息子なんでしょう？」

「……………」

「あいつが父親ってどんな感じなのー？　ねえねえ」  
「……………」

ちびっ子、ガン無視

むしろちびっ子よりゼロのほうが慌てている。

しかし、会話に入ろうとはしない。それどころか、ハニーフェイスからやや身を引いているように見える。……………なんでだ？

あれか、子供にしか感じ取れない禍々しいオーラとかでてんのかコイツ。

じ、とハニーフェイスを見つめていると、バチッと目が合った。その瞬間相手は満面の笑顔になる。

「やあ、君が噂のリーダー？」

「……………なにが噂なのかはさっぱり分らないんですか」

「えー、子供二人を引き連れて“勇者決定戦”を勝ち進む謎の“黒”。しかもその子供の一人が“金”で一人が“白”なんだからそりゃ噂にもなるんじゃない？」

ねえ？ と笑顔で言うハニーフェイス。

まあそりゃ確かに目立ってたとは思っけど。自分でも異様な組み合わせだと思っし。

「しかーも、その“金”がなんとあの第二王子なんだもんねえー」

……あの、ってなんだ、それ。

その一言にますます機嫌を悪くしてそっぽを向くちびっ子とますます笑みを深めるハニーフェイス。

……あのー、いいかげん部屋に行かせてくれませんか？

知らない

そろそろこいつから解放されたいッ……！

「ねえ、こんな子供ばかりで“勇者決定戦”を勝ち抜いたのってさ、一体どんな手を使ったの？」

「しかも“使えない第二王子”になんの力も持たないはずの“白”の女の子」

「そのうえリーダーは“黒”で、なのに他の“黒”には知られてないみたいだし」

ぺらぺらぺらぺらぺらぺら。

さっきから休みことなく質問し続けてきて、こいつが口を開くたびにちびっ子の周りの空気の温度が下がっていつてゐるんですけど。そろそろ零地点突破しそなんだけど！

俺が口を挟もうとしても、ことごとくさえぎられてしまう。なぜか男はちびっ子一人に話しかけ続けた。その良く回る口を激しく縫い付けたい。

柔らかかそうに天井からの光を跳ね返す金髪に、愉しげに細められた青い目はぶっちゃけイケメンだ。女に声をかけたらまず断られることは無いだろう。かもし出す雰囲気もどこか甘い。というか若干甘ったるい。

しかし。

いくら表情が笑顔でも、その声音が優しげでも。

——人の悪意つてもんは、ストレートに伝わってくる。

その目に映るかすかな侮蔑と傲慢の色。

ちらちらと見え隠れする無遠慮な言葉の棘。

ちびっ子はそれを確かに感じ取り、今ではもう相手に完全に背を向けていた。

それでも、その声は耳に忍び込み、幼い心を簡単に揺さぶる。

「ねえ、“蕾の王子”サマ。ちょっとは答えてくれたっていいんじゃない？」

聞いてもいないのにこいつがしゃべったのは、ちびっ子に関する決して良くは無い話だった。

——“蕾の王子”。

王族の特殊な能力、千里眼。

あらゆるものを見通し、万物を支配できるその力、その瞳。

光の象徴である金を授けられた、神に選ばれた血縁のみが所有するその力を、ちびっ子はきちんと開花させていた。それこそ、その年齢では出来すぎているほどに。

——けれど。

「まあ、君がお兄さんのことを話したくないほど嫌ってるのは知ってるけどさー」

彼の、兄。この国の“第一王子”は。

冷静沈着、冷酷無比。冴え渡る頭脳にその冷たい美貌。軍人としての実力も、王宮騎士の隊長格とほぼ互角というのだから、まごうことなき天才である。

現在俺より一つ上の齡十八という若さでありながら、現国王の補佐を見事に努めているその手腕。

そして、その青年は“瞳”の能力を完全に使いこなしていた。

空間把握能力、ある程度の先読み。それぐらいならちびっ子でも出来る。

——青年の力はそれを軽く越えていた。

遠視、気配の察知、心情の察知、近未来に限られるがおおまかな未来視。

それらすべてが、出来た。

それは、ある意味異常なほどに。

「国王すらかなわないその実力。母親も正妃だし、血筋も権力も十分。それに比べて、君は中位貴族の妾妃の生まれ。まあ、実力はその年にしちゃそれなりなんだろうけど」

現国王であるあのくそじじいでさえ、せいぜいが遠視とある程度の心情の察知だ。第一王子はその能力で父すらも越え、ほとんど国

一番の実力者といってよかった。

今でこそ現国王と対立せずにその補佐を努めているものの、彼が一度兵を挙げれば勝敗は分らないといわれているほどだ。

“出来すぎた”兄。“普通以上”の弟。

比較される。どちらが上でどちらが下か。そんなことに何の意味があるというのか。

そして彼らは第二王子を“蕾の王子”と呼んだのだ。

「いつまで経っても開花できない“蕾”のまま。見事に花開いたお兄さんとは違って、君はそのまま枯れていきそうだね。君の年でさえ、彼は“瞳”の力を大いに引き出していたっていうのに」  
「……………」

「——そりゃ、国王から愛想つかされても仕方ないよねえ……………」

ぎり、とちびっ子が歯を食いしばったのが分かった。

その小さな手にますます力がこもる。握り締めすぎた掌から、皮膚を食い破った爪を伝って赤色がのぞく。

相手はニコニコと笑っていた。心底愉しそうに。冷たい歓びに唇を緩めて。

——もう限界だった。

すっと立ち上がる。それに気付いたゼロが不安げな顔をして俺を見る。それを視界に入れながら男に歩み寄ると、俺の動きを目に留めた男がこちらを向いてん？ と笑みを浮かべた。

その作り物のような顔をめがけて、——全力で拳を振り下ろした。

速さはそれほど無い。男はゆるりと唇を吊り上げて顔の前で手を構えた。十分に捕まえられると思ったんだろう。

——なめんな。

「お前はもう……黙っとけッ！！！」

その構えられた手ごと、男の顔面を思いつきり殴った。

ゴキ、と鼻っ柱が叩き折れた音がした。男が座っていた椅子が悲鳴をあげて砕け散る。そのままの勢いで男の頭を、見るからに硬そうな石造りの床に叩き付けた。

ごおん、と鐘を打ったような重い音が響いた。

俺はぱつと男の顔から手を離した。見事に鼻の骨が折れ、鼻血を流しながら男は気絶していた。最後に手加減した俺、よくやった。多分あのまま全力で床にこんにちはさせたら、きつとこいつは天使とこんにちはしていたことだろう。悪魔かもしれないが。

男の鼻血がついた手を男の服でふき取って、手をパンパンと叩いて汚れを落とした。

呆けたような顔で俺を見ていたちびっ子とゼロの首根っこをつかみ、部屋から出て行く。

後ろに、男の仲間たちの視線を感じたが、知ったこっちゃ無かった。

## 頑張ること

「き、貴様！ 何を、何をして……！」  
「うるさい」

呆然としていたちびっ子がはっと我に返り、俺を睨みつけて怒鳴った。それを一刀両断して、二人の首根っこをつかんだまま長い廊下を歩く。

アイヤリム王国のメインカラーである金が他の赤や銀の色に囲まれた廊下は、隅まで磨き上げられて綺麗だった。ところどころに配置された調度品は華美になり過ぎることなく、上品な美しさを保っている。

そんな廊下に目もくれず、俺は伝達されていた俺たちの部屋へと足を進めた。左手でつかんだちびっ子が何か言っているようだが無視する。逆に、右手でつかんだゼロは酷く静かだった。

部屋の前に着き、一度二人を下ろしてドアを開ける。地面に足がついた途端にちびっ子が飛び掛ってきたが、再び片手で押さえ、おかしなくらいに喋らないゼロが開けてくれたドアをくぐった。

~~~~~

部屋も廊下と同じように、なかなか豪華だった。いまだ一人で

眠ることの出来ない自分たちのために、頼んだ部屋は三人部屋。

そこでちびっ子を捕まえていた手を離した。

「き、さま……！ 一体、何を考えている！」

「何も？」

すぐさま噛み付いてきたちびっ子に端的に返し、ベッドのうちの一つに腰掛けた。ティズさんに教えてもらい、“勇者決定戦”までの間寝泊りしていた“黒の巣”よりもさわり心地がいい。やはり質が高いのだろうか。

「ふざけるな！ おれ、俺は、貴様などに助けてもらわずとも、あの程度の輩……！」

「助ける？ 何言ってるんだ、お前」

「な、に？」

ちびっ子の言葉に反応して問えば、ちびっ子の動きが止まった。驚いたような、困惑したような。

そんなちびっ子に、俺は呆れたように言った。

「あんなもん助けるっていわねーよ。っーか俺の八つ当たりだし。まあ、あの場面で動いていいのかぶっちゃけよく分からなかったけど、我慢の限界だったし」

俺がああいうつく男の鼻っ柱を文字通り叩き折ったことで、あの男のパーティーとの関係は一気にマイナスになった。うまくやれば味方に出来たかもしれないのを、自分の私情で簡単にぶち壊してしまった。

「怒るのは分かるし、謝るけど。軽率だったけどさあ……俺無理だわ。うん」

「……なにがだ」

「お前をあそこまでコケにされて怒らないこと」

俺はいまだ戸惑っている様子のちびっ子をちよいちよいと手招きした。横に立っていたゼロと共に、恐る恐るといった風に近寄ってくるちびっ子の手を取り、そつと開く。

その小さな掌に残るのは、赤い鮮血と心が感じた傷。自らの手を見たちびっ子は、目を丸くして驚いていた。まるで、その痛みにさえ気付いていなかったように。

両手でそつと包むようにしてちびっ子の手を持つ。

「“癒”」

柔らかい光がそつと傷を癒していく。この部屋にも監視の目があるかもしれないということは、頭から消えうせていた。それに、“勇者決定戦”で散々使ってしまったし。今さらだろう。

完全に傷が消えてなくなったところで、魔力の供給を止めた。ちびっ子の掌を何度かなでて、皮膚がなめらかに戻っているのを確認する。

「……普通さ、手をどんなに強く握ったって、血なんて滅多に出るもんじゃないんだよ」

俺はぼつりと、つぶやくように言葉を落とした。

「途中でやめちゃうんだ。誰だって痛いのは嫌だから。それなのに、お前は必死に我慢して、痛みすら分らないほどに耐えてた。……頑張ってた」

自分が耐えれば済むことだから。

その身体を丸めそうになるのを必死にこらえて胸を張っていた。歯を食いしばって、震えないために手を強く握り締めて。

この場所で生き残るためには出来るだけ味方が欲しい。多ければ多いほど、生き残る確率は上がる。そのために、この少年は。

悲鳴をあげる心を封じ込めていた。泣きそうになるのをこらえてまだ、十を超えたばかりなのに。

「その頑張りを無駄にしたのは俺だ。ごめん。謝る。――でも」

俺は力なく笑った。

「頑張ることも大事だけど、頑張りがすぎないのはもっと大事だ」

少しの沈黙の後、ちびっ子は顔をうつむけたまま言った。

「……そんなもの、戯言だ」

「ああ、そうだな」

「ただの、たわごと、だ……」

ふらりと傾いた体をそっと支えてやる。もう、気力の限界だったのだろう。今日は色々なことがあったし。

ちびっ子をベッドに横たえて、身体を正面に向きなます。

「……ゼロ、どうした」

——泣きそうに顔を歪めている、少女は一体どうしたのだろ
うか。

しろ（前書き）

シリアスパートが終わらない……。
ギャグをかきたいけど王城ってシリアスなネタしか思いつかないんだよな！。

しろ

「……ユウ様は、」

ぼつり、とゼロは下を向いたまま話した。

「ユウ様は、“黒”です。キール様は“金”。お二人とも“有色人”です」

「そうだな」

「……私は、“白”です」

「……そうだな」

ゼロの身体は小刻みに震えていた。それは一体、どんな心境からくるものなのだろうか。

……恐怖、なのか。

「普通なら、喋ることはおろか視界に入り、目を合わせるだけで首が飛ぶ。そんな身分差です」

「……」

「今でこそユウ様に助けられ、ユウ様の“所有物”であることで、私は“勇者決定戦”に出場し、それどころか王城に足を踏み入れています。……本来、ありえないことです」

「……なあ、ゼロ」

俺はゼロに、出来るだけ優しい声音で呼びかけた。

「お前は俺の“所有物”なんかじゃない。そういつても……無駄か」
「無駄です」

ゼロはすぐに答えた。

「……いえ、むしろユウ様のものでない私に、価値はないのです」

「そんなこと、」

「価値はないのです、ユウ様」

俺の言葉をさえぎってゼロが言う。まるで自分に戒めるように、強く、強く。

「ユウ様と共にいなければ、私は愛玩用の奴隷としての存在しかありません。……白^{ハク}としての、存在しか」

白^{ハク}。……俺が新しく名前をつける前の、ゼロの名前。

「だから私は、ユウ様に感謝しています。この身の全てを捧げることも出来ます」

「……全てを？」

「はい」

ゼロは頷いた。

「この身体も心も力も知恵も、私が持てるもの全て、あなたのものです。たとえユウ様が否定されても、それは変わりません」
「……………」

俺は、ゼロの表情に違和感を覚えた。

ただ悲しいだけじゃなく……何かを決めたような、顔。

……何を、言う気だ？

「だから……だから、」

ゼロは、意を決したようにバツと顔を上げた。

「これから、特に王城内では、私があなたのものを否定しないで下さい。……お願い、します」

「……理由は？」

「……………」

「——あのふざけた男に、何か言われたのか」

すつ、と瞬間的に冷たくなった空気にも、ゼロは俺を真っ直ぐに見つめたままだった。

白い瞳。無垢で純粹で穢れなき少女。

「——、分かった」

俺は口から出そうになった言葉を一つ飲み込んで、ゼロにしっかりと目を合わせて頷いた。

その言葉に、ゼロが目に見えてほっとするのが分かる。

俺は空気を切り替えるように声を上げた。

「さあ、飯の時間になるまで昼寝でもしようぜ。きっと誰かが呼びに来てくれるだろ」

「はい！」

いそいそとベッドに潜り込むゼロに小さく笑って、俺も布団の中に入った。

「——おやすみ」

~~~~~

静まり返った部屋の中、ゼロは薄く目を開いて思いにふけていた。敬愛する主は寝ようといってくれたが、眠気はまったくいいほどに無かった。

それでも、自身を眠りへ誘おうと目を閉じる。

「……………」

「——あのふざけた男に、何か言われたのか」

主の言葉が頭の中で反芻される。

主は鋭かった。特に人の心の機微に。それは、ゼロが思っている以上のようだった。

（確かに、あの人がいった言葉で、私は揺さぶられている）

あの、食えない笑顔の男。

その男の言葉のほんの一部。

「——その“白”は、気がついたら消えていそうだしね」

棘のある笑顔で言われたその言葉を、主は知らない。確か、横で二人の男女と話していたから。

ゼロはそのことに安堵する反面、主にこのことを言ってしまったかった。しかし、言うことは出来ない。言いたくない。

最下層に位置する“白”が、上位の貴族たちの目に触れる。それがどういうことか。

短気な貴族なら汚らわしいとされる“白”を真っ先に殺そうとするだろう。

誇り高い貴族なら王城に足を踏み入れた“白”を嫌悪するだろう。賢い貴族なら後の争いの芽を潰そうと“白”を取り込もうとするだろう。

——その道のいずれも、ゼロが“ゼロ”として生きることが出来る道はない。

全ては“白”——<sup>ハク</sup>白として。

主に所有物と認めてもらう理由。それは醜い自己保身。

王族と肩を並べる“黒”のものならば、安易に手を出すものはいないだろうから。

（本当は、キール様に頼ってしまいたいけれど……）

ほとんど年の変わらない、この国の第二王子。主とは違い自他共に“金”だと認められている彼のほうが、影響力は強いに違いない。

けれど。

（あの人は、キール様を見下していた……）

ずっと笑顔を貼り付けたままの、あんなふざけた男にさえ下に見られる。ということは、キールの王城内での立ち位置がどれほど安全なものか分らない。

ゼロは権力や身分といったものに聡い。そうでなければ生き残れなかったからだ。

国境付近を同じ“白”たちと転々としながら、行く先々で迫害を受ける自分たちは。

だから、ゼロは自分の保護者としてキールを切り捨てた。

（……ごめんなさい）

じんわりと、涙がにじみ出る感覚がして慌てて顔を枕に押し付ける。泣き声を漏らさないようにするだけで精一杯だった。

（ごめんなさい、）

変わらぬ年で、むしろゼロより背丈がほんの少し小さいあの少年は、必死に認めてもらおうとあがいているのに。

その“仲間”であるはずのゼロが、彼を認めていないのだ。

（ごめんなさい——）

押し寄せる自責の念と罪悪感に押し流されるようにして、ゼロは夢の中へと引き込まれた。

どうせ今日も、いい夢は見れない。

本当は分かっている。

あのいけ好かない男の言葉が無くても、自分は同じ行動を取り、同じ決断を下しただろう。あの男に責任を押し付けても、全ての咎はゼロのものだった。

ゼロは、自分が嫌いだった。

しかし、これからもそれは自分は変わらないことを知っていた。

変わる事が出来るのに変わらない。そんな自分が、なによりも嫌いだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8024m/>

---

クロキ ユウ の ぼうけん

2011年10月14日22時44分発行